

鬼滅の金庫番

新グロメント

「鬼滅の刃」と似た世界に生まれた裏金銀治郎。

鬼殺……改め、鬼滅隊の金庫番とし、組織運営を密かに支える仕事人であった。襲いかかる資金難に立ち向かう。

知っているか……鬼は、人間をたべると言うが——人間だって、鬼を食い物にする。

人類が何千年も栄えている力をみせてやる!!

目次

01	.. 始まり	1
02	.. 壁ドン	15
03	.. 胡蝶しのぶ 30歳	29
04	.. 鬼畜	43
05	.. 企業戦士	57
06	.. 勘の良いガキは嫌いだよ	69
07	.. そうだ京都、行こう	81
08	.. お客様のお呼び出しを致します	93
09	.. 全て上司が悪い	105
10	.. ハローワーク	119
11	.. 等価交換	131

- 12 .. 珠世所長
- 13 .. お前がママになるんだよ
- 14 .. 直ちに影響はない
- 15 .. お前が言うな
- 16 .. 夢と現実
- 17 .. 汚される思い出
- 18 .. ローションがなければ死んでいた
- 19 .. 大体、貴方が悪い
- 20 .. 鬼と仲良く
- 21 .. リーサルウェポン
- 22 .. 男の娘_こ
- 23 .. プチ柱会議
- 24 .. ハメられた(意味深)

25 .. 気持ちには、本当に分かります

01..始まり

意図的に、鬼殺隊から鬼滅隊に変えております@@
似た世界的な意味でね!!

「鬼滅の刃」面白いです。

なので、こういう展開もありかなと思いついて投稿してみる。
需要があれば嬉しい。

人の世をはばかり「鬼」と呼ばれる者が存在する。

「鬼」の主食は人間であり、人とは相容れぬ存在だ。「鬼」は、人より強靱な肉体を持ち、特殊な方法でしか殺す事ができない。極めつけは、全盛期の肉体を持ち、不老不死という特性だ。

1 01：始まり

それほどまでに人知を超越した存在が、世界の頂点に君臨できないのには理由が

ある。

「日光を浴びると灰になる」「生殖機能を備えていない」というのが致命的な欠点だ。

「日光を浴びると灰になる」——これは、鬼が消滅するという意味である。世の中、日照時間中、活動ができない。日の出及び日の入りの時間帯を考えれば、活動時間は大きく削そがれる。よって、「鬼」達は、日陰に隠れて過ごしている。

「生殖機能を備えていない」——これは、鬼が子孫を残す事ができないという意味である。ならば、どのように増えるかというと、鬼の始祖的存在の鬼舞辻無惨が血を分け与える事で人が「鬼」へと変貌する。すなわち、一人の男が夜な夜な歩いて、日本各地を回りセコセコと種付けでなく、血を与えて回って増やすという地味な作業だ。

それだけならば、「鬼」という種族が世界を闊歩かつぽしてそうだが、どのような勢力に対しても反抗勢力という物は存在する。それが、鬼を狩る鬼滅隊という組織だ。鬼滅隊は、鬼を駆逐するために、日光が蓄えられた鋼で造られた刀——【日輪刀にちりんとう】
という刀を作り上げた。その刀で、日輪刀で「頸くび」を落とすことで絶命させられる。

そして、そんな鬼滅隊に勤めているのが、裏金銀治郎という冴えない中間管理職である。

この世に生をうけて、30年……数々の鬼達を葬り、柱にまで上り詰め、五体満足で引退した。その実力は、今の時代の柱と比較すれば一段劣っている。現柱達は、歴代最強だと名高い者達なのだ。

裏金銀治郎……鬼滅隊の資産運用を一任されている男だ。鬼狩で得た給与を資産運用で何倍にも増やした手腕を買われたのだ。

大事な事だが、裏金銀治郎は資産運用が得意という訳ではない。将来的に繁栄する会社を知っているだけだ。だからこそ、何の憂いもなく全資産を投資に回せる。言わば、インサイダーというに相応しいだろう。

だが、別に悪いことではない。将来のため、頑張っているだけにすぎない。鬼滅治が終わってからの生活も考えれば、貯金しておくのは当然だ。大正の世は、昭和や平成、令和のように社会保険制度は、充実していない。自分の身を守れるのは自分だけなのだ。

自らの将来を守りつつも裏金銀治郎は、今日も真面目に仕事に取り組んでいた。

各所から上げられてくる報告書を取りまとめ、かかった費用を精算する。そして、隊員達の給与が滞りなく届くように手配を怠らない。

鬼滅隊という組織の中で、誰よりも真面目に組織運用を頑張る裏金銀治郎は、今、頭を悩ませていた。

「持ってあと一年……【鬼滅の刃】の原作だと、そんな事は無かったぞ。俺のせいなのか」

目下の重要課題は、金の調達方法だ。

裏金銀治郎は、本来の歴史ならば自らのポジションに未来を見通し、資産運用を完璧にこなしていた陰の立て役者がいたのではないかと考えたのだ。

だが、それが事実であったとしても、今更どうしようも無いのが現実だ。

鬼滅隊とは、政府非公認の組織である。これが何を意味するかというと言わば、個人事業主が日本各地に潜む「鬼」を数百人も居る社員を率いて倒すボランティアだ。なぜ、仕事ではなくボランティアかというと、「鬼」を殺したところで誰もお金をくれないからだ。

勿論、鬼から助けられたという人達が善意で寄付などをしてくれる事も多い。だ

が、数百人の組織の維持管理費用、お国に納める税金。いかに、産屋敷の家が国内屈指の大富豪であったとしても、限界がある。

現当主の産屋敷耀哉は、鬼滅隊第97代当主だ。病弱ながら知に優れ、築いた財で鬼滅隊を支えているが、それも時代錯誤であった。近代化された社会の中で、家柄だけが古いだけではどうしようもない。

それに危機感を覚えて、裏金銀治郎は、産屋敷耀哉に資産獲得の為の案を提案したことがあった。鬼滅隊を政府高官や有権者達のボディガードとして派遣し、金銭を得るという物だ。特殊な呼吸法を取得した鬼とも対峙できる人型兵器といっても差し支えない隊員達を守るのだから身の安全は保証されたような物だ。金だけでなく、政府にコネ作りもできて一石二鳥という名案であった。実現の為、賄賂を詰み有権者から政府高官までコネクションも築き上げていた。後は、当主である産屋敷耀哉の承認サインだけであったが、不許可であった。

このままでは、鬼舞辻無惨を倒す前に鬼滅隊が破産する。鬼滅隊の隊員は、特殊な呼吸法を身につけており、職を失えばどうなるか……犯罪者にでもなられたら、笑えない事態になる。

「鬼」という明確な悪があり、それを恨む者もおおい。そんな対象を殺して、お金がもらえるからこそ、鬼滅隊という組織が成り立っている。やはり、やるしかない……」

裏金銀治郎は、決意した。生き残り、鬼を駆逐するため、いかなる手段も辞さない。

……

……

…

産屋敷の館の一室で、産屋敷耀哉と裏金銀治郎が対面して座っている。テーブルには、組織の現状を纏めた資料があり、お付きの者が目が見えない産屋敷耀哉の為に読み上げる。

その内容を耳にし、部屋の空気が重くなる。

頭の良い産屋敷耀哉は、読み上げられた資料だけで事の重大さを理解した。だが、産屋敷耀哉とて、見て見ぬふりをしていたのではない。神職の嫁を貰っている家系である為、親族達の実家に援助の依頼を度々依頼している。加えて、藤の家と

呼ばれる鬼滅隊を支援してくれる家に対してもお礼状と共に、支援の依頼をしていたのだ。

だが、その成果は、芳しく^{かんば}なかった。どの家にも生活がある。余剰分を利用しての支援ならまだしも、自らの分まで削って支援など行うはずもない。

現在社会において、情に訴えるという手段は古いのだ。何事もギブアンドテイクの時代である。

「お館様、鬼滅隊という組織が大事なものは理解しております。しかし、このままでは破綻を逃れられません。どうか、例の件について、許可を頂けないでしょうか」「どうしても他の手段はないのかい？」

親が子を諭すかのような菩薩の声で、産屋敷耀哉が口を開く。

人は、霞を食っては生きていけない。それに、過去の遺産を食いつぶして、食いつなぐのも限界だ。組織を維持するためには、商売をしないとダメなのだ。

現に、マフィアだって麻薬や銃などを売り、資金を集める。何かしら商売しなければ、金はなくなる一方である。

「毎月数百人分の給与。鬼退治で怪我をした者達の治療費。必要物資の手配や各地

方警察への賄賂など……このままでは、後数ヶ月のうちに残る資産は、消えてしまいます。現状、資産運用する資金すら確保できていません」

廃刀令が施行された時代……刀を持った鬼滅隊が逮捕されないのは、根回しをしているからだ。それも全国にだ!!

「だが、銀治郎が持ってきた案件は、鬼滅隊の根幹を揺るがしかねない内容だ。もと柱である君が理解できないとは思えないが」

「人は、食わねば生きていけませぬ。それに、金の切れ目が縁の切れ目という諺もごさいます。確かに、鬼に恨みがある者達が集まっている鬼滅隊ではございますが、今では金のために鬼を狩っている者達も少なからずおります」

ちなみに、裏金銀治郎は金のために鬼を狩る代表格である。

鬼滅隊という組織に入隊した者達……その大半が、学歴社会においていかれた社会不適合者達なのだ。そんな連中を鬼滅隊につなぎ止めているのが、「恨み」と「金」だ。だが、人の感情は浮き沈みが激しい。時間が経つに連れ、心は癒やされる。すなわち、そんな連中は「金」の為に鬼を殺しているのだ。

真実とは、劇葉だ。

裏金銀治郎がいう事が事実である事は、産屋敷耀哉にも理解できた。二人がいる一室も過去には、壺や絵など価値ある調度品が多数飾られていたが、今では綺麗さっぱり無くなっている。金になる物は、だいたい質屋に売られて金に換えたのだ。「——少し、考える時間をもらいたい。近日中に、回答を出そう」

「承知致しました。こういう言い方は卑怯かも知れませんが、お子達により良い形で家を継がせるのは大人の責務でございます。その為にも、ご英断を期待しております」

裏金銀治郎は、一礼をして部屋を退出した。

二人が会談を行ったテーブルの上には、二つの計画書が残されていた。

一つ目は、「強化人間計画」という物だ。内容は至って単純であり、隊員全員の能力値の底上げ計画である。しかも、費用対効果は特上であるのは間違いなかった。鬼を食べる事で身体能力が向上するだけで無く、治癒能力も上がることは既に臨床実験で判明していた。場合によっては、肉体的な部位欠損すら治癒可能だ。勿論、表だって実行すると隊員達から不満が出る事は必須である為、選ばれた者達のみに施すといった内容だ。

「治療費が減るだけで無く、生存率も跳ね上がる。加えて、引退した柱達や実力者を現役復帰させる画期的な方法がコレという訳か」

ため息をする産屋敷耀哉。肉体的欠損まで復元でき、全盛期の肉体に近づけるなど恩恵は計り知れない。歴代最強の柱達に加え、引退した柱達も加われば、一気に鬼を殲滅できる可能性すら見える計画である。

しかも、実践するに当たり手間も費用も全く掛からないというコストパフォーマンスだけをみれば、完璧な施策だった。外部の手を借りずに、鬼を自分の代で駆逐できる可能性がある一番確率の高い計画なのは疑いようが無かった。

二つ目は、「資金調達」に関する計画書だ。一つ目の計画から派生といっても過言では無い。世の中、金で健康や若さを買いたいという輩は多い。そんな者達に鬼の血肉を錠剤化して、売るという計画だ。鬼を増やせるのは鬼舞辻無惨だけだ。この方法で、鬼が増えないのは判明している。更に、薬の売り先は後ろ暗い商売をしている者達に限定するという事なので、万が一副作用があったとしても誰も困らない。

「幻聴などに悩まされる副作用があったと報告書にあったが――」

金に余裕があるときならば、下らない計画と破棄できたが、台所が火の車である鬼滅隊だ。



数日後、裏金銀治郎は荷造りをしていた。

産屋敷耀哉からの回答次第では、即日鬼滅隊を抜けてるつもりで居たのだ。理由は、簡単だ。無駄に忠誠心の高い柱達ならば、無給で鬼狩りを続けるだろう。そんな者達が、敬愛する産屋敷耀哉に悩みの種を植え付ける者をどう見るかと言えば、想像に容易い。

更に、都合が悪い事に、裏金銀治郎は、金庫番という職である。資金の出し渋りなどで、色々と難癖を付けられたことも数知れない。裏金銀治郎という存在を快く思っていない柱達もいるという事だ

廊下を歩く足音が響く。そして、裏金銀治郎の部屋が開かれた。

蝶の羽根飾りをつけ、ピンク色の羽織をきた小柄な女性が笑みを浮かべていた。「蟲柱の胡蝶しのぶさんが、男性の部屋を訪れるなんて誰かに見られて勘違いされ

る前に、早く立ち去った方がよろしいですよ。あらぬ噂がたつと宜しくないでしょう？」

「ご心配なさらずに、金柱の裏金銀治郎さん。で、荷造りして夜逃げでもするんですか？」

夜逃げ……今は昼なのだから、引越ですよと冗談を言いたい気分の裏金銀治郎であった。だが、雰囲気的に冗談が言える場で無い事は理解していた。

「ご想像にお任せしますよ。で、貴方がここに来たという事は、私の手伝いをしてくれるという事でよろしいので？ 後、私は、引退したので柱というのは不適切ですよ。元です」

胡蝶しのぶと裏金銀治郎は、少なからず縁があった。

鬼を殺す毒を作りにあたり、生きた検体や隔離施設、違法薬物の手配など様々な事を手助けしていた。言わば、胡蝶しのぶが蟲柱という地位に就くに当たり、裏金銀治郎は最大の功労者でもあった。

「そうでしたね。お館様より、話を伺いました。ハッキリ申し上げて、頭おかしいんじゃないですか。なんですか、あの計画書。まともな神経の人が書く内容じゃあ

りませんでしたよ」

「でも、その有用性は貴方も理解できたから、ここに居るのでしょう。鬼滅隊が無くなれば、敵である上弦を討つことはや不可能になる。復讐のためならば、私の手を取るのが最善ですよ」

裏金銀治郎は、手を差し出す。

胡蝶しのぶは、食えない男ですネと言ひ、手を取る。

鬼って、死なないし怪我も治る。

たしか、下弦に可愛い鬼っ子いましたよね。

頭さえ残っていれば、頸からしたは何度も再生できたよね。

つまり……顔を上手に隠しさえすれば、隊員専用の遊郭すら夢じゃ無いってことだよ。

02..壁ドン

感想ありがとうございます。

頂けるとやる気が出ますへーへ

こんな作品ですが、読んでくれてありがとう。

ニッチな内容で需要を獲得できるように頑張ります。

月も出ない新月の夜、二人の男女が藤の花が咲き誇る山奥を歩いていた。

藤の花は、鬼が苦手とする花である。それを利用し、鬼滅隊の重要拠点には重宝されている。だが、時間が時間だ……こんな夜道を10代の麗しき乙女と30歳のおじさんが一緒に歩いていたら、どう思われるだろうか。

控えめに言って売春。悪ければ人買いに見えるだろう。

「胡蝶しのぶさん、鬼とは一体どこから来たのでしょうか？」

「なんですか、その質問。哲学ですか？」

「いえいえ、純粹に氣になつてゐるのですよ。ちなみに、私の見解としては、国外からだと考えています。噂話を出ない程度ですが、国外には血を吸う鬼と書いて、吸血鬼といった存在がいるそうです。もっとも、日本で言う鬼と同様に一般人からしたら、おとぎ話の産物らしいです」

「物知りなんですね。でも、血を吸うだけの鬼なら怖くありませんよ？」

「吸血鬼というのは、血を吸う事で対象を眷属……言わば、グールという理性のない下級の鬼に変貌させる事が出来る。そのグールが人を襲うとその人もグールへと変わる。だから、ねずみ算式に鬼が増えるという訳です。——まあ、それが事実なら既に海外は、滅んでいるでしょうから、私の見解は大外れて事になるんですけどね」

そして、二人は目的地に着いた。

人目がつかず、鬼も寄つてこない場所。鬼滅隊でも、この場所を知る者は、両手で足りる。現役の柱でこの場所を知る者は、蟲柱である胡蝶しのぶだけだ。

「まあ、隠れて研究するならココになりますよね。分かっていましたか？」

「胡蝶しのぶさんの古巣だというのに、浮かない顔をされますね。ああ、ご安心ください。既に、生きた検体の方は、何匹か運び入れております。今すぐにでも、始められますよ」

二人は、鉄と石でできた堅牢な建物の中を進んだ。

建物自体は、日の光をよく通す造りをしている。万が一の場合、鬼の逃亡を防ぐ事と研究施設にある鬼という研究材料を消去するためだ。

日の光の当たらない部屋に、裏金銀治郎は既に何匹かの鬼を捕獲していた。

鬼は、普通の刀で頸を切断され頭部だけ残されている。更に、脳髓に日輪刀の素材である猩々緋砂鉄と猩々緋鉾石から作られた針金を差し込み活き締めになっている。藤の花に囲まれたこの施設は、花の良い匂いが漂っており、鬼は生きた屍となっていた。

鬼を活き締めにする——金の呼吸式の型「金縛り」であった。裏金銀治郎が、岩の呼吸と雷の呼吸を合わせる事で新たに開発した呼吸であり、非常に優れた補助技が多数ある。なかでも、黄金コンボと呼ばれるのが壺の型「珠碎き」で悶絶させ、式の型「金縛り」で相手の動きを封じる。現時点で、この技を食らって生きながら

えた男の鬼は誰も居ない。

「いつ見ても、悪趣味です」

「おや、画期的な方法でしょう？ その恩恵を貴方も十分受けたはずです。さて。時は金なりです。鬼滅隊の存亡を賭けて、このプロジェクトを成功させましょう」机や壁には、国内外から集めた様々な器具を揃えた。医療器具から拷問器具まである。特殊な器具が必要な場合は、刀鍛冶の里へ依頼しすぐにでも作成する手配も整えている。

「はあ、この話はやめましょう。で、元、金柱の裏金銀治郎……あなたは、私に何を望むのですか？」

「【強化人間計画】と【資金調達】どちらも急務です。ですが、貴方の仕事を減らして、研究時間を稼ぐ為、強化人間を優先しましょう。その過程でできた物を資金調達に回せばよい」

負傷した隊員というのは、厄介な存在だ。下手な重傷なら、死んでくれた方が有り難いというのは戦場の常だ。事実、戦争において、意図的に殺さず負傷者の手当などに人員を割かせるという悪質な戦法がある。

鬼滅隊においては、本来なら見捨てたい重傷者でも手厚く介護し、現役へと復帰をさせる為、鋭意努力している。実戦経験を積み、生き残った隊員というのは得がたい存在だ。

「ですから、具体的に何をするのでしょうか？」

「鬼の血肉を利用し、治癒と肉体強化の実験をします。そして、鬼を殺す毒も配合し、摂取者への影響を減らす微調整をして貰いたい。ある程度効果が見込めれば、蝶屋敷の患者に同様の事を行い、早々に現場復帰させます」

働かざる者、食うべからず。治療費を貰っているわけでもない患者をいつまでも蝶屋敷に置いておく必要はない。

胡蝶しのぶが、日輪刀を抜刀した。その剣先が裏金銀治郎の眉間を軽く突き刺した。血を流すが、裏金銀治郎は意にかえさない。この行動は、裏金銀治郎の想定範囲内であった。

いかに、お館様の命令があったとは言え、胡蝶しのぶが診ている患者に対して、鬼の血肉を与えるなど許しがたいことであった。その何処へも発散できない鬱憤を、元から受け止めるつもりであったのだ。

「防げたでしょう。なぜ、何もしないんですか？」

「貴方の気持ちが晴れるならば、死なない程度に受け止めましょう。貴方ほどで無いにしろ、私も鬼を滅ぼしたい」

裏金銀治郎は、胡蝶しのぶの日輪刀を拵んだ。そして、一歩ずつ詰め寄り、壁際まで押しやった。そして、もう片方の手を壁にドンと押しつける。

血が流れるのも気にとめず、真摯な眼で胡蝶しのぶを見つめる。真夜中で、男女が二人っきりの隔離施設。お隣には、仮眠室というがある。勿論、ベッドまであり、意味深なご休憩も可能な設備は整っていた。

裏金銀治郎……彼はスペック的に言えば、間違いなくモテる。体格は178cmと大正時代を考えれば長身である。体型については、現役引退した柱である為、男性の理想型とも言える肉体美だ。更に、鬼滅隊の中で言えばかなり裕福な部類である。だが、唯一にして最大の欠点が——人の心が分からないサイコパス的なところがあり、普通の女性にとっては受け入れにくい性格だ。むしろ、上弦の鬼である童磨と相性がよいだろう。

しかし、一般人でない鬼滅隊の中では結婚したい男性ランキングでTOP5に入

る男であった。高身長、高収入、高学歴……俗に言う3高である。

「わ、分かりました。だから、刀を握ったまま私を壁に追いやらないでください。それに、近い!! 近いですって!!」

「女性である貴方に負担を掛けないよう、努める事を誓いましょう。何かあれば、私に強要されたと言えればいい。どの道、金庫番として疎まれていることは知っている。一つ二つくらいそこに何かが加わったところで痛くもない」

裏金銀治郎は、刀から手を離れた。

胡蝶しのぶからしてみれば、漢気を感じる場面でもあった。柱という存在は、強い……めっぽう強い。その証拠に、大半の隊員は、胡蝶しのぶ……性別…柱とといった感じでおり、もはや超越者のように崇め^{あが}られている。

医療に身を置く事から男性と接する機会も多いが、女扱いされる事や心配されるといった事に免疫が無かった。

未来で流行する壁ドンのおかげで集中力が切れた胡蝶しのぶは、裏金銀治郎の怪我が完治している事に気づく事はなかった。



裏金銀治郎と胡蝶しのぶは、鬼滅隊の為、日々研究に勤しんだ。

元々、鬼を食べば身体能力が向上するなど様々な恩恵がある事は既に分かっている。加えて、鬼を殺す毒を作る際に、口外できないほどの非人道的な事をやってきた経験と知識のおかげもあり、成果が出るまで非常に短期間であった。

動物実験を終え、すぐさま蝶屋敷ではそれが活用された。鬼を殺す毒と鬼肉と牛肉のハンバーグなどが提供され始めた。濃い味付けの料理に混ぜ込み、違和感をなくす作戦だ。急に洋食が提供されては違和感がする為、この日に備えて、日本各地から特産品を集め、料理として提供した。鹿肉、イノシシ肉、羊肉、ウサギ肉など……おかげで、多少食べたことが無い肉であっても誰も抵抗感を抱く事はない。勿論、勘の良い柱達や嗅覚や味覚が優れているような特殊能力を有する者達には、別メニューが用意される。

ある者は、全治三ヶ月の怪我が、一ヶ月で完治した。機能回復訓練においては、誰しもが怪我をする前により明らかに強くなっている。その目のあたりの成果に、うれしさ反面、後ろめたさ半分といった感じになる胡蝶しのぶがいた。

「いや、胡蝶様のところで治療されてから、前より強くなった気がする。蟲柱様々だ」

蝶屋敷で退院する者達が、そんなことを口走るようになった。皆から感謝される度に、心のどこかがチクチクする痛みを伴っていた。

裏金銀治郎は、「早く退院できるだけでなく、後遺症無しで前より強くなり死にくくなったんだ。感謝されど恨まれる筋合いは無い」と平然と口を開いた。だが、考えて欲しい……蝶屋敷で胡蝶しのぶが治療を行ったという事実がある。つまりは、矢面に立たされているのは、胡蝶しのぶである。

できる男である裏金銀治郎は、「負担を掛けない」と誓った事を忘れない。

「確かに、胡蝶様の献身的な治療のおかげもあるが、金柱様が国内外から最新の医療器具や古今東西の薬品を取り寄せた事で治療が捗ったって聞いたぞ。後、病院食で食っていたあれって、金柱様が我々の為に手配してくれたってさ」

「そうなのか!? 人の血が通ってないと言われる金柱様がね」

「あまり金柱様の事を悪く言うとは、査定に響くぞ。お前は知らないかも知れないが、金柱様が金庫番をやられてから、提出書類は増えたが、きちんとした理由があ

れば、色々と都合立てして貰える。以前なんて、鬼狩りに行った先での宿泊費や食事代なんて自費だったんだからな」

そんな退院する者達の会話を盗み聞きしてしまった胡蝶しのぶは、裏金銀治郎の評価を上げた。約束通り、私に負担や非難が来ないように全ての責を一心に背負おうという心意気は、男前だ。

事実、胡蝶屋敷の医療器具や薬などは、裏金銀治郎がコネをもちいて集めた物が増えており、その事実を裏付けしていた。

つまり、裏金銀治郎が用意した薬を使い治癒したという事実が加わる。これにより、何かあった際は、裏金銀治郎が自分の知らない間に薬の中身を換えていたなど色々と逃げ道ができたのだ。

外国語表記の医学書や、機材の説明書は全て裏金銀治郎自ら翻訳し、要点を纏めて胡蝶しのぶに渡すまでの徹底ぶりである。

「全く、あの人は……。今度、おはぎでも作って持っていってあげましょう」

胡蝶しのぶの足取りが、普段より軽やかであった事は、継子である栗花落カナヲにしか分からない程度のものであった。



胡蝶しのぶが蝶屋敷でおはぎ作りをしている頃、裏金銀治郎は産屋敷耀哉に近況報告を行っていた。

捕獲している鬼の数、管理方法。それらを活用した研究成果——より具体的には、蝶屋敷での隊員の早期復帰や身体能力向上のなど吉報を届けた。

非の打ち所がない成果を上げてきた裏金銀治郎に対して、産屋敷耀哉の心には未だにシコリが残っていた。鬼を狩るために外道に堕ちたのではないかと。

「素晴らしい成果だね、銀治郎」

「お館様、無理にお褒めいただきなくても構いません。例えば、背に腹は代えられぬとは言え、理解できるが納得していないお気持ちには、察しております」

裏金銀治郎……当然口だけである。察しているが、別段気にしていないのだ。

「そうか、君にも苦勞を掛けるね。引き続き、よろしく頼む」

「承知致しました。では、今後の予定を説明致します」

裏金銀治郎は、A4用紙10枚にもおよぶ企画書を提出した。資料自体は、後ほど産屋敷の一族が確認し情報共有する為の物なので、裏金銀治郎が内容を読み上げる。

歴代最高の柱達が集うこの時代……裏金銀治郎は、下弦の鬼、上弦の鬼だけに留まらず鬼舞辻無惨が動くことを知っていた。激戦の末、上弦の鬼達を撃破する主人公一同。

まだ現れぬ者達が最高の働きをできる下地を肅々と整えて、このビッグウェーブに乗るつもり満々であった。

その為、企画書には、柱専用の緊急活性薬という品物を準備する方針が書かれている。高濃度に圧縮した鬼の血液を摂取する事で傷が癒え、身体能力向上……場合によっては、血鬼術に目覚めるという特典までつく。

「これは、必要なかね？」

「必要です。鬼と異なり我々は、部位欠損を補う手段も即時回復する手段も持っておりません。代えの利かない柱達です……この薬が、鬼舞辻無惨を倒す起死回生の一手になるやもしれません。備えあれば憂い無しという諺もございます」

柱として、数多くの鬼……下弦の鬼すら倒している身である裏金銀治郎の言葉は、軽い物ではない。鬼とは、それだけ強い。幾人もの柱が亡き者にされている為、産屋敷耀哉も重々理解していた。

「…………許可しよう」

「ありがとうございます。では、薬ができ次第改めてご連絡致します。柱達への説明は、お館様からお願い致します。敬愛されるお館様の言葉なら皆も耳を傾けるでしょう」

薬は用意するが、仕様に関する説明は当主がやるのは当然である。別に損な役回りを押しつけているわけではない。責任者として、仕事を全うしてくれとお願いたのだ。

産屋敷耀哉は、「わかった」と笑顔で頷いた。

不老長寿の薬とか若返りの薬とかで商売を始めようかしら。

モンハンの鬼を原料にした武器鎧っていいよねーへ

幾らでも再生するし、材料取り放題。

……大事な事です、作者は胡蝶しのぶが大好きです。

よって、ヒロインポジは誰だかは言うまでもありませんよね!!

03.. 胡蝶しのぶ 30 歳

感想ありがとうございます。

すごく励みになりますへーへ

胡蝶しのぶは、私室で悩んでいた。

先日、裏金銀治郎から「錠剤化にも成功したので、そろそろ売り込みにいく」から準備しておくようにと言われ、翌日に胡蝶しのぶは、100回分の錠剤……胡蝶印のバイアグラを用意した。バイアグラという未来を先取りするネーミングであったが、語呂が良くなぜか元氣が出そうな響きである事から誰も必要以上に薬名について追求はしなかった。

遠い未来……米国で同じ名前の薬が販売され、wikiに元祖バイアグラの開発者として胡蝶しのぶという偉人の名が残る事になるだろう。英霊召喚されたならば、知名度補正は思うがままである事は言うまでもない。

よつて、バイアグラを、裏金銀治郎に渡すだけで終わりだと思っていたが、そう
は問屋が卸さない。

……

……

…

胡蝶しのぶの私室に並べられた洋服。流行の最先端であり、上流階級の者達の中
では当たり前となったドレスが何着も飾られていた。また、それに合う宝飾品まで
用意してある。

「手伝いましょうか？」

「だ、大丈夫よ。カナヲ」

胡蝶しのぶの継子である栗花落カナヲが悩む師に手助けを申し出たが断った。

「ならば、私がお手伝いしましょうか？ 着慣れないドレスでしょうか、力のあ
る男手が必要でしょう。それに、いい加減意地を張るのは止めましょう」

その瞬間、裏金銀治郎の鳩尾に肘鉄が決まる。あまりに、見事な動きであった為、
防ぐ事ができず、その場でもがき苦しむ裏金銀治郎。

「誰が意地を張っているですって!? ドレスくらい着れますよ!!」というか、いつまで部屋に居るんですか、早く出て行ってください」

胡蝶しのぶの私室に用意された数々の品は、裏金銀治郎が全て用意した。これから、バイアグラを売りに行く際、鬼滅隊の様な格好では、商売の土俵にすら立てない。これから、向かう先は、そのような場所なのだ。

「ゴッホゴホ……む、無理でしょう。さっきから既に20分も経っているじゃありませんか。裾上げとか、腰回りの調整とか、胸回りの調整とか色々やらないとドレスは——」

器用な手先で、裁縫もお手の物であると伝えようとしたが、思わぬ反撃をされてしまった。追撃で、床を転げて苦しむ裏金銀治郎の顔があった位置に日輪刀が突き刺さる。

今の攻撃は、回避せねば確実に脳天を貫いていた。

「腹囲と胸囲がどうしたって？ 裏金銀治郎さん——着替えるからいい加減出て行け」

胡蝶しのぶの絶対零度の視線が突き刺さる。

ドレスを着る際、万が一、ウエストの問題で無様を晒すさらような事は避けたかった……そもそも、服を着替えるんだから、気を利かせ何も言われずとも出て行くのが常識であるが、それを察してやれない者が悪い。

裏金銀治郎は、栗花落カナヲと一緒に部屋を退出した。

私室の外で待機する二人組。実に、シジュールな組み合わせであった。親子にも等しい年齢差があり、鬼滅隊の最高位であった柱と現役柱の継子……どういう状況で部屋の外で仲良く待機しているのかと、遠目で二人を確認した者達は、思っていた。「ちゃんと、飯くってるか？」

「はい」

裏金銀治郎は、「そうか」と言うだけであった。

この二人……面識はあるのだ。胡蝶しのぶが、鬼を殺す毒開発に睡眠時間すら削っていた頃、栗花落カナヲを放置してる時期があった。偶然、依頼された薬を持ってきた際、空腹で倒れている彼女を裏金銀治郎が助けたという経緯がある。

九死に一生を得たのだ。その後も、裏金銀治郎は様々な事——勉強、料理や裁縫技術など、自らが持つ多岐に渡る知識を教えた。他にも将来を見越し、市販されて

いるファッション誌や情報誌などが彼女の許に毎月届けられていた。

だからこそ、ドレスを着る手伝いや化粧の手伝いを申し出る事ができた。その女子力は、鬼滅隊でトップを張れるほどだ。

優しい彼女は、その女子力を胡蝶しのぶの前では披露しない。直感で、どうなるか目に見えているからだ。

「それならいい。——はっ!!」

裏金銀治郎の脳裏に素晴らしいアイデアが浮かんでしまった。まさに、悪魔的発想!! 胡蝶印のバイアグラの価値を最大限にする方法を!!

「コイントスで決めて構わない。表がでたら、胡蝶しのぶと一緒にパーティーへいくぞ。服や装飾品は、用意した物を自由に使っていい。何をしている迷ったらコイントスで決めるんだろう」

胡蝶しのぶの年齢が17歳、栗花落カナヲの年齢が15歳。裏金銀治郎の年齢が30歳。

ギリギリいけると、判断したのだ。

「……迷ってない。行かない」

「では、胡蝶しのぶの為に一緒にパーティに出席してやれ。年齢が近い同性が一人でも居た方が彼女も心強いだろう。コインで裏がでたら、蝶屋敷の運営費を私のできる権限の範囲で増額してやる」

裏金銀治郎は、胡蝶しのぶの為とか欠片もそんな事は思っていなかった。

だが、聞こえのいい理由を付けて、彼女もパーティーへ連れ出したかったのだ。事実、胡蝶しのぶ的にも、彼女がいた方が安心するのは事実だ。

彼女の手からコインが弾かれる。

「ああ、それと、コインで表がでたらもう一つお願いを聞いて欲しい」

コインの結果に絶対従うと決めている彼女である。弾かれた時にお願いを追加する裏金銀治郎は、卑怯であった。

将来的に、鬼滅隊の柱に並ぶ実力を有するようになる彼女だが……現時点では、金柱であった裏金銀治郎の方が上である。バレずに、コインが常に表がでるように細工をするなど朝飯前であった。



その日、蝶屋敷に激震が走った。

鬼滅隊の隊服——どこからどう見ても、学ラン服であつた。男女とも同じ服を着る習わしである為、女性隊員も学ラン姿だ。つまりは、美しい女性が学ラン姿をしているとする……ファッションセンスや気狂いかと、疑う者も少なからずいる。

もつとも、女性隊員だけセーラー服にミニスカだった場合、防御面では不安が生じるが男性隊員には好評を得ることは間違いない。

要するに……普段、隊服を着用しており色気すら感じさせない蟲柱の胡蝶しのぶと継子の栗花落カナヲが、華族の御令嬢と言わんばかりのドレス姿を見せれば誰でも目を疑う。

「お二人ともよくお似合いです。分かっていましたが、元が良いから、衣装一つで更に美人に磨きが掛かっています。私がもう10歳若ければ、今すぐにでも結婚を前提にお付き合いを申し出ている所です」

胡蝶しのぶは、薄ピンクをベースにしたドレスを。カナヲは、黒がベースで胸元が開けた大人っぽいドレスを着ている。

ここで、今後の計画に問題が生じてしまった。化粧を施し、ドレス姿となった二

人を見比べる。言うまでも無く、双方中々お目にかかれない美人であった。

「ありがとうございます。——なんか、カナヲの方が大人っぽいドレスじゃありませんか？」

裏金銀治郎がマジマジと栗花落カナヲを見つめる。

感情の起伏が薄い彼女が若干恥じらい、胸元を隠す。隠すくらいなら、最初からそんな露出の高い服を選ばなければ良かったのだが、黒がベースのドレスはそれ一着だけであったのだ。

下から上へと舐^なめるように観察する目に……当然、二本の指が突き刺さる。

「ぐああああ!! 目がああああ!! 目があああああ」

「レディーに対して、その目は失礼ですよ」

栗花落カナヲばかりみる裏金銀治郎にイラっとした胡蝶しのぶは、思ったより力をいれて眼球をズブツとやってしまった事を少し悪いと思った。

それから、裏金銀治郎が復活してから、ドレス姿に刀という和と洋をチャンポンした格好でパーティー会場へと向かう車に搭乗した。車に乗るまでの間、すれ違った者達から綺麗と褒め言葉を沢山貰う事になった女性陣営であった。



裏金銀治郎が車を運転し、2時間後……目的地の陽明館と呼ばれる歴史ある建物に到着した。そこには、何台もの車が連ねており、集まった人達の多さがよく分かる。それだけでない。車から降りる者達の身なりから、上流階級の人である事が一目で分かるほどだ。

本日、そこに集まる者達は、政財界の大物とその御息女達だ。顔つなぎも兼ねた合コンみたいな物である。勿論、健全な事もあれば、不健全な事も数多い。様々な利権を売り買いする場所にもなっている。

「目的地、間違っていますか？ 見るからに、偉そうな人達ばかりいそうな所じゃありませんか」

「合っている。招待状もあるから、正面玄関から堂々と行くぞ。後、絶対に騒ぎを起こさないでくれよ。このパーティーを逃せば、鬼滅隊は破産を逃れられない」

これから、鬼滅隊の存亡を賭けた営業回りが始まる。

今日ここに集まっている者達は、金と権力を無駄に持ち合わせているが、若さや

体に不自由を抱えている者達ばかりである。日本が誇る老害達が集まっているとも言える。その権力で数々の犯罪をなかった事にしてもみ消し、考えられる悪事は概ねやり尽くした連中だ。

そんな者達が一堂に集まったのには、理由があった。

「健康な肉体が手に入る」「若返る」「病気が治る」という情報を耳にしたからだ。今まで散々類似した情報に踊られてた者達であったが、今回はそれをその場で実証するという話だからこそ集まってきたのだ。

会場の案内役が三人が乗る車に近づいてきた。

「裏金様でございますね。お車はこちらでお預かり致します。それと——そちらの御婦人達は？」

「家内と娘だ」

しれっと、二人を家内と娘と紹介する裏金銀治郎。

実に厳しい!! 年齢的に言えば、まだ二人を娘と言う方が信じられるだろう。だが、バイアグラの効果を考えれば、この程度インパクトがある方がちょうど良いとも言える。

只……問題なのは、胡蝶しのぶの顔にあり得ないくらい青筋が立っている事だ。身からわき出る怒りのオーラが周りに伝わる。それもそのはず、未婚の女性なのにいきなり家内と紹介された。更には、子持ちという設定まで盛られてしまったのだ。

年齢^{||}彼氏ない歴である胡蝶しのぶではあるが、女性に対して言っただけの事と悪い事がある。女性としては、文句の一つどころか、後ろからズブリと刺したい気分であっただろう。

蝶屋敷や鬼滅隊が有する土地ならば、間違いなく傷害事件が発生した。被害者は、全治一ヶ月で、退院するまでマズイ病院食を無理矢理食わされる。そして、激痛の伴う治療が行われる事は、間違いない。

だが、気にとめない裏金銀治郎である。車を早々におり、二人を呼ぶ。「行こうお母さん、お父さんが呼んでる」

カナヲのそのセリフに、胡蝶しのぶが人生で上から数えた方が早いほどの衝撃を受けた。

まさかの裏切りであった。あの人見知りで、自分と姉以外と碌に会話ができない

可愛い継子であつた栗花落カナヲが、あろう事か「お母さん」と呼ぶのだ。せめて、「お姉さん」と呼ぶべきじゃないかと。

だが、驚きはそれだけでなく、裏金銀治郎の事を「お父さん」と呼んでいる事だ。裏金銀治郎から、「家内」と呼ばれ、カナヲからは「お母さん」と呼ばれ、胡蝶しのぶの頭は混乱していた。鬼からの血鬼術を疑うレベルだ。

「ちょ、ちょっと待って。か、かかカナヲ……どうして、私がお母さんなの？ それに、お父さんって」

「え、だって——」

カナヲは、言葉を途中で切り裏金銀治郎の方を見た。

誰の差し金であつたかを理解した。そして、裏金銀治郎の横まで移動し、とても良い笑顔になる。

「裏金銀治郎さん、可愛いカナヲに何を吹き込んでくれるんですか。あれですか、私に何か恨みでもあるんですか？ あまり巫山戯ふざけていると潰つぶしますよ」

「おや？ 気に入りませんでしたか。蝶屋敷では、患者から「お母さん」と呼ばれる事もしばしばあると伺いました。実質、カナヲの母親的な存在でもあるでしょう。」

それに、考えてもみてください——バイアグラで10代の美貌を持つ美しい女性という立ち位置の方が受けが良い。我々は、商売をしに来ているのですから」

ちなみに、栗花落カナヲが母親で胡蝶しのぶが子供という設定も一考していたのだ。大人っぽい彼女の方が——とも思ったが、鬼滅隊の立場を気にして、この配役を決めた。という、事は口にしない裏金銀治郎であった。

「つまりは、私は実際は30歳近くて、カナヲくらいの年の娘がいるという設定で
すか？」

「理解が早くて助かります。戸籍の方は、伝手を使い年齢の改竄しております。誰が調べたとしても真実は露見しませんよ。流石に、結婚歴を残すのは申し訳なかったので、籍を入れていない夫婦的な事でお願いますね」

この時、胡蝶しのぶ30歳……一人娘の栗花落カナヲ改め胡蝶カナヲという情報が資料に刻まれた。

おめでとう胡蝶しのぶ。長生きすれば、ギネスだって夢じゃ無くなったぞ。

戦闘描写より、こういうブラックジョークやネタ展開を続けたい作者がココにいる@@@

捕獲してきたら鬼の管理を鬼にさせよう。

管理する鬼は待遇を少しマシにすればどうとでもなるだろう。

そして、自分たちを管理する隔離施設の拡張も鬼達にやらすぞ!!

銀治郎「しっかり働けば、殺してやる」

と平然にいう男がここに居る。

04.. 鬼畜

集められた政財界の重鎮達。

当然、怪しい品物である胡蝶印のバイアグラを噂半分程度にも考えていなかった。立場が立場だけに、そういった売り込みをしてくる輩は多い。相手にとっては、数ある詐欺師の一人程度にしか考えられてなかった、

よって、その効能を証明する事になった。

「では、早速証明して貰いましょう。なにに、我々が用意した相手を圧倒して貰えばいいですよ。なにせ、そのバイアグラとやらで貴方達は、既に完成された肉体を手に入れているのだから、造作もない事だろう？」

元陸軍中將で、未だに軍部には多大の影響^{いま}力を持つ一人が裏金銀治郎に問いかけた。

だが、彼等としては当然の事を依頼しているだけだ。人に勧めるのだから当然本人達はそれを行った上での事だと。人に儲け話をする際、誰しもが「お前は当然それに投資しているんだよね？」と言うのは、当たり前である。この手の話と同じ

である。

それに、実証すると口になっているのは裏金銀治郎なのだから、それに答える事は当然だと考えている。

「分かりました。では、そのバイアグラを用いて鍛え上げた力を見せしましょう」

.....

.....

...

そうして、連れてこられたのが陽明館の地下に作られたデスマッチ会場だ。四方と天井まで檻に囲まれた場所。床には血痕まで残っており、今までどれだけの人間がここで死んでいったか窺^{うかが}えるほどだ。

周りある観客席には、人の生き死にを楽しむ外道達が裏金銀治郎が刻まれる時を待ちわびていた。

「おや？ ココを見て、驚かない貴方は、よほど修羅場を潜られているんですね」

「私のように貴方達に商売をしようとして帰らぬ人達が多いのは調べています。その者達の末路なんて想像に容易^{たやす}い」

大事な事だが、騙そうとする者達が悪い。それこそ政財界の大物達なのだから、その報いは死しか待っていないのは当然だ。ハイリスクハイリターンなのは、商売の常だ。

「あらあら、日本にもこんな場所があるんですね」

「人は鬼より業が深いからな。では、上着と刀を預かっていてくれ」

周囲の傷跡や惨状から察するにこれから戦う相手は獣である事は分かっていた。そんな相手を素手で圧倒してこそそのパフォーマンスである。

裏金銀治郎がリングに上がると、出入り口が施錠される。そして、対戦相手であるロシアから取り寄せられたヒグマがご来場してきた。2mを超える体格に加え数百キロの体重を誇るため、下手な鬼より強い。どこからどう見ても殺人ショーにも関わらず、観客達は大喜びだ。

ヒグマは、屈強な大人が10人掛かりで縄を押さえつけていた。少しでも力を抜けば今すぐにでも虐殺ショーが始まる。だが、そうならないのは挨拶を待っているからだ。

何人ものボディガードに囲まれた老人が近寄ってきた。老人ではあるが、年を

感じさせない雰囲気を身に纏う者——日本銀行頭取。日本経済の要を担う一人である。

「我々が持つ富と権力に這い寄るゴミが多くてね。そういった者達か否かを選別するために、様々な趣向を凝らしているのだよ。安心したまえ、君の妻と娘は吉原に売り飛ばす。だが、勝つことができれば話を聞こう」

確実に死ぬことが前提で話が進められたが、裏金銀治郎は、過去最大級のやる気が沸いた。今回のパーティーに、まさか日本銀行頭取まで来ているとは思っていなかった。

頭取から、「放て」という合図と同時にヒグマが巨悪な牙をむく。巨軀の体から繰り出される横殴りの攻撃。鋭く太い爪だけで一般人ならボロ雑巾のようになるだろう。

「金の呼吸参ノ型 不動金剛」

攻撃を捨て防御に完全特化の呼吸法。水の呼吸のように攻撃を受け流す技ではない。攻撃の衝撃を全て足から地面に追いやり、ダメージを地面になすり付ける技である。

地面に亀裂が入る。

グルルルと唸りを上げ、自らの手を確認するヒグマ。日頃一撃で獲物を葬ってきたにも関わらず、死なない獲物を不思議に思っていた。

「「「「オオオオオオオオ!!」」」」

「す、凄いわ!! 今の一撃で死ななかったの初めてじゃない!？」

「それより、無傷な体よ。あの葉は、本物!？」

歓声がとまらない。

ヒグマの一撃を受け止めただけだと考える、胡蝶しのぶと栗花落カナヲは不思議に思った。柱なのだからヒグマの一撃くらい無傷で受け止められて当然だという常人から逸した考えだ。

それから、一切手を出さずにヒグマの猛攻を無傷で受け止める。

「まあ、あの人ならその程度できて当然です」

「よほど旦那を信頼しているんですね。今まで何人も食い殺したヒグマ相手に——
バイアグラという物の性能はそれほどなのか」

胡蝶しのぶの横に座る頭取。

裏金銀治郎の事を旦那と言われて違うと叫びたいが——鬼滅隊の為、怒りを抑える彼女であった。代わりに、綺麗な顔には青筋が目立つ。先ほどから、旦那旦那と……彼氏すらいいた事がなく独身にも関わらず、既にこの場の誰もが夫を信頼する良き妻と娘といったポジションで彼女たちを認識していた。

「あのレベルとまでは、明言できません。ですが、全治三ヶ月の怪我が一ヶ月で治りました。他にも身体能力の向上も確認できております。後は、滋養強壮もありますよ」

「僕の視力は、それで戻るかね？」

白内障……年を取れば誰でもなる病気である。だが、この時代その明確な対応方は確立されていない。死病ではないが、厄介な病であった。

胡蝶しのぶは、今までの経験則からバイアグラなら完治できると確信した。

「バイアグラを毎日一錠、一週間もすれば劇的に改善します。試されますか？」

「手始めに、持ってきた薬の半分を貰おうか。こちらで実験し、症状が改善されれば試そう」

裏金銀治郎が、超人的な事を披露する事で集まった外道達が、誰もがあのよう

なりたいと羨望するようになった。圧倒的な肉体を目のあたりにし、先刻まで眉唾物だと疑われていた薬が靈薬にも思えてきたのだ。

実に悪くない流れであった。

健康な肉体と若さという金を幾ら積んでも手に入らないと思われた品が手の届く所にあるのだ。それを欲せずして、上流階級とは言えない。

「頭取……そろそろ、ヒグマを処分してもよいだろうか？」

「構わんよ。もはや、そいつは不要だ」

ヒグマに頭から嚙^{かじ}られているが血すら流さぬ裏金銀治郎を見て、ほくそ笑む頭取。彼は、見てみたくなったのだ、人類とはどこまで強くなれるのか。彼も男であった。強さにロマンを感じるのはいつになっても変わらない。

裏金銀治郎がヒグマの腹に手を当てる。

「金の呼吸 肆ノ型 化合爆碎」

金の呼吸の最強にして最大の攻撃技を放った。体内のメタンや水素を混ぜ合わせ火種を与えることで体内から爆発して吹き飛ばす技だ。外皮が硬い鬼であっても、体内からの爆発には耐えられない事が多いため、殺傷能力が非常に高い攻撃である。

爆発音と共に、ヒグマの下半身が吹き飛んだ。

「「す、すげえええええ」」

裏金銀治郎が腕を高く上げ勝利宣言をする。

獣相手に勝利を収めたところで鬼滅隊の柱であった事を考えると、褒められる要素など何一つなかった。だが、大衆受けは最高だ。派手なパフォーマンスも加わり、あの力が自分にもと、集まった者達の手のひら返しは早かった。

それから、三人は改めて応接間に呼ばれ最高級のおもてなしを受けた。何よりもめたのは、用意した100錠の分配である。

余るほど持ってきたつもりであったが、誰しも欲が深く、一個でも多く手に入れようと汚い争いが始まる始末だ。



それから、三人が解放され蝶屋敷に帰ったのは翌朝の8時を回っていた。

「なんであの年寄りと女性達は、あんなに元気なんですか」

「……疲れた」

胡蝶しのぶと栗花落カナヲが玄関先で倒れ込む。

陽明館では、【健康】と【若さ】を売る我々に、鬼氣迫る形相で沢山の者達が詰め寄ってきたのだ。手土産と一緒に名刺まで渡された。その名刺を立てに重ねるだけで、タウンページを越える厚さになる。

「疲れるのは早いですよ胡蝶しのぶさん。どう考えても、今のままでは人手がたりません。菓の増産が間に合わない……商売において、需要と供給だけでなく納期も厳守する必要がある」

商売とは信頼関係である。相手が望むときに望む物を用意してこそ、信頼を取れるのだ。一週間もすれば、菓の噂が広がり、我も我もと金に糸目も付けず、注文が殺到するだろう。

「そうですね。流石に、私一人じゃ生産量に限界があります。ですが——」
隔離施設の場所は、知られてはいけない。

やっている事がやっている事なので、継子である栗花落カナヲでも駄目であった。信用とか信頼とかそんな次元の話ではない。この一件は、知る者が少ないという事が大事なのだ。情報とは知る者が多いほど露見する。

「簡単ですよ。手なら余っている者がいるでしょう」

……

……

…

藤の花が咲き誇る場所にある隔離施設。

今そこで施設の拡張工事と機械化が進められていた。莫大な利益を生むバイアグラ……その製造拠点になるのだから当然だ。だが、何事にも人手がいる。そこで働き手として選ばれたのが――

「選ばせてやる。このまま、材料になるか、我々に手を貸すか。手を貸す場合は、猿の血肉程度は用意してやろう。人間は元は猿から進化したと言われている。遺伝子情報も似ていると聞いたことがあるから、問題ないな」

一匹の鬼が活き締めを解除され、裏金銀治郎の前に立たされていた。生きたまま刻まれ苦痛を味わった鬼は、たかが人間である者に恐怖していた。自らを鬼にした鬼舞辻無惨とは、別ベクトルの恐ろしさを感じていた。

「鬼を材料に薬を作る工場の手伝いをしろとか、貴様は本当に人間か？」

「面白事を言う。人間だから、ここまでやれるんだよ」

元人間であった鬼という存在をまるで、家畜同様にしか考えていないような冷酷な目を直視した鬼は、心が折れかけた。逆らえない……逆らったら死ぬと。

今こそ窮地であるが、鬼には希望があった。

鬼舞辻無惨は、鬼の位置が分かる能力を保有している事を知る鬼はおおい。きっと、複数の鬼達が一箇所に集まっていれば不審に思い、下弦か上弦などが派遣されると推察していた。

その時こそ、復讐し、この場所から解放されると信じていた。

「分かった」

「素直なのは、いいことだよ。君は選ばれた……あそこで、材料になる為、再生と解体を繰り返される者とは違う」

そこには、裏金銀治郎に心をへし折られた鬼が黙々と同族である鬼を解体していた。そのおぞましい光景に、救いを待つという希望の光すら陰りそうな程だ。

鬼の肩にそっと手を置いて、裏金銀治郎はトドメを刺す。

「この施設周辺では、血鬼術が使えない。だから、鬼舞辻無惨の呪いも発動しない

し、監視もされない。だから、安心して働いてくれ。期限内に仕事が終わらなかったり、逃亡を企てたら君は材料行きだよ」

裏金銀治郎の左手に立方体の形をした半透明な物質が浮いている。

「それは!？」

「下弦の鬼を喰らい身につけた、血鬼術——けっかい血界。設置型ではあるが、血鬼術を無

力化する物だ」

「血鬼術を無効化する血鬼術!？」

鬼の中でもその力を身につけられるのは強い鬼だけだ。

それを人間が手に入れているなど、隔離施設にいる鬼にしてみれば悪夢だ。しかも、それを使うのが鬼滅隊の金柱という最高位の剣士だ。悪魔みたいな者が自らの陣営が持つ特別な力まで兼ね備えている。

「今まで疑問に思わなかったのか？　このような行いをしていて、鬼舞辻無惨が介入してこない事を。鬼達が自殺する為に呪いを発動させない事」

藤の花に囲まれた陸の孤島——血鬼術により、外部との連絡も途絶えた——脱出用の血鬼術に目覚めても封じられる。

ポキ

心が折れる音を聞いた鬼は、解体係の鬼同様に心を閉じた。

色々と制約を課すつもりですが、こんな血鬼術でいきます!!

※完全無効化というチート能力ではありません。

力がある鬼を使えば、施設拡張なんてすぐだね!!

材料を運び込む必要はるけど、必要な人ではそれだけになる。
これでだいぶ捗るぞ。

05.. 企業戦士

胡蝶印のバイアグラを製品化にあたり企業届けを出すなど様々な手続きを裏金銀治郎は率先して行った。鬼滅隊のフロント企業扱いで社員は総勢二人……胡蝶しのぶを社長に据えたアンブレラ・コーポレーションと流行にのり横文字企業だ。

そのおかげで、鬼滅隊の経済状況が改善されつつあった。

裏金銀治郎の説得もあり、鬼達は自主的に隔離施設の環境改善も順調だ。おかげで、胡蝶印のバイアグラの生産量は日に50錠まで伸びた。一錠あたりの価格は、300円——これは、柱を除く隊士の平均給与は、月額35円であるので、毎日400人分以上の隊士月給を稼ぎ出している事になる。

それだけ見れば、とてつもない額に見える。だが、実際は、ここに税金などが課せられる。その為、純利益は、売上の六割程度だ。

そこから!! 鬼滅隊が保有する施設の固定資産税や土地代……施設の維持管理費用の固定費が引かれる。光熱費など当然払う必要がある。これで残った売上の三割が消し飛び——残りは三割。

更に更に!! 鬼滅隊と密接な関係にある刀鍛冶の里への援助金も必要になる。廃刀令が施行されており、里の収入源は極めて少ない。本来なら、切り捨てたいが……鬼が居るうちは、捨てるに捨てられない。これで売上の一割が消し飛び——残りは二割。

ココで終わらないのが鬼滅隊だ!!

育手への援助という物がある。元鬼滅隊に所属している者が才能がある者を集め、鬼狩へと育てる者達の事だ。鬼滅隊の所属者は、基本的にここの出身者だ。組織維持の為に切り捨てにくい。これで残りの売上の一割が消し飛び——残りは、一割。

商売を始め収入が増えたはずにも関わらず、裏金銀治郎の苦労は絶えなかった。

「こ、これでも黒字に傾かないだと!!」

ベキと万年筆をへし折った。

ちなみに、残った売上の一割は、各地の警察や地元名士達への賄賂で消えた。刀で武装した者達が捕まらないためにもこれは必要経費なのだ。

「あの、裏金銀治郎さん。私も忙しいのに、なぜ!? 手伝わないといけないので

すか？」

「胡蝶印のバイアグラで得た利益です。表に出せないのも、事実を知る者だけで処理するのは当然でしょう」

「だったら、貴方だけでも十分じゃありませんか？本職でしょう？」

「組織の健全化を維持するためです。これだけの大金、私が幾らか懐に入れたらどうするんですか？お互いがお互いを監視する程度がちょうど良いんですよ」

裏金銀治郎の執務室には、予備の机がだされ、そこで胡蝶しのぶが書類と向き合っていた。その理由は、彼の言うとおりである。大金であるからこそ、何重にも確認する必要がある。

それから数刻の間、胡蝶しのぶは文句を言いながら裏金銀治郎の手伝いをした。彼と一緒に仕事をする事で、鬼滅隊の経済状況を目の当たりにして顔が引きつる場面が多々あったのは言うまでもない。

……

……

……

胡蝶しのぶが帰ってから裏金銀治郎の仕事は終わらない。資金源を確保できたので、支出を抑える事で財政の黒字を図る方法を検討しているのだ。

鬼という金のなる——じゃなく、驚異に立ち向かうため、掛けるべき所にはお金は惜しまない。だが、資金は有限だ。限りある資金を無為に食いつぶす部門は切り捨てるべきだ。

「パソコンが欲しい、できればExcelも欲しい……」

数字の羅列に目眩めまいを感じ始めていた。

だが、その成果もあり幾つか書類に不審な点を発見した。具体的には、育手からの過剰申請だ。

残念な事に鬼滅隊に所属する大半は、【宵越しの銭は持たぬ】という気風がある。明日死ぬかも知れない身であるから、理解できる。つまりは——元鬼滅隊であり現育手は、無一文が大半だ。鬼を狩る人を育てるからお金はそっち持ちでねという、人材派遣会社も真っ青な事業主に近い。煉獄家の様に自費で隊士を育てるという家は滅多に……いいや煉獄家しか存在しなかった。

そんな理由もあり、裏金銀治郎の炎柱である煉獄杏寿郎の評価は非常に高い。次

に高いのが音柱である宇髄天元だ。音柱の妻達はくノ一である事から諜報任務を自主的にやってくれている。だから、給与には奥様達分と危険手当まで付けている。「はあ、いい加減にして欲しいわ」

裏金銀治郎は、ため息を吐きながら部屋にある資料を漁った。探しているのは、最終選抜の受験者リストとその育手の情報だ。そこから、不正を見つけ出すのだ。育手が援助欲しさに、碌に育てもしていない隊士候補を送り込んでいる気配があったのだ。しかも、そういう育手に限って、多くの弟子を取っており申請してくる経費が馬鹿にならない。

推測が立てば、後は理論付けで証拠を集めるだけの作業であった。人を信じる裏金銀治郎に対して、人を疑う裏金銀治郎である。疑って資料を確認すれば、馬鹿を見つけるのは簡単だ。



裏金銀治郎は、見つけた馬鹿の処分について上司の意向を仰ぐことにした。上司から呼び出しもあったので渡りに船である。

育手に対して、良い感情を抱いていない風柱である不死川実弥にでも情報をリークすれば、即日バラバラにされたことは間違いないだろう。お館様の資金で私腹を肥やすだけでなく、使えもしない隊士を送り出していたのだ。

こうみえて、裏金銀治郎のお手々は真っ白である。

昇進の為に人も殺してないし、誰かをはめるような事もしていない。ジャンプの主人公達同様に真っ白である。

「報告書は確認した。銀治郎には、色々と苦勞を掛けたね」

「お館様のお力になれたのであれば、この上ない喜びです。しかし、まだ安心出来ない状態です。今は、ようやくスタートラインに立ったに過ぎません」

全ては、これからだ。

今の鬼滅隊の状況は、資産が減り続けるという状態が急減速したに過ぎない。それも、胡蝶印のバイアグラに支えられている状態だ。裏金銀治郎の頭の中には、膿を出し切った後のプランもできあがっていた。

「このところ、色々な所から予算がついて、できる事が増えたと感謝の言葉が届いている。それを銀治郎にも伝えたかった。本当にありがとう」

金庫番をしている裏金銀治郎の所には、一切の感謝状は届いていなかった。誰しもが全てお館様の手腕で資金繰りが良くなったと思っっているのだ。その事を氣遣い産屋敷耀哉は、裏金銀治郎を呼び寄せたのだ。

「勿体ないお言葉です。この場でお知らせするのは恐縮ですが、一つ残念な報告がございます」

鬼滅隊にとって、裏金銀治郎は必要不可欠の存在へとなっていた。そんな彼から残念な報告と聞いただけで、産屋敷耀哉の平常心に揺らぎを与えた。

だが、この時、裏金銀治郎は全く残念だと思っていない。

鬼滅隊だけに留まらず、産屋敷耀哉の周りにはYesマンしか居ない事に大変危険を覚えていた。頑張ればいつかは鬼を駆逐できるとか——体育会系の思考だ。予算がこの程度必要ですに対して「はい、わかりました」ではない!! その内訳と何故必要なのかよく精査する必要がある。

勿論、これは金庫番についている裏金銀治郎にもチェックが漏れてたので責任もある。だが、就任時期や彼の抱えている仕事量を考えれば、どう頑張っても限界があるのだ。

「何があったんだい？」

「育手に、経費を水増して不正を働いている輩がおります」

報告書を産屋敷耀哉の付き添いも兼ねた彼の実子が確認し読み上げた。その内容を聞き、産屋敷耀哉は涙を流す。記憶力が優れている彼は、今まで出会った全ての隊士を記憶している。だからこそ、不正を行った者の人となりを理解していた。

裏金銀治郎にしてみれば、出会ったときは澄んだ心を持った青年だったかもしれない。だが、立場上、常に接していたわけでもあるまい——時間とは残酷だ。人は変わるのだ、と言うだろう。

空気が読める裏金銀治郎は口を紡ぐ。

「そうか彼がそんなことを」

鬼滅隊の者達を子供のように考える産屋敷耀哉にしてみれば、我が子が悪事を働いていたなど信じられない事であろう。だが事実である。

色々準備し、鬼滅隊の為、資金調達を頑張る裏金銀治郎という聖人もいれば、鬼滅隊の為と称し外道に堕ちる者もいた。

「近くに風柱である不死川実弥がおります。今ならば彼に任すのが最適解かと愚行

致します」

何を任すかと言えば簡単だ。柱ではなかったとはいえ、呼吸法を身につけた育手である。下手な者を送り込んでも、そんな者来なかったとなりかねない。ならば、最初から最強の駒をぶつけるのは、戦法的に正しい。

「実弥は、少し過激なところがある。他の手はないのかい」

「――あまり気が進みませんが、司法の手に任せてみてはいかがでしょうか？」
逆恨みという言葉がある。

不正を暴露した相手に対して、報復をするという事もそれに含まれる。裏金銀治郎は、身の安全を守るため最善を尽くす所存でいた。陽明館のパーティーで貰った名刺には、警察から裁判官まで良き取り縁である。

元鬼滅隊というだけで、叩けば埃なんぞ幾らでも出せる。

なぜかというところ、鬼という存在は認知されていない。鬼が世間的に何に分類されるかといえば、人間だ。

上司である産屋敷耀哉の意向を最大限にくみ取り、裏金銀治郎は動く。



数日後、四国地方のローカル新聞で、ある事件が1面を飾った。

殺人剣を教えていた殺人犯が逮捕されるといった記事だ。しかも、身寄りのない子供達にその術を教え込むという恐ろしい事件として扱われていた。保護されるまでの間、何人もの子供が行方不明になっているという事実まで判明したとの事。

「恐ろしい事件もあるものですね。そうそう、ブラジル産の良い珈琲豆が手に入りましたので胡蝶しのぶさんも一杯どうぞ」

裏金銀治郎は、持っていた新聞を胡蝶しのぶに渡した。彼女もその記事を注目する。このご時世に殺人剣など思い当たる節は一つしかなかった。

「そういえば、先日四国の土産にうどんを頂きましたよね。——これは、貴方の作業ですか？」

「育手にも関わらず、碌な教えもしない。経費は割り増し請求。お館様のご意向で司法にて処罰して貰う方向になりました」

ありのままの真実を胡蝶しのぶに告げた。

責任ある大人として、自らに何かあった際の仕事を引き継げる者がいる。鬼滅隊でそれができるのが唯一胡蝶しのぶだけだ。

「私は鬼を狩るのが仕事です。裏方まで教えられても困りますよ」

「知っております。それに、貴方だから正直に全てを話すんですよ。私が仕事を真面目にこなすほど、恨みをかってしまう性分のようにで」

「馬鹿ですかね」と小声で言いつつ、煎れられた珈琲に口を付けた。苦いはずなのに、どこか甘いと思ってしまう胡蝶しのぶである。

次話から原作時間軸へ。

水柱さんが、不祥事を隠し始めました。

06.. 勘の良いガキは嫌いだよ

蝶屋敷で負傷した隊士の看護をする神崎アオイがいる。彼女は、有能である。最終選抜を通過したが心が折れてしまい、裏方へと回る事になった。だが、それは彼女には天職であった。鬼を殺す才能より、人を生かす才能があったのだ。

だが、ここ最近では、看護の仕事以外にも時間が取られて困っていた。

「アオイ!! アオイ!! お願いします。金柱様を紹介して、この通り」
かつての同期が頭を深く下げてきた。

毎日のように、呼び止められたと言えば要件は大体コレである。現役の柱に近づく事は、難しい。それに、誰もが性格に一癖も二癖もある為、男女の仲に発展するのは現実的ではない事は、火を見るより明らかだ。

勿論、隊士の間で結婚するに至った者も極めて少ないがいる。

花の寿命は短い——その為、結婚という事に関して、女性が焦る気持ちは、男性では想像できない。チャンスを掴む為なら、プライドすら投げ捨てて頭を下げるのだ。

「……サクラ、貴方はどんな話を聞いてここに來たの？」

「そりゃ、金柱様と蟲柱様が夜な夜な出かけて、朝帰りする事も多いって。つまり!! 私にもチャンスがあるって事でしょ」

その何処にチャンスがあると考えたのか、じっくり話し合いたいと神崎アオイは、思った。

裏金銀治郎は、結婚したい男性TOPランキングに入るが、周りに女の影も形もない事から男色ではないかと、腐女子達の間では様々なカップリングがされていた。しかし、そんな薔薇色の噂も終焉を迎えた。

「どう考えれば、そうなるのよ。ここ最近、頻繁にお見かけしますけど、胡蝶様とカナヲ様以外とは会話しているのを見たことないわよ。つまりは、無駄よ」

「カナヲ様って、あのミニスカ隊士の？」

栗花落カナヲは、隊士の中では有名であった。

正式な隊士でないにも関わらず、蟲柱の継子に選ばれた天才——という事と、風変わりな隊服を着る隊士として。ちなみに、後者は、男性隊士達からは絶大な評価を得ている。女性隊士の隊服変更の署名活動まであった程だ。

裏金銀治郎の所にも、予算都合立ての嘆願書が届いた事もあった。却下すると、隊服運動をする隊士達が自らの給与を使っても構わないと、纏まった金を用意されたこともある。

「継子のカナヲ様ね!! 変な覚え方しないでください」

服装に関しては、前衛的であるとは彼女も思っていたのでそれ以上の反論はできなかった。以前に洗濯物に紛れていたスカートをこっそり履いた過去があったが、鏡に映った自分を見て、「何やってんだろう私」と心がえぐられた過去を持つ悲しい女性である。

「つまりは、私もミニスカにして迫ればワンチャンあると。カナヲ様の部屋には、予備のスカートくらいあるわよね。——お願い」

最終選抜の為、蝶屋敷を離れている栗花落カナヲ。

つまり、今部屋に入って服を漁るなど造作もない。だが、そんなお願いを素直に聞くような者は蝶屋敷にはいない。人様の部屋に勝手にはいり、本人の許諾なしに洋服の貸し借りなど許されるはずも無い。

「それだと、金柱様が変態に聞こえますよ。そんなこと言っている暇があれば、さっ

さと退院して鬼でも狩ってきてください」

「うー、じゃあ!! 金柱様が来たら一声掛けて。後は、こっちで何とかするか
ら」

そういい、サクラはステップを踏みながら病室へと戻っていった。

三日前まで松葉杖がないと歩行すら困難であったのが嘘のようであった。胡蝶しのぶの治療のおかげと信じて疑わない神崎アオイ。そんな、胡蝶しのぶのようになりたい——それが無理なら力になりたいと真剣に考えていた。

「もしかして、薬を変えたのかしら？ そういえば——去年に同じような怪我で入院していた人が居たわね」

胡蝶しのぶは、誠実に仕事を行う。その為、過去の治療に関するカルテは全て残っている。つまりは、サクラのカルテともう一つのカルテを見比べれば——。

そんな独り言を口走り、仕事に戻る神崎アオイ。この時、竈門炭治郎が側にいたならば、物陰にいる男性の香水に気がつけただろう。

.....

.....

…

その日、胡蝶しのぶは、料理の本を開きお菓子を作っていた。

年を重ねるにつれ、女としての色気が栗花落カナヲに負けているのではないかと薄々気がつき始めたのだ。継子の成長は嬉しい……だが、女として負けてはならない事もあった。

「嬉しさ半分、悲しさ半分とは、まさにこの事です」

妹のような存在が、成長するのは嬉しい事であった。言われなければ、何もできなかったあの子が……などと思ってしまうのは仕方がない。

そして、自らの女子力を証明する為にも、お菓子作りをしているのだ。カナヲが最終選別でいないタイミングで少しでも腕前を上げる算段であった。普通なら、身を心配する所なのだが——既に、全集中常駐を会得し、花の呼吸まで扱える。その為、只の鬼退治など彼女にとっては、雑草を刈るのと同程度だと分かっていたのだ。「それに、それに!! なにより氣にくわないのはあの男です!! ケーキを焼いたのでお裾分けに来ましたとか、馬鹿ですか!?!」

イチゴのショートケーキを持ってきたあの日を胡蝶しのぶは、決して忘れる事は

ない。日持ちしないため、蝶屋敷の勤め人と一緒に食べたが、誰もが彼女が作った
と思い込み「美味しいです。胡蝶様」と賞賛を浴びせた。否定しようとしたところ、
次々と賞賛を貰い否定するタイミングを失ってしまったのだ。

そのケーキ……実に美味だったのだ。

同じ材料を使っても、同じ味を出せる自信が全く無いほどに。乙女の尊厳が完全
に碎かれたのだ。柱として、鬼狩りや修行に忙しかったからお菓子作りなんてと言
い訳しようものなら、裏金銀治郎とて同じだ。むしろ、良い年したオッサンがお菓
子作りが得意なんて誰が想像できるだろう。

胡蝶しのぶは、想像ができた数少ない一人だ。だが、考えないようにしていたの
だ。

そもそも、蝶屋敷の患者に提供している食事は、裏金銀治郎が考案したメニュー
である。洋食という奇抜な選択で、素材が何なのかという疑問を消し去るというア
イディアも盛り込まれており、感心してしまうほどだ。

つまりは、裏金銀治郎は料理も得意という事である。ならば、お菓子もと考えら
れる可能性であった。



裏金銀治郎の執務室で、金つばとお茶を食しつつ、休憩する二人の男女がいる。

「手作りですか——美味しいです」

「どういたしまして。カナヲが最終選抜を合格してくるでしょうから、そのお祝いの予行練習です」

胡蝶しのぶは、詰めが甘かった。

市販ではなく手作りである為、相応の手間が掛かっているのは簡単に分かる。それこそ、料理やお菓子作りにおいて、自身以上に得意であろう者に提供しているのだ。練習で作るような物でない事は直ぐに分かった。

「てっきり、私の為に作ってくれたと思ったのですが、違いましたか？」

「はあ？ 自意識過剰ですか？ 練習といったでしょう。耳でも悪くなったんですか」

「酷いな」と笑いながら裏金銀治郎は、黙々と金つばを食べた。

そして、いつ例の話題を切り出そうか、迷っていた。裏金銀治郎が持つ権力やコ

ネを使えば、鬼滅隊の隊士の一人くらい、明日にでも鬼の餌にできる。だが、協力者との関係上、それを行うと破綻するだろうと理解していた。

「裏金銀治郎さん、一つ聞きたいことがあります。ちょっと小耳に挟んだたわいない世間話なんですが」

「なんででしょう？」

「カナヲのスカートを用意したのが、貴方だと聞いたのですか本当ですか？」
空気が凍り付いた。

スカートどころか、昔……そう、胡蝶しのぶが、鬼を殺す毒を開発する時、下着一式まで全て用意したのが裏金銀治郎であった。一瞬、その事までバレたのでは無いかと思い、背中に嫌な汗をかいていた。

「誤解されないように、私の言い分も聞いて貰えるかな？」

「あら、否定されないんですね。いいですよ、聞きましょう」

カナヲ自身から、ズボンはださいからスカートを欲しいと直訴があった。あのカナヲが自らの意志を伝えてきたのだから、それに応えてやるのが親心という物だと力説しまった裏金銀治郎である。

ちなみに、スカートに関しては、生地を用意したのだという正しい情報も連携した。

「そもそも、彼女にお小遣いとか渡していますか？」

「……あげて……あげてません。ごめんなさい」

カナヲの立場は、鬼滅隊に所属しない継子という物だ。つまりは、鬼を殺しても鬼滅隊から給与はでない。裏金銀治郎も、隊士以外に給与などださない。例外を認めてしなえば、一般人が鬼を殺したと報告があれば全て対応する事になるからだ。

「じゃあ、どうやって彼女の私物が増えていったと思います？」

衣服にかかわらず、カナヲの部屋は充実していた。ファッション誌、専門書、勉強机にベッド……外出用の服、ハイカラな靴などを胡蝶しのぶは思い浮かべだ。どれもが、自分が買い与えた物ではない。

「ほ、ほら!! カナヲって、私に付いてきて鬼を切っているの」

「隊士でも無いのに給料が出せるはず無いでしょう。鬼滅隊の赤字状況を知らないとは言わせませんよ」

その発言で理解したのだ。栗花落カナヲは、裏金銀治郎の厚意で色々な物を手に

入っていたのだと。ちなみに、栗花落カナヲとしては、鬼滅隊から支給されている
と思っており、双方で認識の相違があった。

裏金銀治郎は、気がついてたが訂正する事はなかった。売れる恩は売っておく
べきだと考えたのだ。

「えーと、先ほどの発言は撤回しますね。改めてお礼を言った方がよろしいです
か？」

「誤解が解けたなら何よりです。それに、先行投資だと思えば安い」

将来、栗花落カナヲは上弦を撃破する要の一人になる。明るい未来のため、そう
いった人材には、お金は惜しまないのだ。



世間話も終わり、胡蝶しのぶが部屋を退出する際、裏金銀治郎は呼び止めた。

「胡蝶さん、少し真面目な話があります」

「胡蝶さん……ですか、フルネームで呼ぶのが貴方だと思っておりましたが」

「お気に召しませんでしたか？私の事は、裏金さんでも銀治郎さんで構いません
よ」

いい加減フルネームで呼び合うのは長ったらしいので、まあ良いかと思う二人である。それに、秘密を共有する仲でもあり、距離感は縮まっていた。

「はいはい、裏金さん。どういったご用件ですか？」

「神崎アオイが、カルテを確認する恐れがある。鬼肉を食べる前と後で治療方法が変わらないのに、怪我の治りが明らかに早いと怪しまれかねない」

「まさか!？」

その話を聞いて、胡蝶しのぶは青ざめた。

何を考えてかと言えど、一つだ。すでに、消されているという想像だ。目的のためならば、手段を選ばない男であると、彼女も分かっていた。

「何もしていない。廊下で盗み聞きしただけだ。私一人で処理するのは、朝飯前だ。だが、胡蝶さんとの協力関係を破綻させる気はない。だからこそ、こうして話している」

「裏金さんに任せた場合は、どうなるのですか？」

「勘の良いガキは嫌いだよ。不穩の芽は、早めに摘む必要がある。つまりは、死んで貰う。強権で急な人事異動という事もできるが、確実性を取りたい」

「そうですね、貴方はそういう人間ですよね。はあく、分かりました。こちらでここ最近の患者には新しい治療方法を行っているとの嘘の報告を書いております。彼女の事ですから、それで問題ないはずです」

それならば、良いでしょうといひ裏金銀治郎は、彼女を見送った。

医師である彼女が、患者のカルテを改竄するとは、成長を喜ばしく思う裏金銀治郎であつた。

さあ、主人公!!

裏金銀治郎が君のことを頸を長くしてまっているぞ。

君が望むすべてをあたえようへーへ

だから、上弦と下弦・・・その上司もよろしくね。

さて、そろそろ、例の下弦を探しに向かうか。

首から上があればいいから、下半身は吉原の最下層風俗で稼がせるか。

07.. そうだ京都、行こう

隔離施設に絶叫が響き渡る。

それを気に留めないほど調教された鬼達は、胡蝶印のバイアグラの製造に従事する。隔離施設に新たに搬入されてくる鬼は、その様子を見て絶句する。人間など餌にしか思っていない鬼が、同胞である鬼を解体して機械に放り込んでいるのだ。

目の前で繰り返し返される惨状の前に自らの行く末を心配するのは、正常な反応だ。普通の刀で首だけにされた鬼が、裏金銀治郎の前に脂汗をかく。

「楽にしたまえ。私は、頭こうべを垂れなかったからと言って、無為に貴様等を殺すような事はしない」

この時、鬼は、頭だけにしておいて頭こうべを垂れるも糞もないだろうと思っていた。事実、その通りである。

「なんなんだ!! ここは!?! これが人間のやることか」

鬼が声を荒立てた瞬間、一閃が走る。

その瞬間、鬼の頭部の半分から上が床に落ちて赤いしみを作る。鋭い切れ味で、

鬼は床に落ちた物が何かを認識するまで痛みすら感じていなかった。

「よいか、貴様が今やるべき事は、いかに私の機嫌をとるかという一点に尽きる。私が満足できる答えを持っていたときのみ貴様は解放されるのだから」

裏金銀治郎は、どこぞの上司のモノマネをしてみたが、効果は抜群であった。

鬼視点では、鬼舞辻無惨の陰が見えるほどに冷酷で、絶対的な恐怖を感じ取った。裏金銀治郎の実力は、雑魚鬼と比較すれば遙か高みにある。だからこそ、そのように感じてしまったのだ。実際は、鬼舞辻無惨の方が更に雲の上だ。

「知っていることは何でも話す!! いいや話させて頂きます。どうかお慈悲を!!」
「素直な鬼は、好感が持てます。実は、探している鬼がいるのでその所在を知っているか確認したい。なーに、鬼の中では有名のはず」

誰のことを察したのか、鬼の顔は青ざめる。

前門の裏金銀治郎、後門の鬼舞辻無惨であった。黙っていれば、生き地獄。しゃべればあの世——鬼は、生涯通じて、これほどまで理不尽な状況はないと確信していた。

「あ、あの方の所在は——」

「そっちじゃない。下弦の肆——二本の角を生やした女の鬼だ。名を零余子という」
隔離施設は、一言でいって花がない……外で咲き誇る藤の花がくとか意味では無く、女性的な意味の花がないのだ。胡蝶しのぶという女性を除いてと言う意味でだ。そこで、むさ苦しい環境に花を飾りたいというのが、目的の一つだ。ただ、チヤホヤされるのではなく、生け花の如く飾られる。

施設にいる鬼達には、全員同じ事を確認していたが誰も情報を持っておらず、殺して貰えるという報酬を手にする鬼は誰もいなかった。

「その方なら、一ヶ月前京都で見かけました!!」

「——真実か？」

鬼は、必死に情報を伝える。

人を見る目がある裏金銀治郎は、鬼の表情、口調や仕草などからそれが真実であつたと考えた。嘘であつた場合には、大型のミキサー機で生涯ハンバーグの材料を生成し続ける、リアル増える肉状態になる。

「本当だ、だからお慈悲を!!」

裏金銀治郎は、日輪刀を構えた。

「勿論だ。下弦の肆を捕まえて戻ってきたら、真っ先に殺してやろう。この私に囚われたことを感謝するといい。慈悲をくれてやる——金の呼吸 式ノ型 金縛り!! 苦しむのは、僅かな時間だ」

鬼の脳髓に針金を打ち込み活き締めにした。

持っている情報を嘘偽り無く伝えたにも関わらず、地獄に送られるのは何故だ!! と、声を荒立てたかったが、もはやそれも叶わない。だが、鬼は知らない。己がどれだけ恵まれているのかを。

隔離施設において、殺して貰えるというのは何よりも幸せなことなのだ。

.....

.....

...

それから、その日のうちに裏金銀治郎は、産屋敷耀哉に面会を求めた。

報連相——それは、社会人として常識である。部下の行動を常に上司が把握する必要がある。勿論、責任を押しつけられないようにする為の施策でもあった。

「先日ぶりだね銀治郎。なにかあったのかい？」

穏やかな声の産屋敷耀哉だったが、心の中では、何が報告されるか不安に思っていた。基本的に、吉報が届くがそのどれもが単純に喜べない物が多かったからだ。だが、確実に成果を上げる裏金銀治郎の手腕を評価していた。

「二つございます。一つは、ここ最近、蝶屋敷で新しい治療法を行うようになってから隊士の質が改善されております。その証拠に、蝶屋敷に入院しに来る患者の大半は、入院経験が無い者達でございます」

「そのようだね。私の所にも、鬼討伐の報告が多数挙がってきている。しかも、重傷者の数も激減している。良いことだね」

実戦経験を積み、肉体能力が向上した隊士達は、一皮むけた大人になったのだ。鬼滅隊として、喜ばしい限りである。

「その通りでございます。しかし、それが思わぬところで悪影響がありました。隊士の質が向上し、鬼を順調に狩る事から階級を上げる者が多数おります。つまりは、人件費に多大な負担が発生してしまいました。急減速した赤字が、加速度的に以前の水準にまで数字が戻りつつあります」

裏金銀治郎としても、笑えない事態であった。良かれと思い、隊士を強化したら

人件費にそれが直撃するなど考えられなかったのだ。問題というのは、往々にして後から見つかる物だ。今までは、死人が多く出る事で組織のピラミッド構造が維持できていたのだ。

それが裏金銀治郎と胡蝶しのぶの手により、平成時代の人口統計みたいな歪な形へと変わりつつあった。これでは、破産の危機に陥るのは時間の問題だ。

「一難去ってまた一難。銀治郎の事だから、何か対策も考えてきているのだろう」「勿論でございます。まず、鬼滅隊の隊服……特許申請して、警察や軍に売りましょう。雑魚鬼の爪や牙を防げる時点で、現代において画期的な技術です。許可を頂けるのでしたら、各方面との調整などは全てお任せください」

実現すれば、赤字を黒字に変える事ができる素晴らしいものである。

「あれは一族の秘伝の技術だが——そうもいつてられないか、許可しよう」

「ありがとうございます。技術というのは、いつか発見されます。誰かが漏洩するかもしれません。機会を逃さず英断してください。感謝致します」

感謝どころか、そういう技術があるなら早く金にしておくと内心思っている口にしなのが裏金銀治郎の良いところである。

「構わないよ。それで、二つ目は？」

「下弦の鬼を京都で見たと口走る鬼がございました。是非とも、私と蟲柱の胡蝶しのぶを派遣して頂きたくお願い致します。是が非でも、下弦の鬼を捕獲したい所存でございます」

「下弦の鬼を捕まえて何をするのかな？まずは、それを聞いてから判断したい」

裏金銀治郎は、厚めの資料を机に置いた。

それを産屋敷耀哉の子供が手に取り、読み上げる。そこには、予てより計画していた柱専用の緊急活性薬のメイン素材として使われる事が書かれていた。鬼との戦闘中での使用が前提となるため、即効性が求められる品物だ。その為、材料となる鬼にも品質が求められる。

詰まるところ、材料は、十二鬼月しかない。十二鬼月を倒すために、その素材を……とか、矛盾も甚だしいが、ゲームではよくある事だ。

「何度も言いますが、備えあれば憂いなしといえます。用意できたとしても最終的に使用するか否かを判断するのは当事者達です。現柱達は、私と異なり代えが利かない実力者達です。失う可能性を少しでも下げておくのが責務かと存じます」

「分かった、許可しよう。ところで、鬼を利用した壁屋という遊郭を作ると書かれてあったが、ちょっと、私には理解できなかったので説明をして貰えるかな」

ちなみに、産屋敷耀哉はちょっとどころでは無く、全く理解できなかったのだ。それもそのはず……気立ての良い美人の妻を持ち、子供もいる。理想的な家庭を築き上げている勝利者からしてみれば、独身貴族の気持ちなど推し量る事が難しいのだ。

その為、裏金銀治郎は懇切丁寧に説明した。首から上を隔離施設で管理、首から下を吉原以外の遊郭で働き手として活用するという物だ。首から上がない事を不審がられないように、壁から……と、未来を先取る遊郭を作るという物だ。男なんぞ、顔が見えなくても綺麗な肉付きの体があれば、それで十分だと考える獣だ。しかも、自動修復機能までついているから、ぞんざいな扱いもできる。

時代が時代ならセクサロイドと呼ばれるだろう。

「ごめんね銀治郎。それは不許可」

「そうですか……ならば、隊士専用にして福利厚生を手厚くするというのはいかがでしょうか!? 利用料を多少取れば、財政にも!!」

「却下」

鬼滅隊から魔法使いの誕生を良しとする当主であった。

そのおかげで、裏金銀治郎が、喪男の救世主になる事はなくなった。



蝶屋敷へと足を運んだ裏金銀治郎。

「そうだ、京都へ行こう」

「なんですか、いきなり部屋に來たと思えば」

それだけの会話で、胡蝶しのぶはクロゼットにしまい込んであった。ドレスに手を掛ける。アンブレラ・コーポレーションの代表として、今までに数々のパーティーへと連れ出され、染みついてしまった行動であった。

「何をやっているんですか、胡蝶さん」

「なにして、衣装ケースにドレスを……」

「有りか無しかで言えば、有りですが」。隊服なんぞ、有っても無くても同じようなものだからね」

「——!! もしかして、鬼ですか？」

京都へ向かう目的を理解した胡蝶しのぶは、何事も無かったかのようにクロゼットを閉じた。そのクロゼットの中には、代わり映えない隊服が何着もあるのを見つけてしまった。裏金銀治郎は、出かけ先で服を何着かプレゼントしようと考えた。

「別にドレス姿でも構いませんよ。相手は、下弦の肆です。隊服なんぞ、紙切れみたいな物。むしろ、あんな目立つ服を着ていては、相手が逃げてしまう可能性もある」

これから向かう先は、下弦の鬼が居る場所だ。例のパワハラ上司曰く……柱を見ると常に逃げることを前提に行動すると指摘された鬼だ。

つまりは、私服で一般人に紛れ込んだ方が遭遇率は高い。

「ですが、京都ですと富岡さんが担当じゃありませんか？」

「殺すだけなら、彼一人でも十分でしょう。だけど、目的は生け捕りです。勿論、お館様から許可も頂いております」

現役柱である胡蝶しのぶ、加えて元柱である裏金銀治郎……この組み合わせを派

遣する時点で、表に出せない仕事であるのは明白であった。しかし、相手の戦力も考慮すれば、これが最適解でもある。

「生け捕りって、正気ですか!? 施設で管理している鬼達とは別格ですよ」

「正気なら、鬼滅隊に所属していません。ですが、これはチャンスです。予てより計画していた柱専用の緊急活性化薬。材料に相応しいと思いませんか?」

柱専用の緊急活性化薬については、目下研究中だが成果は芳しくなかった。求められるのは即効性だ。全治一ヶ月が一日で治りますとかそんなレベルでは無い。全治一ヶ月が、1分で治るといったそういうレベルが求められる。

数百体の鬼を生き締めして管理できる施設が用意できるのならば、実現できる。集めた鬼の血肉をひたすら煮詰めていくという地味な作業をこなすことで。だが、そのような大規模な施設は現実的でない。

「相応しいですが、他に手が無いのも事実ですよね」

そういい、胡蝶しのぶは、刀を手にし、出かける準備を始めた。着替えを持たないことから、裏金銀治郎が「ドレスをお忘れですよ」と、からかっていた。

哀れな鬼の子に救いの手をさしのべる。

鬼滅隊に所属にも関わらず、仏のような裏金銀治郎です。

皮膚が硬い鬼とかはぎ取れば、防具の素材になるよね——へ

鬼っ子の角だって粉末すれば漢方薬みたいに滋養強壮にいいはず。

まってね!! 迎えに行くから。

08.. お客様のお呼び出しを致します

何時も読んでくれてありがとうございます。

感想を書いてくれた読者の皆様、本当にありがとうございます!!

執筆意欲がモリモリ沸きますへーへ

京都……歴史的建造物が建ち並ぶ日本が誇る都である。

観光客も多く訪れるため、人の出入りが激しい都市であった。人口も多く、人が多少行方不明になったとしても誰も気にとめない。そもそも、情報化が進んでいないこのご時世、行方不明なんぞ身内でもなければ、騒ぐ者はいない。

新聞で掲載されたとしても誰かの記憶に残らない。人は、他人に無関心だ。

そんな場所へ向かう列車の中、洋服を着た男女が一等客室に乗っていた。裏金銀治郎と胡蝶しのぶである。だが、見るからに不機嫌な胡蝶しのぶが裏金銀治郎を顎で使う。

「胡蝶さん、お茶を買って参りました」

「ご苦労」

列車の乗車前後で色々とやらかした裏金銀治郎が原因である。彼自身も調子に乗りすぎたと反省していた。

——5時間前。

下弦の肆に不意打ちを食らわせるため、鬼滅隊の隊服は相応しくないと説得した裏金銀治郎。効率よく鬼を倒すためならばと、デパートに洋服を買に行った時に事件は起こった。

「同性としても羨ましいほどのスタイルと美しさです。それに、素敵な旦那様で美男美女とは、この事ですね」

裏金銀治郎は、胡蝶しのぶのファッションセンスを疑っているわけでないが、店員に一式揃えてくれるように依頼した。それに、今回の鬼捕獲は、秘密裏に行う必要があった。そんな状況で隊服では問題がある。

元が良いと何を着ても似合うのは、当たり前だ。店員が胡蝶しのぶをべた褒めす

る。

「私は、未婚ですがなにか？」

胡蝶しのぶの眉間がピクピクと動く。

一流デパートの店員は、動じない。名誉挽回のため、即座に二人の関係を脳内でシミュレートした。この洋服売り場は海外からの輸入品も扱い華族の方にも好評なお店だ。その為、利用客の大半は富裕層の夫婦だ。

愛人関係、親子関係、恋人関係の三択に絞られた。

「失礼を致しました。デパートを出て、南に三つ進んだ十字路を左に曲がると、ご休憩ができるホテルがございます。お詫びに無料券をお納めください」

「——へえ、そういう風に見えますか」

店員が選んだ選択肢は、愛人でも恋人であっても問題ないベターな選択肢だ。青筋の数が倍増する胡蝶しのぶである。

裏金銀治郎はそのやり取りをみるだけで吹き出しそうになった。

実に面白い物が見られたと、代金を支払い早々にお店を出た。その間、胡蝶しのぶは不機嫌で「二度とお店に来ません」と言うほどだ。

——1時間前。

そして次の事件があったのが、列車に乗車してからだ。

列車の一等客席という事で、金に余裕のある者か品格のある人達しか乗ってこない。一組の老夫婦が乗り合わせてきた。偶然にも二人の横の座席に座る。

お年寄りとは何かとお節介好きが多い。

「綺麗なお嬢さんですね。よかったら、みかんでもいかが？」

「ありがとうございます、おばあちゃん」

お嬢さんと言われ、胡蝶しのぶはご機嫌であった。

鬼滅隊では、お母さんなど年齢以上の扱いしか受けていないから、新鮮に感じていた。それに、孫を可愛がるような口調で品の良い人から言われれば誰だって、気分は良いだろう。

愛情に飢えている胡蝶しのぶには、それが染み渡る。

「お父さんはどうですか？」

「ぶほっ!!ごほっほほほ」

お父さんとは、誰のことだろうと思考を巡らす裏金銀治郎。思わず、左右を見渡してみた。当然誰もいない。子持ちでもないのにお父さんとは地味にシヨックを受けていた。彼は、呼吸法と下弦の鬼を食べた影響で老化が抑えられている。そのおかげもあり、年の割には若く見えると評判だったが、お年寄りは鋭い。

だが、実年齢で計算しても胡蝶しのぶみたいな大きな子供がいる年齢ではない。居たとしたら、それは10代前半でやらかした性犯罪者だ。

悩む裏金銀治郎の顔をみて、胡蝶しのぶがミカンの果肉を鼻から吹き出すほどの勢いで咳き込む。美人が台無しになっていた。一度、笑いのツボに入ってしまった人は、そこから中々抜ける事はできない。

「御婦人……娘が失礼をしました。ほら、しのぶ、パパも謝るから頭を下げなさい」
老夫婦が勘違いしている親子という設定で話に乗ることにした裏金銀治郎。
裏金銀治郎が自らを「パパ」というあたりが更にツボに入り、胡蝶しのぶが「お願いですから、もう止めてください」と、笑いを必死に堪えて懇願していた。

その顔をみて、加虐心がそられると思ってしまった彼である。

この時、二人は知らなかった。一等車両に鬼滅隊事後処理部隊『隠^{カクシ}』の後藤と呼

ばれる男性が帰省のため、乗り合わせていたのだ。普段から顔を隠している彼等の素顔を知る者は殆どいない。当然、二人も知らなかった。

後藤は、蟲柱と金柱が想像の遙か上をいく関係であったと勘違いする事になる。後藤は、酒に酔うと口が軽くなるタチであり、その誤った情報が拡散するのは、時間の問題だ。



京都に到着した。

裏金銀治郎の根回しの良さを信じていた胡蝶しのぶは、酷い裏切りに会うとは思わなかった。鬼を倒すのは柱の役目で間違いない。つまりは、鬼を探索するのは別の者が担当するのが常識であった。

「で、裏金さんの私兵の皆様は？」

「何を言っているんですか？ 勤め人の私に私兵なんているはずないでしょ。それに、発想を変えましょう。彼女の方から、こちらに来て貰えば良いんですよ」
信じられないという顔をする胡蝶しのぶであった。

今までの仕事ぶりを見ているからこそ、秘密裏に動かせる部隊を作っていると確信があったのだ。何かあれば鬼滅隊もろとも自爆するだろうとも。

だが、事実は全く違う。裏金銀治郎は、正しく職務を全うする隊士の鑑のような存在である。胡蝶しのぶは、そのあたりが理解できていない。

「——あれ？ 裏金さん、もしかして下弦の鬼とお知り合いだったりしますか？」
裏金銀治郎が口にした彼女という言葉が胡蝶しのぶは、気になった。隔離施設で血も涙も無いような事を行う人が、下弦の鬼に対して一瞬でも優しい声になった。胡蝶しのぶが真っ先に考えたのが、裏金銀治郎の身内の誰かではないかという事だ。それならば捕獲したいのも納得がいく。他の柱に見つかれば殺害しか選択肢はないからだ。

「知っている情報なんて殆どありませんよ。そうですね……鬼に同情する訳ではありませんが、不憫な鬼です。何年かぶりに上司に呼び出されたら、頭こうべを垂れて土下座しなかっただけで文句をいわれ、指摘に対して反論したら反論するな的な事を言われて殺される——僅か10数コマしか生存できない子ですよ」

「ちよっと、何を言っているか分かりませんよ」

「そうでしょうね。真面目に知っている情報を連携します。下弦の肆で二本の角を生やした女の鬼。名前を零余子という。能力は不明ですが、柱との戦闘を極力避けている事から戦闘向きの能力ではない可能性も高い。容姿は、こんな感じの鬼です」裏金銀治郎は、知りうる限りの情報を提示した。似顔絵だって、絵師に依頼して何度も修正し、ほぼ完璧に再現している。下弦の鬼相手にそれだけの情報を持っているだけでも普通ならあり得ない事だ。

十二鬼月を相手にする場合、普通は初見なのだ。

「詳しいですね。まるで、見てきたかのようにです。もしかして、裏金さんって鬼側のスパイだったりしますか？」

もちろん、冗談で言っている胡蝶しのぶである。そもそも、裏金銀治郎が鬼ならば、勝手に自滅していた鬼滅隊で裏方を頑張ったりしない。

「違いますよ。鬼滅隊にはいませんよ。どこぞの遊郭の上客や宗教法人の信者、どこぞの車掌なら別ですがね——そろそろ、待ち合わせの時間だ」

裏金銀治郎は、胡蝶しのぶに嘘はつかない。大前提として、聞かれなければ答えない。

裏金銀治郎の意味深なセリフを聞いたたさうとした時、二人の前に外車が停車する。中から運転手がおりてきて深く頭を下げる。

「裏金銀治郎様と胡蝶しのぶ様でございますね。府知事がお待ちです。どうぞ、お車にお乗りください」

「ああ、お迎え感謝する。さあ、お手をどうぞ」

裏金銀治郎は、私兵など持っていない。だけど、権力者とのコネを最大限活用する術を知っている。胡蝶印のバイアグラと多額の賄賂を携えこの場にもきていた。大正の世で世渡りするには、こういう男が必要なのだ。

その夜、府知事主催の真っ黒いパーティーへの出席を余儀なくされた二人。当然、立場はアンブレラ・コーポレーションとして、胡蝶印のバイアグラの販路拡大にも努める事になった。



裏金銀治郎は、府知事という特権階級の協力を得ることに成功した。

下弦の肆を隠れ家からあぶり出すため、行方不明者が多発している地区で、ある

放送を流して貰う事と人気の無い倉庫のレンタルを依頼した。その依頼内容が、簡単であったため、府知事側としてはお安いご用だと快諾した

念のため、大きめの建物にも同様の放送を流された。とあるデパートでは――

「お客様のお呼び出しを致します。零余子様、上司の無惨様が二日後の17日の19時に京都海運17番倉庫でお待ちしているとの事です。繰り返し、お伝え致します

――」

デパート内の放送にも関わらず、海際の倉庫への呼び出しとか理解に苦しむ内容であった。その為、一般人にしたら悪戯だを考える。

だが、偶然にもデパートという快適な空間を拠点としている鬼がいた。日陰の間、品揃えなど便利の一言に尽きた場所であった。

「お呼び出し!? そんな馬鹿な!! 今まで、強制移動させられていたのに何故!?!」
彼女――下弦の鬼である零余子が考えたのは、罠という線だ。今までは、いつの間にか鬼舞辻無惨が現れ、パワハラプレーをして帰るという事が常であった。だといふのに、唐突の呼び出しである。

しかし!! 鬼舞辻無惨という名前が出てきた以上、無視できないのも事実であつ

た。

真実であった場合、呼び出しに応じなかったらどうなるかと言われれば、100〇殺されるのだ。つまりは、1000〇嘘だという確証がない限り、この呼び出しに応じる他なかった。

零余子側からは、コンタクトは取れない。彼女の上司は、上弦の鬼ならば、まだしも入れ替わりの激しい下弦の鬼に連絡方法など教えていないのだ。

「どうすれば……でも、私の名前を」

館内放送で呼ばれた「零余子」という名前が、この呼び出しが嘘だと言い切れないポイントになっていた。彼女の本名を知る者など、鬼舞辻無惨以外にあり得ないのだ。

そんな出来事があった為、彼女の精神に多大な負荷がかかった。そして、彼女の思考は迷走し、一種の回答に至った。

今までの働きが認められて遂に上司のお気に入りになったのではないかと、ポジティブな発想へとシフトしていた。上司として、男である——女である自分の方が下弦の伍の子供より何倍も役に立てると考えた。

「間違いないわ!! 綺麗な服を用意しないといけないわね」

彼女は、自らの先見の明を褒め称えていた。

デパートならば、望む品が全て揃う。だが、彼女は知らない……パワハラ上司は女にもなれるという事実を。そして、女になった時は、「その格好はなんだ? 私への当てつけか?」と、己より高級な身なりをしていたら、殺されるという事実を。

裏金銀治郎が、怪盗キッドみたいに変声機なしで無惨のマネをできたら、こいつなら操れるんじゃないかと思ってしまった。

さあ、狩りの時間だ。

モンハンの言えば、閃光玉と罾を現地調査分まで持ち込んでのスタートである。

09..全て上司が悪い

胡蝶しのぶは、事前に作戦を聞いて不安しかなかった。

その作戦とは、呼び出しに応じた馬鹿な鬼がノコノコとやってくる。そこで、裏金銀治郎が無惨ロールを行い、ひれ伏せと命令し……そこを、胡蝶しのぶが日輪刀を使い麻痺させる。

その一瞬のスキで、金の呼吸で絞めるという作戦である。

「あのー、正直、私達二人掛かりなら正面切っても十分やり合えると思いますよ。今からでも、作戦を変更しませんか？」

「胡蝶さんは、少し思い違いをしております。現役柱達は過去最高戦力であると、お館様も絶賛するほどだ。元柱ではありませんが、私は貴方達より数段劣るんです」金の呼吸という新しい呼吸法と下弦の鬼を食い殺した功績で柱になったに過ぎない裏金銀治郎。勿論、平均的な柱の実力は有している。

「はあー、そうは思えませんが。で、裏金さんは先ほどから何をしているんですか？」

数時間後戦場となる倉庫。その壁に、血文字を書いていた。鬼滅隊には、色々な地方出身者がおり、地方固有の祈願とか色々ある。その一種ではないかと推察していた。

「完封するための準備ですよ。下弦の鬼ともなれば、血鬼術を保有している。逃げ特化や索敵特化の場合、面倒だと思いませんか。ですが、血鬼術が使えない……もしくは、著しく発動を阻害する事ができれば、戦いが楽になる。違いますか？」

「えっ!? そんな事が可能なんですか!!」

胡蝶しのぶは、驚きを隠せなかった。

もし、裏金銀治郎が言う事が事実であるなら、本当に下弦や上弦に留まらず鬼舞辻無惨を倒す力になると思っていたからだ。そして、姉の敵である鬼を倒すにも、有効である事は間違いなかった。

だが、そのような話は、鬼滅隊の最高戦力である柱の彼女でも知らなかった。

「勿論できますよ。だから、隔離施設は鬼舞辻無惨の襲撃を逃れている。鬼舞辻無惨は、鬼の居場所を把握できるし、鬼が視覚範囲にいれば思考が読めます。他には、鬼に呪いを掛けており自らの情報を喋ろうとしたら、どこに居ても殺す事まで

きる」

「鬼がそんな情報を!? それとも、鬼舞辻無惨に遭遇した事でもあるんですか?」
胡蝶しのぶは、混乱していた。まるで、明日の天気を話すように誰も知らないとされるラスボスの能力が公開されたのだ。

「私が生き残る為に胡蝶さんだけには、色々と教えてあげます。私は、貴方だけに
は正直ですよ。安心してください、私は人間側です。例えば、勧誘好きな鬼が来ても
逃げ切ります」

「裏金さん、このタイミングで色々と暴露するとか、性格が悪いと言われたことあり
ませんか? それに、少し前ならいざ知らず、今の貴方は鬼滅隊で代えが居ない
立場です。一緒に仕事をして理解しましたが、組織はきれいな事だけでは成り立たな
い」

鬼を滅する為なら、今すぐにでも裏金銀治郎が持つ情報を残らず絞るのが正しい
判断であった。だが、腐っても元柱であり、その実力は高い。まもなく、下弦の鬼
がくるにも関わらず、金柱である裏金銀治郎を無力化できる自信は彼女にはなかつ
た。

裏金銀治郎もその事が分かっているからこそ、このタイミングで話したのだ。

「聖人のような性格だと自負しております。大丈夫です……鬼を駆逐して楽して安全に暮らしたいのが目標です。それでも、柱として貴方より長く在籍していたので、機を見て色々情報展開いたしますよ。勿論、知っている事ならば、聞かれればお答えします」

「はあ、食えない性格ですね。分かりました。一応、裏金さんの事は全面的に信用します。信頼はしていませんけどね。で、血鬼術を妨げると言っていたソレはなんですか？」

胡蝶しのぶは、お館様からの依頼があったとはいえ、裏金銀治郎の手を取ったのだ。その時より、姉の敵を討てるならと清濁併せ飲むと決めた心を思い出した。

既に、後戻りなんてできない。

「血鬼術——血界^{けっかい}。四方と天井に血文字を刻むことでその空間での血鬼術の発動を阻害します。血鬼術を阻害させる度に血文字が薄れていくので、効果時間は血文字を確認してください」

「得心がいきました、裏金さんが討伐したという下弦の鬼を食べましたね」

胡蝶しのぶも、そこまで説明されれば理解できた。隊の規約として、鬼を食べてはいけないうんて項目はない。前例こそあれど、倫理的に書く必要はないとされている内容であった。

「下弦の鬼を倒した際、私も瀕死の重傷を負いました。生きるためだったと言い訳だけはさせてください。それに、鬼滅隊の歴史の中では、鬼を食べた隊士は、そして珍しくはありません」

「はい、ストップ!! これ以上、鬼滅隊の黒い情報を教えないでください。一人で抱えてくださいね」

既に、黒い情報でお腹がいっぱいの胡蝶しのぶであった。

裏金銀治郎は、折角の機会だったのにと悲しみに暮れていた。鬼舞辻無惨が産屋敷一族出身である事、産屋敷耀哉が珠代という知古の鬼がいる事、上弦の壺が元鬼滅隊の柱である事など胃痛がする話題は盛りだくさんであった。

「仕方ありません。では、そろそろ配置に、狩りの時間です」

無惨ルールをする為、刀を隠した。少しでもパワハラ上司に近づけるように不機嫌なオーラ……濃厚な殺気をばらまかれる。無作為に飛ばされる殺気を身を感じた

胡蝶しのぶは、十分現役の柱に通じると評価する。



京都海運17番倉庫。元より海際にある倉庫で、日中でも人が少ないが夜になれば地域全体が無^ん人となる。

コツンコツンと下駄の音が響く。漆で加工され花柄が描かれた品であり、赤色の着物とよく合う。そんな、京都のデパートで一番高級な和服に身を包んだ女性……そこはかとなく気品があった。

場違い感が漂うが、着物に身を包んだ女性——下弦の肆である零余子は、お持ち帰りにも対応できる準備をしてくるほど気合いバッチリであった。

鬼舞辻無惨から名指しでの呼び出しがされてから、今までポジティブな考えが進行し頭が花畑となってしまうた。これも全て、部下に過剰なストレスを掛けていた上司のせいである。

正しい思考ができないまでに追い込んでいたのが原因であった。

「あゝ、無惨様。早くお会いしとうございます」

常日頃、パワハラにしか遭わない残念な子が、名前を呼ばただけでこの惨状。彼女自身がメンヘラであった事と鬼舞辻無惨の洗脳に近いパワハラが混ざり酷い事になっていた。

零余子は、呼び出された倉庫前に到着し、中から伝わってくる殺気に下半身が疼いていた。

……

……

…

倉庫の扉が開き、一人の女性が入ってくる。

その様子に胡蝶しのぶは、色々な意味で絶句した。呼び出されてくる馬鹿がいるとは思わなかったという意味と何故に着飾っているかという点である。しかも、裏金銀治郎が持ってきた似顔絵より美人であったのが、いけ好かなかった。

だが、「私の方が美人ですね」と客観的視点からの評価を下し、満足する胡蝶しのぶ。

この時、裏金銀治郎は鬼に背を向けている。自殺行為にも等しい行為だ。背丈が近い事と洋服を着ている事、それから放たれる殺気で下半身がキュンキュンしている事で零余子も正常な判断ができていなかった。

『いつまで頭を上げている。頭こうべを垂れろ』

裏金銀治郎は、鬼の血の力を最大限に利用した。声帯を弄り声色を変え、一点に集中した殺気を放つ。

………

………

…

瞬間的に本物に近い精度を誇った。

だが、一向に頭を垂れて許しを請う声が聞こえない事に裏金銀治郎は、不安に思った。

「無惨様じゃない!! 無惨様は、そんな理不尽なこととは言わない!! 貴様は、だれだ」
恋する乙女の中では、いつの間にか無惨の像が聖人化されていた。

「蟲の呼吸 蝶ノ舞」

死角より、胡蝶しのぶが技を放つ。

当初の計画通りではなかったにせよ、スキが生じたのは事実であった。それを見逃さないのは、流石柱である。

しかし、下弦の鬼とて、伊達に長く生きていくわけではない。胡蝶しのぶが死角から現れた瞬間を知覚している。だが、動くことはなかった。

「血鬼術——転換」

彼女が持つ血鬼術、それは視界に入った者と自らの位置を入れ替える術である。そうすることで、同士討ちも誘えるし、遠くの者と位置を交換する事で逃げることもできる。彼女の性格がそのまま反映されたような術であった。

そして、今回彼女の血鬼術の対象になったのが、目の前で無惨ロールを行っている裏金銀治郎だ。

ズブリと喉元を貫く音がする。そう、貫かれたのは、血鬼術で同士討ちを誘おうとした鬼の方であった。

「裏金さん、全然計画通りになってないじゃないですか。しっかり、してくださいよ」

「ごふっ、貴様一体何をした!!」

藤の毒をふんだんに使った麻痺毒をもらい動けるのは、下弦の鬼だからだ。並の鬼なら即座に昏倒する量であった。

下弦の鬼は、毒を中和するため少しでも時間を稼ぎたかった。だが、絶対に逃がさない意気込みの裏金銀治郎は、刀を手にし、殺しに掛かる。

「話は、こいつを絞めてからだ。金の呼吸 伍ノ型 精神剥奪」

裏金銀治郎の刀の先は、釣り針のように返しが付いている。そこに、神経を引っかけて引きずり出すという繊細の技である。生きたまま、神経を抜かれる鬼としては、手足を切断されるとは比較にならない激痛を感じる。

「ギャア、アアアアア——」

鬼といえども痛覚はある。無駄に再生能力がある為、痛みに鈍感になる者が多い。だから、忘れていた痛覚を思い出させるのが伍ノ型である。

激痛で気絶し、ピクピクと痙攣している。口からは、泡と吐瀉物で綺麗な服が台無しになっている。その様は無様で有り、鬼舞辻無惨が見たら、即刻解体されるほどだ。

「うわあぁ、痛そう。金の呼吸って、そんな技ばかりですよね」

「攻撃に優れた呼吸ではありませんから、搦め手が多いんですよ。それに、今の技を決められたのは、胡蝶さんの毒で動きが遅かったからです」

裏金銀治郎の日輪刀に白い繊維のような物が掛かっている。下弦の肆から抜き取られた鬼の神経である。そして、神経を綺麗にたたみ清潔な布で覆いポケットにしまい込む裏金銀治郎。

もし、下弦の肆の血鬼術が発動できる条件下であれば、二人では苦戦を強いられていただろう。切る直前に入れ替わりが起こった場合、同士討ちになる。初見殺しの術であったが、発動しなければ只のカモであった。

「うわー、見てください裏金さん。壁の血文字が消えかかっていますよ」

「恐らく、何度も発動していたんでしょうね。さて、首だけにしたら、頭と胴は毒で処理してください」

裏金銀治郎は、鉄製の小さな箱を取り出した。本当に首だけを持ち帰るためだけに用意された特注品だ。鬼舞辻無惨からの位置特定を防ぐ為、血鬼術も使用している。

拍子抜けするほど簡単に下弦の鬼を倒すことに成功した二人であった。

だが、それは下準備がされた状況に追い込めば下弦の鬼なんぞまな板の上の鯉にすぎない証明でもあった。事実、一部の柱にとっては、下弦など若干体力を消耗する程度の労力で倒せるほどである。

何事もなかったの如く首を箱に詰める裏金銀治郎。その様子を見て、胡蝶しのぶは問いを投げかけた。

「裏金さんは、胡蝶カナエ——私の姉をご存じですよね？」

「知っている。一時期は、同じ柱として仕事もしたことがある。胡蝶さんが、姉の敵を取るために鬼滅隊に所属している事も把握している。最初に言っただけです、復讐のためならば、私の手を取るのが最善ですよと」

「ですよ。今回の一件で、貴方が自信をもってその発言をした理由を理解しました。貴方の血鬼術——上弦の鬼が相手でも効果がありますよね？」

「当然だ——と言いたいですが、下弦と違い長持ちはしないと思います。協力は、惜しみませんので短期決戦にしてくださいね」

胡蝶しのぶは、裏金銀治郎が希望の光に思えた。彼女にとって、彼ほど頼りにな

る男は、現れないだろう。

「ありがとうございます。銀治郎さん」

胡蝶しのぶは、顔を隠し涙を流した。復讐に協力してくれるという心強い味方ができ、緊張の糸が切れたのだ。

「どう致しまして、しのぶさん」

できる男である裏金銀治郎は、上着をそっと胡蝶しのぶに掛けた。

この頃、主人公一同は、元下弦鬼さんのところで奮闘中。

そろそろ、那谷蜘蛛山ですへーへ

銀治郎も、欲しい子がいるからお出かけです。

隊服の新素材を集めに狩猟の時間だ。

銀治郎「よく考えて選べ。今死ぬか、後で死ぬかだ」

PS ..

月曜日は、リアル都合で投稿がありませんので
本日二話投稿で許してクレメンス。

10..ハローワーク

裏金銀治郎は、給与管理を行っており、その中に新人隊士達——竈門炭治郎、我妻善逸、嘴平伊之助の三名分についても漏れずに管理されている。

今までの任務状況を確認し、事が全て原作通りに進んである事に彼は安堵していた。つまるところ、主人公達は順調に成長を遂げている。成長のキーとなる鬼達は、踏み台という役目をしっかり真った。

それだけで、鬼に感謝しても良いとすら思っていた。

「裏金銀治郎様、今月分の書類を持ってまいりました」

「そこに置いておいてくれ」

事後処理部隊『隠』の者が、今月の諸経費を纏めた書類を置いていった。

月末になると積み上げられる書類の山。だが、全集中・常中の呼吸は、戦闘以外にも使い道はある。それが、事務処理の効率化だ。圧倒的な集中力と速度をもって、常人の何倍もの仕事をする。

本当なら、胡蝶しのぶという助っ人がいるはずなのだが、水柱の富岡義勇と一緒に呼び出しされている。

「時代が動くか」

裏金銀治郎は、先日完成したばかりの、柱専用の緊急活性薬を引き出しから取り出した。嚴重に施錠されたケースの中には、赤い液体が詰まったインスリンの注射器のような物がしまわれている。

人の英知の結晶であった。

ケースに収められている数は、全部で10本。柱9人分と裏金銀治郎の分だ。たつた、10本作るのに、下弦の肆がもう殺してくれと言うほどすり潰されていた。そして、重要なのは、その効果なのだが、既に人体実験も完了した。

材料の下弦の肆は、再生ができないようにアイアンメイデンを参考にして作られた特注の箱に詰められている。箱のサイズは小さく、肉体を完全に再生できない。血鬼術もそんな状態では使えないし、使えたとして血界により打ち消される。

その箱——蛇口が付けられており、血が滴り落ちるドリンクサーバーになっている。

今まで数多くの人を殺したのだ。その報いを受けているだけだ。因果応報とはこの事である。この様子をみれば、被害者として少しは気が晴れるだろう。

……

……

…

裏金銀治郎同様に、天性の勘を持つ産屋敷耀哉も、時代の動きを察していた。

歴代最高の柱、下弦の鬼を捕獲、鬼舞辻無惨との遭遇、人を食べない鬼である竈門禰豆子。長い歴史の中でも、短期間でこれほどの事件が起こることはなかった。そして、鬼滅隊の能力も過去最高である。

裏金銀治郎がケースに収まった薬を産屋敷耀哉に渡した。半年に一度の柱会議までに、完成にこぎ着けたのは、裏金銀治郎の日頃の行いの賜である。

「お館様、こちらが完成した緊急活性化薬でございます」

「苦勞を掛けたね銀治郎。後は約束通り、こちらで対応しよう」

依頼された物を完璧な形で納品したのだから、後は上司の仕事であると裏金銀治郎は思っていた。今回の柱会議では、竈門禰豆子の処遇を決めるターニングポイン

トでもある。そんな場面の後に、緊急活性薬の話なんぞ寝耳に水なのは間違いないかった。

「重ね重ね感謝致します。それと、小耳に挟んだのですが、那谷蜘蛛山が大変な事になっていると……」

「かなり奮闘しているが下弦の鬼がいるかもしれないので、義勇としてのぶを向かわせた」

裏金銀治郎は、義勇一人で下弦を秒殺するシーンを思い出した。それに付随して、裏金銀治郎は大事な事を思い出した。この仕事の後、主人公一行が蝶屋敷に入院する事になる。

犬並みの嗅覚を誇る竈門炭治郎に、鬼肉を隠し通すのは至難だ。だが、証拠も無く疑う事はしないのが彼の良いところである。すなわち、鬼肉の現物さえ処分しておけばよいのだ。

「お館様、私もその場に行っても宜しいでしょうか？」

「理由を聞いても良いかい？」

既に、柱二名も派遣しており下弦の鬼ならば討伐は確実であった。にも、関わら

ず自ら志願する裏金銀治郎には別の目的があると察していた。

「勿論でございます。隊士の質が向上している鬼滅隊が苦戦しているというこの状況……つまりは、現場には強力な鬼が複数体いると推察致します。なにより、隔離施設で管理している鬼も量から質へとシフトしたいと考えております」

「より、強い鬼を管理するのは危険が伴うのでは？」

「既に、下弦の鬼の管理にも成功しております。それに——鬼の心の折り方は、鬼滅隊でも柱に並ぶ物だと自負しておりますので、ご安心ください。そして、何より、私の勘が隊服を作る良い素材が手に入ると訴えているのです。必ずや、鬼滅隊の利益に貢献致します」

柱に並ぶどころか、心をへし折る方法については歴代最高であった。

「わかった、許可しよう。但し、現場には『隠』の者達もいる。分かっていると思うが、事は穏便にね」

御意と裏金銀治郎は、返事をして部屋を退出した。

向かう途中に、蝶屋敷により鬼肉の処分も忘れていない。



『隠』の後藤は、那谷蜘蛛山の近くで待機していた。剣士としての才能に恵まれなかった彼等が、激戦区に足を運ぶのは事が済んでからだ。

だが、一向にその報告が届かず、部隊全体に不穏な空気が流れ始めた。

山の中に雷が落ちるような音がした。

「やったか」

『隠』の一人が、言うてはいけない事を口にした。

だが、そのセリフと同時に二人の剣士——最高戦力の柱が到着した。『隠』の者達は、二人も柱が来たことに安堵し、勝利を確信した。それほどまでに、柱という存在は絶対的だ。

「あらら、到着が遅かったですかね。富岡さん」

「行くぞ」

この時、後藤だけが内心ビクビクしていた。

京都へ向かう一等車両での出来事……あの場にいたことがバレたら、どうなるか恐ろしかった。

.....

.....

...

一人、那谷蜘蛛山に別ルートから侵入を図る裏金銀治郎。

「蜘蛛とか好きでは無いのですがね」

文句を言いつつ、奥へと進んでいった。向かう先は、鬼の気配が強い方向だ。だが、一番強い方向へは向かわない。そこに居るのは、下弦であり目的とは異なるからだ。

今回の裏金銀治郎の標的は、下弦の伍の姉だ。

その鬼は、血鬼術で大量の糸を吐き出せる。人が溶ける溶解液にも耐え、柔らかく堅い……理想的な隊服素材だ。更に、服だけ溶かすという液体も、ロマンを感じさせる物である。色々と成分を調整した上で、ペ○ローションという製品でアンブレラ・コーポレーションから売り出す計画もできあがっていた。

表に出せる製品の一つや二つないと、フロント企業とて怪しまれる。こういった、細かい気遣いができる男なのだ。

「鬼は嫌いですが、鬼という材料には好感を持てます」

遠くで木が倒れる音がした。それから、空を見上げると遠くで竈門炭治郎が空を飛んでるのが目に映る。原作主人公を初めて見かけたのが、まさか空を飛ぶシーンだとは裏金銀治郎も想像していなかった。

……

……

…

胡蝶しのぶは富岡義勇と分かれ、我妻善逸を救った。

毒に精通していた彼女だからこそ、蜘蛛へと変貌を遂げた者達を人へと戻せる。柱として必要不可欠な存在だ。那谷蜘蛛山の残党駆除に精を出していた。

そして、童女の見た目をした鬼相手に彼女なりの救いを説いていた。だが、当然、そんな内容を鬼側が聞き入れるはずもない。

「その痛み苦しみを耐え抜いた時、貴方の罪は許される」

裏金銀治郎も大概だが、胡蝶しのぶも存外壊れている。

拷問をしてあげるから一緒に頑張りますようにと言われて、「はい」と言う鬼は

いない。その狂気に当てられ、鬼は寒気がした。

逃げ切る事はできないと本能で理解した鬼は、愚策にも柱を相手にする。鬼の手から大量の糸が放出され、胡蝶しのぶを絡め取り溶かそうとするが、その糸が彼女に触れる事はない。

「蟲の呼吸 蝶ノ舞 戯れ」

胡蝶しのぶが技を放つ態勢に入ったのを目にした裏金銀治郎は、焦った。夜の山中を走り回り、ようやく見つけたと思ったたら、目標が死ぬ三秒前だったのだ。

ここで死なれては、骨折り損のくたびれもうけ。

裏金銀治郎が体勢を低くし、刀を構える。

「雷の呼吸 壱ノ型 霹靂一閃」

全呼吸の中で最速と言われている雷の呼吸。裏金銀治郎も一応というレベルで扱う事ができた。元々、金の呼吸は岩と雷を掛け合わせた呼吸である。元となった呼吸ができないわけではない。

しかし、雷の呼吸の適性は乏しい。我妻善逸よりも遅い……だが、本気でない胡蝶しのぶより、早く首を切り落とすには十分であった。スパッと、痛快な音と共に

切り飛ばされる首。そして、残った胴体を見て、「おやおや」と口にする胡蝶しのぶ。

「横取りは、少しマナー違反じゃありませんか？ それに、その刀……日輪刀ではないですよね」

「ええ、良い刀でしょう？ 伝手で手に入れた長曾祢虎徹という刀です。前に、府知事とパーティーした際に、刀が好きだといったら、安価で譲ってくれました」

鬼の首すら落とせる名刀。男であるからには、一度は手にしてみたかった世にも名が知れている刀である。そんな、刀の話で盛り上がる二人の足下には、首と胴だけになった可愛そうな鬼がいた。

鬼は、考えた。

日輪刀を使って首を切断しなかったのは、何故かと。理由は分からないが、今現れた男なら、自分を助けてくれると淡い期待を抱いた。見た目は童女……そして、相手は男である。女と違い、男相手なら多少は同情が引けると考えていた。

「た、たすけて!! おねがい」

「あのー銀治郎さん、分かっていると思いますがその子は、鬼ですよ。助けてしま

うと鬼滅隊の規則的にもちよつと」

胡蝶しのぶは、心にも思っていないセリフを口にした。

裏金銀治郎が、鬼を助けるなど露程も思っていない。だけど、何処で誰が見ているか分からないので、一応のパフォーマンスをしてるだけに過ぎない。

「私としては、しのぶさんが鬼に慈悲の心を見せていたと思いましたよ。何十人も殺している鬼ですよ。その分、しっかりと回収しないと」

裏金銀治郎のセリフに、底知れぬ恐怖を感じる鬼。

その直感は正しかった。これから、連れて行かれる施設で心を折られ、死ぬまで蜘蛛糸を生成する工業部品とされるとは、思ってもみなかっただろう。

「つまりは、彼女も施設送りに？」

「施設送りとは表現が悪いですよ。就職難のこの時代に、彼女にぴったりの職場を斡旋して上げるだけです。鬼ともなれば、働き先は限られますからね。しかし、問題は逃亡癖がある。下弦の伍が鬼舞辻無惨に呼び出されている隙に仲間と逃げ出すとする程です。まあ、私は、鬼ほど甘くはありませんけどね」

誰も知るはずのない情報。まるでその場にいたかのように言われて、恐ろしさが

倍增した。

隔離施設に連れて行かれる前に、鬼の心は既にズタボロであった。

「では、私は繭にされた隊士を助けに行きますので、そちらはお任せしますね」

「ああ、頑張ってくれ。では、新しい住まいに移動だ。空をよく見ておけ、これが最後だ」

これからは、いつ死ぬるか天井の染みを数えるだけになる彼女である。

柱会議……果たして、元柱で裏方仕事をしている主人公の達位置が困るぜ。

11..等価交換

読者の皆様へ、何時もありがとうございます!!

日間ランキングにのることができビックリしました。

これからもよろしくお願い致します。

良い上司とは、部下の気持ちを察し、言われずとも動く者である。また、部下も上司が求めることを察し、理解し率先して行動する。組織運営を円滑に行うためには、そういった人材が必要だ。

裏金銀治郎は、そういった意味では理想的な部下である。そして、上司でもある。隔離施設にて、那谷蜘蛛山の唯一の生き残りが肉体を再生し蘇生した。首だけの状態にされ、箱詰めされた絶望と苦痛は彼女の精神を蝕んだ。彼女は、何処にいるかも定かで分かっていない。

「目が覚めたなら、仕事の時間だ。働かざる者食うべからず」

姉蜘蛛は、目の前にいる裏金銀治郎を見て、隔離施設に連行されるまでの記憶が呼び起こされた。首を切断され、頭部を粉碎された。そんな、悪魔みたいな男が目の前にいたら、鬼だって顔が青ざめる。

だが、ソレを彼女はぐっと堪えた。

「お、おはようございます」

「——いい心がけだ。では、施設を案内しよう」

挨拶こそコミュニケーションの基本。ソレができる鬼は少ない。下弦の伍を相手に、失敗した事がないのは、伊達ではない。パワハラ耐性は、鬼の中でも上位だ。そんな彼女であるが、隔離施設内を少し案内されるだけで、血の気が引いていった。

.....

.....

...

「あ、あれは——」

姉蜘蛛は、上司であった下弦の伍に近い力を感じ取った。だが、そこに鬼の姿は

ない。あるのは、とても嚴重に管理されている小さな箱。それに付いている謎の蛇口。そして、蛇口からは血がしたたり機械へと貯められている。

「少し前に捕獲した下弦の肆の零余子だ」

ギシギシと、彼女の心が折れそうになる。視界は、モノクロへと変わった。

十二鬼月と呼ばれる最上位の一人が、あられない姿に変えられていた。それだけに留まらず、血を搾り取られるだけの物質に変えられている。

「あ——」

「人をあれだけ殺しておいて、いざ自分の番になったら心を閉ざすとは良いご身分だ。こちらとしても仕事さえして貰えばかまわないがな」

裏金銀治郎は、姉蜘蛛の髪の毛を掴み彼女専用につった仕事部屋に押し込んだ。そして、両腕を壁に突っ込ませ身動きが取れないように固定する。隔離施設内では、血鬼術は使えない。だが、その範囲から外れれば別である。分厚い壁の向こうに手だけ出させる。

「な、何でもするから」

「当たり前だろう。血鬼術で糸を出せ、必要に応じて溶解液も出して貰おう。だが、

こちらが指示するまでは、糸を出し続けろ。働きに応じて、飯のグレードをあげてやる」

最高グレードで猿肉までしか上がる事はない。そして、働きが足りない場合は当然飯のグレードが下がる。最低グレードは、下弦の肆の残骸と隊士達の食べ残しの残飯をブレンドしたこの世に二つとない食事だ。

鬼をすり潰した際に出る肉片を鬼自身を使い濾過する。未来志向のエコ対策だ。「言うまでもないが、持ち場を離れたり逃亡を企てたら、言われなくても分かっているな」

裏金銀治郎は、懷から白い糸状の物を取り出した。そして、爪で引っ搔く。それは、金の呼吸にて、抜き取った姉蜘蛛の神経だ。

その瞬間、姉蜘蛛が激痛を感じ取る。

「ギヤアアアッア」

鬼は、頭部と下半身にわかれても、下半身の異常を察する事が可能だ。つまりは、裏金銀治郎は鬼の神経を使い、苦痛を与えられる。鬼は、無駄に高い回復力から、神経は何度も再生する。その神経を沢山集めたら、どうなるか考えるに容易い。

ポキ

聞こえるはずの無い心が折れる音を姉蜘蛛は聞いた。



裏金銀治郎は、執務室で仕事をやり終えて安堵していた。

なぞのお館様パワーによる金策がないこの世界。あの手この手で鬼滅隊を支えた事がようやく実ってきたのだ。

「僅かに黒字になった」

そう、この1000年赤字を垂れ流してきた鬼滅隊の経営が遂に黒字になったのだ。これは、上弦の鬼を倒す快挙どころか、鬼舞辻無惨をあと一歩まで追い込むに等しい功績である。

更に、この黒字はこれからも加速する予定であった。隊服に使われている技術特許で得られる収入がドンドン伸びているからだ。

だが!! そうは問屋が卸さないのが鬼滅隊である。貧乏神に憑かれているのではないかと疑うレベルの事が待ち受けている。裏金銀治郎が頑張れば頑張るほど、収

入が増えるが支出も増えるのだ。

理由は、簡単だ。

今まで、鬼滅隊の資金繰りが苦しい事から請求がこなかった「藤の家」からも、領収書が届き始めた。だが、悪い言い方をすれば善意につけこみ形でなし崩しにしていた事が正常な形に戻ったのだ。

文句一つ言わずに全ての支払いに応じるのは、裏金銀治郎の思いやりである。金の切れ目が縁の切れ目という言葉があるように、各地にある「藤の家」との繋がりを切るわけにはいかなかった。

「だが、全然足りない」

裏金銀治郎は、この後起きる出来事をしている。だからこそ、更なる金策を急ぐ必要があった。国鉄の列車を吹き飛ばす事件を、『隠』の事後処理能力では追いつかない事態になるのは、火を見るより明らかだ。

つまりは、裏金銀治郎が各方面に賄賂を送り、証拠を隠滅する必要がある。それと、被害に遭った人への口止め料とお見舞い金などが待ち受けている。

「裕福層にペ〇ローションを高値で売りさばるか」

未来を先取るローションプレイができるとならば、大金を積むだろう。商品化のためには、時間を要するが胡蝶しのぶが持つ薬学があればその実現も早い。鬼滅隊の未来と男の未来を一心に背負う若き乙女である。

裏金銀治郎は、時計を確認し、そろそろかと立ち上がる。日輪刀と赤い液体が入った試験管を片手に部屋を出た。

……

……

…

蝶屋敷の縁側に座り、時を待つ裏金銀治郎。

この時、竈門炭治郎は、蝶屋敷に近づくにつれ強烈な鬼の匂いがする事を疑問に思っていた。だが、鬼滅隊の拠点であるこの場所に鬼などいるはずもない……だが、妹と同じく例外が存在するのではと淡い期待をする一面もあった。

その直感正しい。例外的存在はある。隔離施設で鬼滅隊のため、働く鬼達が。

「ごめんください——」

玄関先から声が聞こえてくる。

返事がないので、訪れた者達は中庭へと回った。だが、そこを訪れた『隠』の者達は、非常に見覚えのある顔が二つもあり驚いていた。すぐさま、立場を理解し頭を上げる。

「裏金銀治郎様、栗花落カナヲ様。胡蝶しのぶ様の申し付けで参りました。お屋敷にあがってもよろしいですか？」

「ここは、私の屋敷ではないから許可は出せないな。でも、背負っている竈門炭治郎君と話がしたいから、席を外してくれないかい？」

裏金銀治郎からの要請に戸惑う『隠』の者達。柱会議での一件を知る彼等としては、鬼を連れている竈門炭治郎に何かするのではと、不安があった。

お館様と現役柱達は、竈門禰豆子の存在を承知している。だが、その情報は、まだ何処にも伝わっていない。よって、裏金銀治郎が二人に手を掛けるのではないかと考えたのだ。

「裏金銀治郎様!! 竈門炭治郎が連れている鬼については……」

「危害を加えるつもりはないから、安心してくれ。それに、君も私と話したいだろう？」

裏金銀治郎は、血液が入った試験管を僅かに見せた。

鼻がよい竈門炭治郎は、それが何かを理解する。そして、裏金銀治郎が言っていることも本当であると。

「俺は、ここで大丈夫です。ありがとうございます」

「話が終わり次第、私が送り届ける。体中が痛いと思うが、少し離れよう。我妻善逸君もここに入院しているからね。彼の聴力は、君の嗅覚同様に異常だ」



蝶屋敷から十分な距離をとった竹林の中で、裏金銀治郎は竈門炭治郎と向き合った。

「こちらだけ君の事を一方的に知っているのはフェアじゃない。自己紹介をしよう。私は、鬼滅隊の金庫番をしている者で裏金銀治郎という。主な仕事は、給与管理と資産運用だ」

クンクンと竈門炭治郎の鼻が動く。

裏金銀治郎が嘘偽り無い情報を告げていることを理解した。目の前に男に対して、彼は色々と聞きたい事があった。

「竈門炭治郎と言います!! 裏金さんは、一体俺にどういうご用でしょうか」

「取引しよう。君の妹である竈門禰豆子を人間に戻す事に協力する。具体性をアピールするため、下弦の肆の血液を君にあげよう。柱にも内緒で、珠世という鬼に血を渡している事も黙っておく。他にも、君やその仲間が必要な物資があればいいかなる場合であっても用意する。人、物、金……なんでもだ」

裏金銀治郎の本気ぶりに、竈門炭治郎も流石にたじろいだ。

初対面にも関わらず、なりふり構わぬ全力支援ぶりに混乱するのは当然だ。鬼舞辻無惨に近い血を集めている事など誰にも言っていないのに把握されており、しかも全力で支援すると言われれば尚更である。

「えっ!? なにそれ、怖い。はっ!! ごめんなさい、ごめんなさい」

思った事をそのまま口にしてしまう。慌てて口を塞ぐが遅い。

現状、竈門炭治郎の立場は微妙と言わざるを得ない。鬼を連れた隊士など前代未聞である。鬼滅隊の中で全力で支援するという裏金銀治郎の存在は、頼りになるのも事実だ。

匂いで強さがある程度分かるため、裏金銀治郎の実力が並の隊士ではない事は分

かっていた。柱に匹敵しかねないとも。

だが、そこはかとなくする胡散臭さを感じ取る嗅覚は天性のものだ。

「謝る必要はない。で、君の返事を聞かせて貰いたい」

「あのー、取引といってもこちらは何をすればいいんですか？」

存外頭がいいと裏金銀治郎は思った。

圧倒的な支援を前に、何を要求するか誤魔化したまま取引を成立させようとしていた。

「難しいことじゃない。蝶屋敷には、何故か鬼の匂いがする。それを、知らないふりをして貰えば良い。それ以上は、求めない。例え、君が断ったとしても何もしない。ただ、協力してくれるのならば、君の妹を人間に戻す為に尽力する事を確約する」

下弦の肆の血液を見せる。

妹の為、水柱である富岡義勇にも挑み、鬼滅隊にも入隊した男だ。全ての原動力は、竈門禰豆子にある。ここで頷かなければ、何が目的であったか分からない。

「……一つ、教えてください。なぜ、蝶屋敷には鬼の匂いがするんですか？」

「教えても構わない。だが、それを聞けば私の手を取る以外の道はなくなる。それでも、構わないかね？」

竈門炭治郎の疑問に答えるのは簡単であった。

だが、それはターニングポイントである。理由を聞けば、それ以降、知らぬ存ぜぬは通じない。

だが、お屋形様認可の下で、鬼肉を食わせて隊士を強化しているという事実。それを知ったところで、何もできないのも事実である。情報が漏洩すれば鬼滅隊が崩壊する危険もある。そうなれば、生きている間に妹が人間に戻る事はない。

「俺は!! 妹を人間にするなら迷わないと決めました!!」

「良い返事だ。君に鬼滅隊の真実を教えよう」

頑張れ炭治郎!! 負けるな炭治郎!!

妹の為、全てを賭けると誓ったその時から、君は裏金銀治郎と同類なのだ。

人は、何かを得る為には何かを捨てなければならない。

等価交換の法則だ。

ギリギリ、本日中に滑り込んだ!!

今後、言わせてみたい台詞

煉獄杏寿郎「ローションがなかったら死んでいた」

さあ、このセリフからシーンを連想してみよう。

PS

水曜日分をあやまって即時投稿してしまったW

12.. 珠世所長

何時もありがとうございます!!

裏金銀治郎、約束を守る為尽力する。

主人公である竈門炭治郎を自陣側に引き込めたのは僥倖であつたと裏金銀治郎は、満足げであつた。

人格・能力・運……あらゆる要素を持ち合わすジャンプが誇る主人公。彼が味方にいるだけで未来は明るくなる。だが、その光をダークサイドへと誘う裏金銀治郎。ジェダイの戦士も闇へと堕ちることでボス属性を得て強くなる的な展開もあつた。闇の力を得て更に強くなるのも良し!!

闇を克服し更に明るい光へと変わるも良し!!

どちらに倒れても美味しいと思つている裏金銀治郎である。つまるところ、ボス

を倒しきるまで、持てば良い——その後の事など誰も知らないのだから。

約束通り、本格的に支援を始めることにした裏金銀治郎。だが、執務室を出ようとしたところ、扉が開けられた。そこには、笑顔の胡蝶しのぶが待ち構えている。眉間がピクピクと動いており、負の感情が表れている。

「あら、何処にお出かけですか？」

「怒っていらっしやいますか？あまり、怒ると美人が台無しですよ」

裏金銀治郎は、何故怒っているか理解できなかった。

彼は、部屋の中に胡蝶しのぶを招き入れ持てなす。お茶請けと珈琲を用意しご機嫌を取る。そして、頃合いをみて胡蝶しのぶが話し出した。

「柱会議……なんで、出席してないんですか？お館様が、緊急活性薬を全員に配るという話を聞いていましたから、絶対に居ると思っていました。酷い裏切りです」
元々、先行量産分として現役柱と裏金銀治郎分があったのだ。

そして、企画から完成まで携わった人が、説明の場にいらないのはどういう事だと思っていた。だが、裏金銀治郎からすれば、出るとは一言も言っていない。なにせ、今回の柱会議は、厄ネタが盛り沢山であった。

配布に際し、説明こそ産屋敷耀哉がするが、そんな薬をいつ誰が何処で研究していたかなど、柱達も思うところがある。

当然、そんな疑惑の目が誰に行くかは明らかだ。毒と薬は表裏一体というように、鬼を殺す毒を使い薬学に精通する胡蝶しのぶへと向かうのだ。材料の言及こそ、産屋敷耀哉の無言の圧力で潰されたが、全員が察していた。

「私は、柱じゃありませんよ。それに、その場に私が居たとして話が纏まりますか？ 誰とは言いませんが、鬼が怖くて柱を辞めて裏方にいったとか、金の亡者だとか色々という人達がいるでしょう」

「確かに、そういう風に言う人もいますね。よく、耳にします。でも、引退したのも鬼滅隊を支える為じゃありませんか」

「それが理解できるほど、理性的な柱は半数もいません。それに、信用と信頼とは実績の積み重ねです。現役の柱達は、任務を一緒にこなす事も多かったので横繋がりがあります。ですが、私はありません。なんせ、世代が違いますから」

裏金銀治郎の世代は、現役より一つ上。つまりは、亡くなった花柱と同じ世代だ。今の世代の柱とは、一緒に鬼退治をしたことはない。

「氣むずかしい人達が多いですからね。それでも、一緒に立ち会いしてくれるのが人情じゃありませんか？」

「嫌ですよ。代わりに、お館様への根回しをしました。根掘り葉掘りは、聞かれなかったでしょう。鬼を滅ぼす事と万が一の備えという事。みなが、敬愛するお館様だけの願いなら、しぶしぶ受け入れてくれたはず。それに——人を食べない鬼である竈門禰豆子の方がネタ的に盛り上がったでしょう？」

裏金銀治郎も秘密裏に那谷蜘蛛山に居たので、竈門禰豆子の存在を知っている可能性は確かにあった。だが、人を食べない事については、あの現場にでもないかと分らないと胡蝶しのぶは考えていた。

その為、鬼滅隊の中に独自の情報網を築いているのではないかと疑ってしまう。「やっぱり、近くに居ませんでしたか？ 会議が終わって、直接ここにきたんですよ」

「いいえ、私は蝶屋敷で炭治郎君を待ち伏せしていました。その後も、彼を私達側に引き込むのが忙しくて、会議を盗み聞きなんてしてません」

この時、胡蝶しのぶは、聞き間違ったのではないかと考えた。

一度も会っていない竈門炭治郎をなぜ、自らの屋敷で待ち伏せしているのか。それに、こちら側とは、何処を示しているのか。最近、隊士になった若者をどうして、裏金銀治郎が引き込むか。

まだ、隠している秘密の一端がバレたから処理に困っていると頼られるのなら、彼女も理解できた。神崎アオイの時は、バレそうだったからといって相談されたのに、今回に限っては、その様子すら見せないのが不思議でなかった。

秘密は、知る者が少ない方が良いという男が、秘密を教える行動にでるなど、首を傾げるしかない。

胡蝶しのぶは、裏金銀治郎に詰め寄った。

「どういう事ですか!! あれほど嚴重に管理している秘密をわざわざ教えるとか、何を考えているんです。納得のいく説明をして貰えるんですよね」

「しのぶさんが望まれるのでしたら、お答えします。まず、炭治郎君の鼻は異常だ。犬並みの嗅覚だけに留まらず、言葉の真実までかき分ける。その為、鬼肉の存在は隠蔽不可能。だから、妹を人間に戻す事に協力する事と私が持てる全てを以て支援する事を対価に、見て見ぬふりをして欲しいとね。彼は、快諾してくれたよ」

鬼を殺す毒を研究した胡蝶しのぶにしてみれば、できない約束をしましたね、というのが本音であった。だが、前者より後者の方が問題だと思った。前者については、努力目標である為、実質的にいえば実現しなくても問題ない。

だが、鬼滅隊の金庫番で、政財界や裏社会にも伝手がある男が全力支援する。一隊士には過剰な支援だ。

「竈門炭治郎君には、私も会いました。あの純粹無垢な少年が、よく鵜呑みにして、快諾しましたね」

「人を鬼にできるのですから、鬼から人間に戻す事だって可能に決まっているじゃありませんか」

「理論的には、そうかもしれません。その理論なら、鬼から人に戻せるのは鬼舞辻無惨だけです」

「時代と共に技術も日進月歩です。病気だって、昔なら死病と言われた物でも今では特效薬があったりします。時間を掛けて研究すれば、必ずや人間に戻す特效薬も作れます」

その言葉に、胡蝶しのぶは甘いと考えた。

どんな薬だって、長い研究と臨床実験をする必要がある。鬼を人間にする研究をしている存在など居るはずもないと考えるのは当然の帰結だ。そもそも、鬼は殺すのが当たり前で有り、裏金銀治郎の様に材料扱いする存在も例外的なのだ。

だが、胡蝶しのぶは、裏金銀治郎の言葉を安く見ない。信用と信頼とは実績の積み重ねである。つまりは――。

「薬の現物を持っているのですか!？」

期待の眼差しを裏金銀治郎に向けるが、流石の彼も未来から来たネコ形ロボットではない。言われた物がポケットから出てくるほど準備は良くないのだ。

「しのぶさんは、私が何でも持っているとは勘違いしてませんか？ 流石に、そんな薬の現物があつたら、鬼なんて全滅していますよ。まあ、その薬の研究をしている珠世という鬼をこれからスカウトに行くんですけどね」

叩けば埃がでる布団ではないが、叩けば叩くほど情報がポロポロ出てくる裏金銀治郎に彼女は、怒りを覚え始めた。そして、ついにはその両手で彼の顔を鷲掴みにする

「銀治郎さん、わたし……そろそろ、怒ってもいいですよね？」

「じゃあ、何が知りたいですか？ 珠世という鬼の事ですか？ それとも、鬼舞辻無惨が鬼になった経緯ですか？ 竈門禰豆子の血鬼術についてですか？」

他にも、上弦の鬼の能力なども把握していたが、あえて選択肢から外している裏金銀治郎。情報は、適切なタイミングで提供するのが一番である。

「……他にも色々隠していますよね？」

「勿論」

その日、裏金銀治郎の執務室から電気が消える事はなかった。翌日、蝶屋敷に朝帰りする胡蝶しのぶ……嗅覚の優れた竈門炭治郎が、悪意もなく朝まで裏金さんと一緒だったんですね、と言わないでいい事を口走る。



埼玉県某所に、裏金銀治郎と胡蝶しのぶが足を運んだ。

そこには、三階建ての住居が有り、中からはうっすらと鬼の気配がする。柱であつても、最初から鬼がいると疑って掛からねば見逃すほどだ。

「銀治郎さん。本当に、ここに珠世という鬼が居るんですよね？」

「勿論——と、言いたいのですがこれで四件目ですからね。居ることを祈りましょう」

産屋敷耀哉は、人の人脈を使い居場所を特定したが裏金銀治郎は違った。金の流れで探したのだ。そもそも、表社会に戸籍もない上に、夜しか行動できない彼等が真つ当な方法で家を手に入れることは困難。

それに、珠世も世間的に言えば、かなりの美人であり人の記憶に残りやすい。そんな情報を元に裏社会に協力を仰いで得た情報だ。似たような方法で、一般人に紛れ込んでいた鬼の女もあり、ここに到着するまでの全てのゴミ達は、二人によって処分された。

裏金銀治郎は、紳士的にドアをノックする。

「珠世さんは、ご在宅でしょうか？ 鬼舞辻無惨を処分する為、我々と手を組みましょう。貴方達の行動時間に合わせて、夜分遅くに來た我々の紳士的な対応を理解して頂きたい」

紳士という発言に、胡蝶しのぶが自らを指しアピールする。次から、紳士淑女とアピールするように心がけた。

二人の呼びかけには応じないが、中からはドタドタと走る音が響く。

「愈史郎君も落ち着きなさい。実年齢35歳なのですから、いい加減に母離れしてもいい頃ですよ」

「銀治郎さん、35歳にもなって母離れできてないって、もう死んだ方が良いでしょう。気持ち悪いです」

悪気もない一般論が愈史郎を殺しに掛かる。既に、彼のライフは0であった。シヨタおじさんなんて属性は、未来永劫現れない。

この時、珠世一行は、焦っていた。何故場所がバレたのかと。浅草から逃げた先は、竈門炭治郎にも伝えていない。場所の特定方法が分からない限り逃亡を続けても無駄だ。

そして、裏金銀治郎と胡蝶しのぶを招き入れる決意をする。

……

……

…

裏金銀治郎は、部屋に入ると同時に血文字の札を壁と天井に刺した。

「これは、血鬼術!!」

珠世は、裏金銀治郎が何をしたかを理解した。まさか、鬼滅隊の者が血鬼術を使えるとは想像できず、反応が遅れる。騙されたと感じ取る珠世一行だが、それも仕方がない反応だ。

だが、珠世一行の血鬼術は警戒に値するレベルであるので、紳士的な話し合いの場を作るにはこのくらいは当然だ。

「ああ、ご安心ください。これは、血鬼術を無効化する術です。珠世さんの幻術、愈史郎君の認識阻害、浅草で貴方が拾った鬼の拘束棘。どれも怖いですがからね。だが、これではフェアじゃない」

交渉とは、フェアに行う物である。

裏金銀治郎の計画には、珠世の存在は必要不可欠であった。その為、彼も誠意を見せる。日輪刀を愈史郎君に渡し、自らの首をいつでも切り落とせる準備をして構わないと告げる。

「珠世様!! やっちゃいましょう。一人倒せば、残りは一人です」

「勝手な行動は許しません。……で、お名前を聞いても宜しいですか？」

珠世の言葉に、今の今まで名乗りを上げていなかった事に初めて気がついた裏金銀治郎と胡蝶しのぶ。自称、紳士淑女は自称の域をでなかった。

「蟲柱の胡蝶しのぶです」

「裏金銀治郎。給与管理と資産運用を担当している」

二人の自己紹介に珠世は疑問に思った。特に、裏金銀治郎の方だ。蟲柱と同等以上に鬼を殺している雰囲気があるにも関わらず、裏方と言い張る。

「こちらの自己紹介は、必要ですか？ 随分と詳しいようですが……」

「それは、おいおいでも構わないでしょう。それで、私達と手を取り合って鬼舞辻無惨を倒しませんか？ こちらは、貴方の研究に場所と資材を提供します。それと鬼を殺す毒を開発し薬学に精通するしのぶさんも手伝いをします」

「不本意ではありますが、その研究成果があれば私の目的にも大きく役に立ちます」
逃亡生活をしつつ、鬼を人間に戻す研究をするのにも限界があった。だからこそ、鬼滅隊からの申し出は渡りに船でもある。

だが、鬼滅隊という存在を信じ切れなかった。

「畏ではないという確証はあるのですか？」

「珠世さん、罨であるという証明ができないのと同じように、罨でないという証明はできません。私を信じろなんてセリフはいけません。ですが、私は竈門炭治郎君と約束しました。妹を人間に戻す事に尽力すると……だから、貴方の許に足を運んだのです」

竈門炭治郎という名前の効果は抜群だ。しかも、妹の話も持ち出し、揺さぶりを掛けていた。

そして、裏金銀治郎は、珠世に利き腕を差し出す。

「何のつもりですか？」

「頭の良い貴方なら理解できるでしょう？ 手を取り合いましょう。鬼舞辻無惨……あれは、生かしてはいけいない存在です。これ以上、貴方と同じような被害者を出さないためにも。そして、貴方を母のように慕う竈門禰豆子の為にも」

迷う珠世だが、数秒考えた後に裏金銀治郎の手を取る。この瞬間、珠世所長が誕生した。

自分の為ではない誰かの為に……そんな文句で釣れると裏金銀治郎は確信していた。そして、内心でチョロイと思っていたが口走る事はない。

次は、蝶屋敷に入院している三名のご様子でもへーへ

ハンバーグ定食

ミックスグリーン定食

98%豚骨ラーメン

レバニラ定食

餃子定食

選択式の病院食がありますへーへ

13.. お前がママになるんだよ

何時もありがとうございます。

読者の皆様がいるから執筆が続けられます。

そして、感想をくださった皆様本当にありがとうございます。

何時も読ませて頂くのが楽しみでたまりません――へ

感想で頂きました鉄血☆宰相様のネタを一部拝借させて頂きました。

もし不都合がありましたら、ご連絡ください――へ

蝶屋敷の食事は、大変美味しいと鬼滅隊の中でも評判である。

日本各地から集まる名産品、国外からの輸入品など普段では食べる事ができない料理を口にできる数少ない場所だ。しかも、若くて綺麗な女性が看護してくれるサービスもあるので、鬼滅隊の隊士達は、わざと入院しようと画策する者が居るほ

どだ。

だが、殆どの者が2回目の入院を実現できない。身体能力が向上した肉体はそれほどの物なのだ。

「炭治郎さん、また残してますね。好き嫌いしていたら、退院できませんよ!!」
神崎アオイが丹精込めて作ったハンバーグが綺麗に残っていた。

入院してくる隊士達は、多かれ少なかれ好き嫌いはある。だが、肉系に全く手が付かないのは過去にないパターンだ。このご時世、食事の食べ残しなどマナーが疑われるレベルだ。

「あれ〜？炭治郎は、お肉嫌いだったけ？美味しいよ、このハンバーグ」
竈門炭治郎の思考は、高速で巡る。

我妻善逸の聴力は、竈門炭治郎の嗅覚と同レベルであった。だからこそ、それを誤魔化す術も当人には分かる。大人になるとは、そういう事だ。

「俺、洋食より日本食の方が好きなんだよ」

決して、肉が嫌いとか言わない。話の論点をずらして回答する事で偽証する。あの純粹だった長男は、大人への階段を上がる。

「炭治郎さん、他の人を見てください。綺麗に食べていますよ、それにこの食事……毎朝、みんなが早起きして作っているんです。申し訳ないとは思わないんですか」

何も知らない神崎アオイは、無自覚に竈門炭治郎の心をえぐる。

彼女には、国産の上質なお肉とだけ伝わっている。その正体は、当然——裏金銀治郎がプロデュースする家畜の肉だ。蝶屋敷でしか食べられない貴重な物だ。

そもそも、彼自身も残したくて残しているわけでは無い。ニンニクたっぷりのガーリックソースがあっても、鬼肉の異臭を感じ取った。この時ほど、不便だと考えたことは無かっただろう。

「にくううう!! いらねーなら俺が貰うぜえええ」

「ああ!! ずりいい。俺が狙ってたんだぞ!!」

横から嘴平伊之助が、ハンバーグを奪い一口でぺろりと平らげる。食べ物奪い合う醜い争いがそこにはあった。これが普通の反応だ。

そんな時、飯時を狙って裏金銀治郎が訪れる。何が目的かと言えば、竈門炭治郎の様子見だ。

「食事中に失礼。みんな、思ったより元氣そうで何よりだね」

「……誰？」

我妻善逸は、裏金銀治郎とは初対面だ。そして、本当に嬉しいと思っている事が音を聞いて分かった。それもそのはずだ。原作主人公達が元氣で育っており、原作をなぞっているのだ。これ以上喜ばしい事はない。

「鳴柱の桑島慈悟郎さんに、一時期お世話になった裏金銀治郎といいます。鬼滅隊では、主に給与管理と資産運用を担当しているので、以後よしなに」

「金柱様!!」

神崎アオイがあえて金柱と呼ぶ。鬼滅隊の中で、権力を有する人に対して失礼をしないようにと釘を刺すためだ。

「ちょっと待ってよ!! その人が柱って!? もしかして、あの美人さん胡蝶しのぶと同じ立場のお偉い様なの!? 女にもモテそうな顔している上に、柱ってどんだけだよ!!」
基本的、女にモテる男が嫌いな我妻善逸である。自分よりモテる人間が全滅すれば、自分が一番モテる男になれるとまで考える。健全な思考を持つ男であった。

「善逸君。女にモテたいのかい？」

「当たり前だろ!! 可愛い子と結婚して、毎日エロいこととして楽に暮らしたいと思ってるわ!!」

欲望を口にする我妻善逸を、白い目で見る神崎アオイ。

男性の欲望については、理解はしているがここまで堂々と言われると清々しかった。

「分かった。君が、真面目に鬼狩りをするなら今すぐにでもその願いを聞き届けよう。どんな女の子が希望かね?」

「……え、マジで叶えてくれるの。じゃあじゃあ!! 禰豆子ちゃんみたいな子!!」
「分かった。彼女ほどの美少女だと一週間は掛かる。で、何人欲しい?」

「じゃあじゃあ、一杯!!」

鬼を人に戻す薬を用意するより簡単すぎる仕事であった。

裏金銀治郎の表の立場は、アンブレラ・コーポレーションのトップの一人だ。胡蝶印のバイアグラを少しでも欲しいと考える政財界の汚い男達が、電話一本で綺麗どころをダースで用意してくれる。

「分かった。代わりに、しっかり鬼を退治してくれよ。支援とて、タダじゃ無い」

竈門炭治郎と我妻善逸には、裏金銀治郎が本気で言っているのが分かった。

我妻善逸は、喜びウキヨーと騒ぎ、元気に跳ね起きる。先日まで、蜘蛛になりかけていた事など嘘のような回復だ。彼が優秀な隊士である為、効果抜群であった。「伊之助君も欲しい物があれば用意しよう。だが、その前に炭治郎君に報告が……すこし、彼を借りるね。吉報だよ」

竈門炭治郎と裏金銀治郎の取引を行って僅か一週間。

たった、それだけの期間でもう進展があつたのかと竈門炭治郎は驚いた。自分が生きている間にも思っていた妹の問題が解決したのかと心が弾んだ。

だからこそ、我妻善逸の耳にもそれ以上の事を察する事ができない。

……

……

……

人払いされた蝶屋敷の診療室にて、椅子に腰を掛ける裏金銀治郎。

「炭治郎君、困りますよ。見て見ぬふりをするという約束……病院食に手を付けな

いのは頂けない。上手に誤魔化しているつもりでしょうが、内心ひやひやします。気持ちには理解できますが、好き嫌いは止めて頂きたい」

「すみません」

見た目も分からないようにして、味付けも配慮された病院食。何が気に入らないのか疑問でならなかった。食べたところで、人体への影響は極小だ。その極小のリスクを背負って得られるパワーは絶大であった。

ローリスクハイリターンという言葉が相応しい。

「まあ、よいでしょう。これから、改善してくれば構いません。まずは、報告からです。珠世一行と鬼滅隊が手を組みました。これからは、しのぶさんも鬼を人に戻す薬の開発に尽力します」

「ほ、本当ですか!!」

まさに、吉報であった。

鬼の毒で蜘蛛になった隊士を元に戻せる胡蝶しのぶが、手を貸すのだ。そのパワーは百人力である。

「ええ、私は尽力すると約束をしました。炭治郎君も態度で示して、欲しいもので

す」

裏金銀治郎からしてみれば当然の要望だ。

竈門炭治郎の嗅覚は、訴えていた。態度で示さなければ、それ相応の対応が待っている。だからこそ、彼は焦る。目の前にいる裏金銀治郎という男が、味方から敵になったらどうなるのか、考えるだけで恐ろしい。

「わかっています!! これからは、ちゃんと食事も食べます!!」

「……いまは、それでいいでしょう。君の妹はいずれ人間に戻れる。ですが、人に戻った後、どうするか考えたことはありますか? そんな未来が訪れた時、君は誰を頼るべきかよく考えておくことです」

鬼滅隊で鬼を殺す仕事がおわれれば、何をするのか。

みんな目の前の事だけを考えている。だが、未来を見つめる必要もある。ソレができなかったからこそ、鬼滅隊が資金難になるのだ。

「はい!!」

「良い返事です。大事な事です、体は隊士の基本。ここでの治療は、確実に君を強くする。分かっていると思いますが、君達兄妹の立場は危うい。炭治郎君が死ぬ

ば、残された妹はどうなると思います？」

門炭治郎は、決して考えないようにしていた事を裏金銀治郎から指摘された。

現役柱達は、期待できないのは間違いなかった。寧ろ、喜んで竈門禰豆子を鬼として殺しに来るのが目に浮かぶ。育手である鱗滝左近次という元水柱がいるが、権力と年齢の問題からとても妹が守れるとは思えなかった。

事実、人を襲えば腹を切るとまで約束をしたが、現役柱達には何の効力もなかった。

竈門炭治郎は、裏金銀治郎が頼りになる男だと理解した。

「裏金銀治郎さん!! 俺に、何かあったら禰豆子の事をお願いできないでしょうか」
裏金銀治郎は、予定通りだと内心ほくそ笑んだ。

勿論、竈門炭治郎の嗅覚がそれを感知する事を承知の上でだ。

裏金銀治郎は、竈門炭治郎の肩に手を置く。そして、耳元で囁く。

「だったら、どうすればよいか分かっていきますよね」

竈門炭治郎は、竈門禰豆子の事を理解できていない。

竈門炭治郎に万が一の事があれば、後追い自殺するのは確実である。勿論、その

時に生きていれば面倒をみるつもりで返事をしているため、嗅覚には掛からない。裏金銀治郎の含みのある発言を鵜呑みにして最大限努力せざるをえなくなった。だが、それもある意味当然だ。妹を人間に戻す為、最大限努力をせずしてなんとする。

「勿論です!! 早く元気になって鬼を倒してきます。それでは、ご飯を食べてきますので失礼します」

元気な声で退出する竈門炭治郎。ずぶずぶと底なし沼にはまるような感覚を覚えるが、もはや戻る道は無かった。



鬼滅隊の当主として、次代の事を考え始めた産屋敷耀哉。

彼の体調は、日を追うごとに悪くなる。鬼舞辻無惨の呪いで短命だと言われているがその事実は分からない。どちらにせよ、刻一刻と命の灯火が消えようとするのをハッキリと感じ取っていた。

だからこそ、産屋敷耀哉は裏金銀治郎に相談を持ちかけたのだ。

裏金銀治郎は、何故私なのだと苦悩する。産屋敷耀哉を崇拝せず、組織維持のみを大事にするという一点では誰よりも優れていた。だからこそ、産屋敷耀哉も彼を呼んだのだ。

「忙しいところ済まないね。体調がこのところ芳しくないから、以前より君が進言していた跡目について考えようと思ってね」

「そうでしたか、私でお役に立てることがありましたら何なりとお申し付けください」

この時、裏金銀治郎はヒシヒシと嫌な予感がしていた。

そもそも、跡目など息子である産屋敷輝利哉以外に選択肢などない。そして、産屋敷輝利哉の将来は神職の妻を娶り、子孫繁栄に努めるのだ。そんな規定ルートがあるはずなのに、相談とは何事なのだろうと。

「輝利哉以外の子供達についてだよ。銀治郎、君ならどうすべきだと考える？」

裏金銀治郎は、これからの発言に対して咎めない事を約束してもらった。組織維持を考えて、最大限に上司の子供を利用するアイディアを提案するのだ。親側からしたら、気分が良い物でないのを分かっていた。

「そうですね。やはり、リスクは分散すべきでしょう。娘達は、早々に嫁がせるべきです。候補としては、煉獄杏寿郎、時透無一郎当たりが筆頭です。煉獄家は、歴史も古く万が一の場合には、鬼滅隊を率いる事も可能でしょう。時透無一郎は、才能の一言に尽きます。彼の子が100人も居れば鬼など一ヶ月で滅ぼせる。お館様のご息女と結婚できるなら、二人も喜ぶでしょう」

あまりにも完璧な計画であった。

特に、時透無一郎には種馬になって貰い、毎日十人ほど女性を抱いて欲しいとすら本気で考えている裏金銀治郎。時透無一郎の性格が性欲塗れのクズ男で無かったのが残念だと心底思っていた。

「やはり、銀治郎は優秀だ。君が居なければ、鬼滅隊は無くなっていただろう。そんな君を組織につなぎ止めるのも私の勤め。ひなきと結婚する気はないかい？」
裏金銀治郎は、上司である産屋敷耀哉に対し、不敬にも馬鹿ではないかと思っていた。

今し方、懇切丁寧に娘達を有効活用する方法を提示した。今代で鬼を滅ぼせなかった場合のセカンドプランまで話したというのに、なぜ結婚の話が出てくるか理

解に苦しんだ。

だが、産屋敷耀哉とて当然、こんな発言を無意味にする男でも無い。

裏金銀治郎という存在は代えがたい。鬼を殺す事だけを考えさせれば、産屋敷耀哉ですら勝てないと思わせるほどだ。次代を支える一人とするため、鬼滅隊に人生を捧げさせたかった。その為、娘の人生を使い潰す気でいた。

「お断り致します」

現役柱達には決してできない回答を平気で口にするのが裏金銀治郎である。しかも、全く悪気もない。

「そうか、話は以上だ。引き続き、仕事を頼んだよ」

産屋敷耀哉に一礼し、裏金銀治郎は退出した。だが、産屋敷耀哉は有能だ。裏金銀治郎と胡蝶しのぶの微妙な関係性を既に見破っている。

……

……

……

その翌日……なぜか、胡蝶しのぶがひなきの新しいママになっていた。

裏金銀治郎が無理なら胡蝶しのぶを狙う上司。

胡蝶しのぶを手に入れるともれなく、ひなきも付いてくる。

つまりは、そういうことだ。

14..直ちに影響はない

何時もありがとうございます。

皆様のお声があるから頑張れます!!

そして、投稿が遅くなり申し訳ありません。

鬼が隠れ人を襲う世の中、平和な日常を送りたいと願う裏金銀治郎。

だが、平和の時間というのは長くは続かない。裏金銀治郎の執務室に、珍客が訪れていた。蝶を模した髪飾りを付けミニスカ隊服を着た栗花落カナヲである。自主的に動くことが珍しい彼女が、一人で執務室を訪れる事を彼も想像できなかった。別に悪い事はしていないはずなのに、裏金銀治郎は、誰かが彼女が執務室に来たのを目撃してはいないかと不安を感じていた。若い女性の隊士と給与管理をしている男が二人つきり。

誠に世間体が宜しくない。

裏金銀治郎は、先行投資として栗花落カナヲに私費で色々と配慮していた。言い換えれば、援助していたのだ。裏金銀治郎の心中を知らないものからしてみれば、どう見られるかは簡単だ。鬼滅の金庫番と言われた金銭管理に厳しい男が……美少女に物を買いは与えているんだ。そりゃ、盛大に、肉体関係を疑われる。

「子供ができました」

持てなすために珈琲を用意していた裏金銀治郎が思わずカップを落とす。

だが、直ぐに冷静さを取り戻した裏金銀治郎。そして、胡蝶しのぶに文句を言つてやろうと思っていた。親代わり改め……戸籍上で実子となっている栗花落カナヲに対して教育ができていないのは、母親失格だ。

「栗花落カナヲさん、貴方は、私を社会的に殺す気ですか？ この状況下で、そんな発言をしたら、まるで私が貴方を妊娠させたみたいでしょう」

胡蝶しのぶに代わり、裏金銀治郎が教育パパとなる。

栗花落カナヲは、決して馬鹿ではない。だから、指摘すれば正しく矯正できる。それが、水柱の富岡義勇とは違うところだ。

「……胡蝶様に、子供ができました」

「——それだとしのぶさんがご懐妊したと誤解されます。悪気は無いでしょうが、しのぶさんを社会的に抹殺したくなければ、気をつけなさい」

僅かに前進した説明ではあったが、大事な説明が省かれる。その為、事情を知らなければ勘違いしてしまう。

胡蝶しのぶは、大正の世でいえば、結婚していても可笑しくない年齢だ。寧ろ、美貌を鑑みれば、結婚していなければ可笑しいとすら言っても間違いではない。結婚したことすらないのに子供がいるとか、端から見たら地雷にしか思えないだろうが……。

そんな事を考えている裏金銀治郎。だが、彼は胡蝶印のバイアグラを売るために、胡蝶しのぶと栗花落カナヲの戸籍を改竄している。書類上、胡蝶しのぶは30歳……そして、その娘に胡蝶カナヲが居ることになっている。

そこに、お館様の子供が加わるのだ。

誰も血縁者がいないのに、二人も子供がいるとかレベルが高すぎる。大正の世、ここまで複雑な家族構成の人は、片手で足りるだろう。

「どうすればいい？」

裏金銀治郎は、栗花落カナヲに対して、なぜ私にそんな事を聞くと本気で聞き返したかった。そもそも、彼は独身だ。子供だっていない。そんな男が何の役に立つというのだろうか。

だが、彼女の中では、裏金銀治郎は困ったときのお助けキアラ的存在であった。胡蝶しのぶに放置された時に何も言わずに手をさしのべてくれた。だからこそ、今回もと考えていた。

「どうすればいいと発想は、よくありません。何をしたいかで物事を考えるべきです。例えば、しのぶさんに甘えたいとか、構って欲しいとか色々あるでしょう」

栗花落カナヲは、焦っていた。

彼女にとって、胡蝶しのぶという存在は全てに等しい。そんな彼女の暮らしに、お邪魔虫がきたのだ。当然、彼女からしたらお館様の子供など、どうでも良い存在であった。

そもそも、産屋敷耀哉と接点があるのは、柱クラスの人間だけだ。つまり、彼女の状況を現代風に言い換えれば、母親が勤め先の社長の子供を養子にし、この子が

今日から貴方の妹よ、という感じである。

それが、何の前触れもなく唐突であつたのだから、彼女も困惑していた。自らの立場を奪われるのではと、ダークサイドへの一步を踏み込もうとする。

「甘えたいし、構って欲しい」

彼女は、素直な気持ちを口にした。

胡蝶しのぶは、独身であり類いまれな母性の持ち主だ。だからこそ、言える。愛情に飢えた栗花落カナヲに母性を注いでいれば、依存するのは当たり前。そんな体にしたのならば、責任を取るのが筋である。

つまり、回答は――

「だったら、「ママ!! 私を捨てないで」とも言えば、一発ですよ」

この場に、第三者がいたら、何が一発なのか問いただしてくれただろう。

ちなみに、栗花落カナヲは、裏金銀治郎の執務室に来るまで、似たような質問を他の者にもしていた。炎柱と恋柱とか……目は良いが人を見る目がない彼女であつた。

……

……

…

その日、炎柱と恋柱が盛大に勘違いして、赤ちゃん用品を届ける事件が蝶屋敷で起きる。そして、裏金銀治郎の言葉を一言一句その通りに「ママ!! 私を捨てないで」というセリフを言う勇者がいた。

夜になると、胡蝶しのぶが、般若になっていた。

鬼を人に戻す薬を開発する際に、人を鬼にする薬ができちゃった的な展開かと思うほどであった。しかも、その手には、裏金銀治郎が大事にしている長曾祢虎徹が握られていた。

「しのぶさん、その刀——私の私室から勝手に持ち出さないでください」

「これ、貴方の部屋に落ちていたんですよ。いや、まさかこんな時間までお仕事をしているとは思いませんでしたよ」

胡蝶しのぶは、裏金銀治郎を問い詰めるために来たのだ。夜であったため、家に押し入ったが誰も居なかったので執務室までやってきた。

「こうみえて、抱えている問題が多くて仕事が終わらないんですよ。——栗花落カ

ナヲの一件なら私は無実ですよ。彼女が、「胡蝶様に、子供ができました」と私に相談に来たんです。私は、誠実に対応したままでです」

「ソレが、「ママ!! 私を捨てないで」ですか?」

「……本当に、それやったの!？」

裏金銀治郎とて、本気でやるとは思っていなかった。

どんな状況でそうなったか、是非とも再現して欲しいと胡蝶しのぶに頼んでしまふ。

「この刀、長曾祢虎徹でしたっけ? 今なら、銀治郎さんの首もスパッとやれますよ」

瞬時に逃亡を図る裏金銀治郎を追いかけて、朝帰りする胡蝶しのぶであった。



陽光山——ここでは、鬼滅隊で使用される日輪刀の原材料が採掘される。「しょうじょうひさせつ猩々緋砂鉄」

しょうじょうひのこうせき「猩々緋鉱石」、この二つの素材がキーアイテムだ。

だが、形ある物がいつかは無くなる。ソレと同じく、鉱石だって掘り続けければ枯渇する。

「どうするんだよコレ」

裏金銀治郎は、執務室で頭を抱えていた。刀鍛冶の里から、緊急の知らせが来たと思えば、日輪刀の原材料が枯渇したから、早く次の採掘場所を……とか謎の連絡を受けたのだ。

彼が何より許せないのが、資源が枯渇してから連絡をしてくる愚か者共であった。採掘量から推察すれば、もっと早い時期にも分かるはずだ。そうすれば、対策の一つや二つを考える時間もあつた。

1000年という時間の中で、代替え技術が全く研究されていない。本当に鬼を全滅させる気があるか疑わしい程だ。そもそも、1000年で鬼を殺す新たな方法が、胡蝶しのぶが発見した毒しかないとか、笑い話にしかない。

一体、どれだけ鬼滅隊の破滅要因があるのかと、胃痛を感じ始める裏金銀治郎。

……

……

…

翌日、裏金銀治郎は蝶屋敷を訪れた。

この時、胡蝶しのぶは、裏金銀治郎と同等に忙しい日々を送っている。鬼を人間に戻す薬の開発、産屋敷耀哉の子供を養女にする件、栗花落カナヲへの対応などなど、柱として鬼を狩る仕事に手が回らない程だ。

だが、幸い、隊士の質は素晴らしい。下弦級の鬼でも無い限り、重傷者はでるが退治ができてるのが現状であった。柱の出番は、大きく減りつつある。

そんな多忙な彼女を助けるのではなく、裏金銀治郎は、一直線に竈門炭治郎達の部屋に向かった。その部屋には、主人公一行とは関係ない女の子がいた。裏金銀治郎の手によって、用意された我妻善逸への報酬である

名をシルヴィという。体に火傷のある異国の少女だ。人が発する音から感情まで理解する我妻善逸に、下手な女性是用意できなかった。どんな男であれ本気で寄り添い、無償の愛を注げる綺麗な心を持つ女性——そんな都合の良い女性を用意できたのは、奇跡的であった。

裏金銀治郎も権力者に色々と条件を電話で伝えたら、まさか異国の少女を連れてこられるとは思わなかったのだ。戸籍もないらしく、まさに日本の闇を感じさせられる事案である。

「ご主人様、あーん」

「はい、あーん!! 美味しい!! 俺は、幸せだなシルヴィちゃんみたいな子と一緒にいられて」

一昔前まで、竈門禰豆子を狙っていた様子は、影も形もなくなっていた。竈門炭治郎からしてみれば、妹にあれだけすり寄っていたのに、なんて男だという感情も少なからずあった。だが、今の我妻善逸を見て、竈門禰豆子をこんな男にはやれないと思う気持ちが芽生える。

匂いや音で感情を理解できない裏金銀治郎にも分かるほど、二人からピンクの空気が漂っていた。

「善逸君、シルヴィ……時と場所を弁えなさい」

「裏金さん!! 挨拶が遅れてしまい申し訳ありません」

我妻善逸は、裏金銀治郎を見ると、雷の呼吸ノ型にも匹敵する速度で彼の前に跪いた。そのさまは、忠臣であった。

彼視点で見れば、裏金銀治郎に後光が見える。一ノ型しか使えない自分を理解し、褒めてくれるだけでなく、女の子まで手配してくれる。そんな理想の上司は、

いないだろう。どこぞのパワハラ上司とはここが違うのだ。

「君に相応しい女性とは、私の伝手でもなかなか難しくてね。近いうちに、後数名も必ず探して届けるから待っていてくれ」

エロゲーにリアル出演しても不思議でないほどのチョロインを集めるのは、裏金銀治郎でも大変であった。我妻善逸の信用を得るため、努力を怠らない裏金銀治郎である。

「今日はどうしたんですか？」

「ああ、炭治郎君にちょっと仕事を頼みたくてね。少し、社会見学にいかうか」

……

……

…

原材料がないなら、現物を溶かして再利用するしかあるまい。当座の間は、この方法でしのげるだろうと考えていた。だが、一番の問題は、どれが日輪刀であるかという問題だ。

色代わりの刀と言われるので、持てば分かる。そもそも、色が変わるほどの才能

を持つ者が少ない。そんな連中は、現場に回しており、招集を掛けたとしても集まりはよろしくない。よって、活用されるのが竈門炭治郎の嗅覚だ。

警察の押収物が纏められている倉庫……そこには、裏金銀治郎からの要請で警察のお偉い様が、各地から押収した刀が山のように並べられている。

「裏金様!! 所長から伝言がございます。刀一本で一錠との事です」

「ありがとうございます。君も、これを一錠キメて待っていてくれ。少し時間がかかるだろうから」

裏金銀治郎は、胡蝶印のバイアグラを賄賂として案内役に手渡した。

竈門炭治郎の嗅覚は、知りたくない真実を知ってしまう。病院食だけでなく、菓として既にアレが世間に出回っているのかと驚きを隠せなかった。

そして、人氣が居なくなったタイミングで裏金銀治郎に問いかける。

「今の菓からは、鬼の匂いがしました」

「勿論、説明しよう。だが、その前に時間が惜しいから、君の嗅覚を使ってこの山のようにある刀から日輪刀を探してくれ。刀鍛冶の里で原材料が無くなったと連絡がきてね……このままでは、鬼を倒す武器がなくなる」

「え!? 冗談……じゃないんですね」

「1000年も同じ場所から材料を採掘していれば材料だってなくなるさ。それに、引退した鬼滅隊の連中は、刀を返さず辞める馬鹿が多くてね。会社の備品は退職した際に返すのが常識だというのに」

竈門炭治郎は、裏金銀治郎の発言から怒りの匂いを感じ取った。

だが、その怒りは当然だとも彼も思っている。実家が炭を売る商売をしてたから、資源の大切さは分かるのだ。

「コレとソレ……後、そっちの右上のもの」

竈門炭治郎は、押収品の中から次々と日輪刀を見つけていく。馬鹿みたいに簡単に見つかるのには理由があった。鬼滅隊では、刀の再支給が簡単に行われる。その為、紛失や警察に押収された場合、新しい刀が打たれるのだ。刀鍛冶の里も仕事で、お給金がいりwin-winであった。

「やはり、君を連れてきて良かった。私一人だと、色代わりをさせないと分からなからね。で、さきほどの質問に回答しよう。あの葉は、胡蝶印のバイアグラとして政財界の重鎮達に鬼滅隊が売っている。今では、鬼滅隊を支える資金源だ」

裏金銀治郎は、竈門炭治郎になんでも用意すると約束した。そこには情報も含まれている。

だが、彼から提供される情報は、十五歳の少年である竈門炭治郎には、あまりにも重い。妹を人間に戻すという目的が無ければ、直ぐにでも逃げ去りたいと少なからず思ってしまった。

「その薬は、安全なんですか？ 飲み続けたら鬼になったりしないんですか？」

竈門炭治郎は、蝶屋敷で鬼肉の入った病院食を食べている。だから、気になってしまったのだ。薬を飲み続けるも鬼肉を食べ続けるも最終的にどうなるのかと。

「少なくとも、直ちに影響はない。それに、万が一鬼になる事になっても問題ないでしょう。お忘れですか？ 私達が、鬼を人に戻す薬を開発しているんですよ」

竈門炭治郎は、裏金銀治郎の発想に狂気を感じた。その時、胃袋の中身をはき出さなかったのは、彼が成長している証である。

シルヴィって誰よと思う方……XXとの生活のあの子です。

それ以上、深くの追求は受け付けません!!

さて、そろそろ、ヌルヌル列車が迫ってきました。

武器、防具、回復アイテム。

そろそろ、新しい武器も欲しいよね

裏金銀治郎「半天狗、私は君に会うためにここまで来た!!」
今後のアップデートでは、属性武器が実装予定。

雷属性と風属性!!

15.. お前が言うな

今日も投稿が間に合いました><

読者の皆様、いつもありがとうございます!!

主人公一行の機能回復訓練は、順調であった。寧ろ、かなり早い段階で全集中・常中を習得した。肉体的スペックがあがった彼等の力は既に鬼滅隊でも上位だ。

コレも全て裏金銀治郎がぶら下げた餌のおかげである。

竈門炭治郎には、妹を餌に。

我妻善逸には、女。

嘴平伊之助には、幼少の頃、一時期面倒を見てくれた老人が無事に過ごせるよう手配した。具体的には、鬼滅隊の隊士の巡回ルートを変える事と死ぬまで生活費を援助する事で釣った。

そして、主人公一行が診察結果次第で退院するので、心優しい裏金銀治郎は、みんなを送り出すために蝶屋敷まで足を運んでいた。胡蝶しのぶが、竈門炭治郎の診察を終えるのを静かに待つ。

「うん、顎は問題ないですね」

竈門炭治郎は、完治する。それどころか、明らかに入院前よりも強くなっている
と自覚できるほどである。勿論、機能回復訓練を行った事や全集中・常中を覚えた
こともある。だが、一番の理由は、鬼肉のおかげで人間としてのスペックが上のス
テージへとあがったのだ。

「おめでとう炭治郎君。また、鬼狩りに行くことになるだろうが、薬の進展につい
ては定期的に情報を送ろう」

「ありがとうございます!! お二人のおかげで、妹を人間に戻せる目処が立ちまし
た!! 最後に一つ聞きたい事があって……」

「何でしょう?」

竈門炭治郎は、二人のおかげで胃痛が絶えなかった。我妻善逸も居るため、下手
に感づかれてはならない。それに、自分の気も知らないで、シルヴィとイチチャイ

チャする我妻善逸をしばき倒したいと思うほどであった。

本当に彼は、人間として成長したのだ。

「ヰヒノカミ神楽ヰって聞いたことありますか？」

「私は、ありませんね？ 銀治郎さんなら、ご存じではありませんか？」

胡蝶しのぶの中では、叩けば情報が出てくる裏金銀治郎。

「あまり情報は、持っていないですよ。ヰヒノカミ神楽ヰ——竈門家に代々伝わる神事で、正月に先祖と炭窯の神に奉納する際に使われていました。神楽を舞い続ける過酷なものであり、寿命を縮めかねない。だが、神楽は『日の呼吸』を模している物であるらしい。炭治郎君の父である竈門炭十郎が病弱だったのも、神楽の負荷に耐えられなかったのが原因だろう」

あまりにも詳しくすぎる情報に、血の気が引く竈門炭治郎。父親について、誰にも話した事が無いのに本名まで知っていれば、驚く。

頼りがいがあるとか、もはや別次元であった。

「やっぱり、情報をお持ちでしたね。ですが、『火の呼吸』ではなく『炎の呼吸』です。元柱なんですから、そこら辺を間違っって後輩に教えないでくださいね」

「同じでは無いんですか？」

このやり取りに、やはり誤解していると裏金銀治郎は理解した。そして、一度聞かれたからには、情報を提供する彼である。

「しのぶさん、字が違いますよ。日光の日の字の方です。『日の呼吸』は、今となつては使い手がないので知名度がありませんが、全ての呼吸の元となつた呼吸法です。元炎柱の煉獄槇寿郎なら、多少はご存じでしょう」

出てくる情報を聞いているだけで、竈門炭治郎はドンドン気分が悪くなつてきた。人は、理解できない者を前にすると思考が拒絶する。それが、彼の中で起こつていた。鬼滅隊の隊士であるのか、疑わしいとまで思い始めたのだ。寧ろ、目の前の男が鬼舞辻無惨であると言われても、納得してしまうだろう。

そんな事を思われているとは露程もしらず、裏金銀治郎は説明をおえた。

「炭治郎君、銀治郎さんについて深く考えてはダメです。恐らく、必要な時に必要な情報は提供してくれます」

「酷いですね。私は、聞かれたから答えたただだというのに。炭治郎君、私から一つアドバイスをしておきます。辛い現実から目を背け夢を見続けたい人は多いで

しょう。だが、その夢から覚める必要があったならば、君はどうやって目を覚ます？ 炎柱に会うまでに考えておくといい。きつと、鬼狩りが楽になるはずだ」

竈門炭治郎は、裏金銀治郎が何を言いたいのかわからなかった。夢から目を覚ます方法が鬼狩りの何処に役に立つのか。だが、裏金銀治郎は無駄なことをしない。役に立つと言ったら、役に立つのが事実である。

「よく分からないけど、分かりました!! では、次の任務も頑張ってください」
裏金銀治郎は、笑顔でソレを見送る。

胡蝶しのぶも「頑張ってきてください」と、見送った。そして、竈門炭治郎が部屋を出てしばらくしてから彼女は裏金銀治郎の方を見た。

「で、今度は何をするつもりなんですか？ 以前に、下弦の鬼を捕獲しに行った時以上に、物々しい感じがしますよ」

「すこし、上弦の参にトドメを刺しに。本当なら、捕獲したいのですが、あのレベルを捕獲できる施設と戦力がないのが残念です」

裏金銀治郎の発言に、流石の胡蝶しのぶも信じられないといった顔をしていた。この100年間、柱の死因は上弦の鬼との戦闘による物である。上弦の鬼の強さは

別格だ。しかも、それが上位ナンバーであれば、もはや裏金銀治郎がともに戦えるレベルを越えている。

「はあ!?! どうやって倒すんですか?」

「——しのぶさん、我々は鬼を全滅させる為に、ここで働いているんですよ。現役柱でもあるしのぶさんが、その台詞はダメです。せめて、どんな毒ならとか、どんな作戦ですかと言った台詞にしてください」

だが、この時、二人の前提は大きく異なっていた。

胡蝶しのぶとしては、裏金銀治郎一人でどうやって上弦の参という強大な鬼を倒すのか疑問だった。彼の剣士としての腕前も知っており、鬼をコロコロする事に関しては人一倍の才能。ソレを前提に考えても、答えに行き着けなかったのだ。

だが、裏金銀治郎としては、胡蝶しのぶを戦力として数えている。一蓮托生とも言える二人の関係だ。だからこそ、言わずとも分かってくれると思っていた。

「……つまりは、私も一緒ですよね? まあ、そうだと思っていました」

「むしろ、上弦の参を倒しに行くというのに、何故私単独で撃破を試みないといけないんです。そんな事ができるのは、霞柱の時透無一郎さん位ですよ。それに、上

弦の参を殺せなくては、胡蝶カナエさんの仇が取れません。仇である童磨は、上弦の式の地位を血戦で奪い取った実力者です。すなわち、実力で劣る参を殺せずして、式を殺せると考えない方がよい」

胡蝶しのぶの生きる目的である姉の仇に関する情報がしれっと提供された。

どんな些細な情報でも欲しい胡蝶しのぶは、裏金銀治郎の胸元を掴み上げ迫った。だが、そんな行動を気にもとめない裏金銀治郎。そして、落ち着いてくださいとゆっくりと、胡蝶しのぶの手を解いていった。

「少し、取り乱しました。でも、銀治郎さん……私は悪くありませんよ。どうせ、わかって、今情報を教えてきたんでしょう？」

「勿論です。物事には順序があります。然るべき手順を踏めば、殺せない相手など存在しません。ですから、上弦の参を殺せたら、上弦の式について私が知りうる全てを教えるというのはどうでしょう？ 殺る気がでてきたでしょう？」

裏金銀治郎の言葉に、文字通り殺る気が出てきた胡蝶しのぶである。身から溢れる闘志は、蝶屋敷に居た隊士達を震わす程であった。

彼女は、平常心を取り戻し歓喜する。お館様と同じ以上に、『絶対に、こいつは

逃がさない』と決意した瞬間であつた。

「じゃあ、今後の事について色々と話しましょう。今夜は、寝かしませんよ」

「しのぶさんの様な美人から、そんな甘い囁きをされたら断れませんか」

勿論、裏金銀治郎がパパになる的な展開は発生しない。



隔離施設という充実した環境で、鬼舞辻無惨を倒す方法の研究も行われている。その方法が、鬼を人間に戻すという方法だ。鬼だから倒せない……ならば、人間にしてから殺せば良いという素晴らしい着眼点の倒し方だ。

その研究を一手に担っていたのが珠世という鬼である。そして、その研究に途中参加したのが、鬼滅隊が誇る天才薬学者である胡蝶しのぶだ。

二人の力によって、研究は順調に進んでおり、その成果の一応の形を成した。

「これが、鬼を人に戻す毒ですか」

「薬です。ですが、実験しない事には確証がありません」

珠世は、研究成果を裏金銀治郎に報告していた。

長年の女の勘は、この男は危険だとアラートを鳴らしている。そもそも、こんな研究施設を鬼滅隊が抱えている事が危ないと考えていた。鬼舞辻無惨を倒した後、鬼滅隊が……裏金銀治郎が第二の鬼舞辻無惨になるのではないかと。

菓の入った試験管を胡蝶しのぶが確認する。

「大丈夫、本物です」

「では、上弦で試みましょう。効果があれば、鬼舞辻無惨にも有効であると証明できます」

裏金銀治郎は、珠世の事を信じていない。

この場で偽物を掴まされることも考えていた。胡蝶しのぶを共同研究者にしたのも、菓の真偽が判断できるからという一つの理由もあった。

鬼を全滅させる事が目的の鬼滅隊である。つまりは、最終的に隔離施設にいる鬼達もすべからずあの世に送る必要があるのだ。

「裏金銀治郎さん、一つお聞かせください。この隔離施設は、貴方が用意したと聞きました。ここに居る鬼達への仕打ちは、あまりにも惨い。貴方は、なぜそこまで鬼を恨むのでしょうか？」

「恨みなどは、ありませんよ。ただ、人より強い鬼が、何の制約もなくノウノウと生きているのが嫌いなんです。管理できない存在ならば、いない方がよい」

「——危険な発想です。鬼舞辻無惨を倒した後は、鬼滅隊や貴方が第二の鬼舞辻無惨になるのではないかと思うほどに」

「それはありませんよ。それに、鏡をみて仰ってください。鬼舞辻無惨以外で人を鬼にした貴方がソレを口にする権利はないかと愚考します」

礼には礼をもって応える裏金銀治郎。

珠世の第二の鬼舞辻無惨などという失礼な発言に久しぶりに苛立ちを覚えていた。パワハラ上司と一緒にされるなど、失礼極まりない。彼ほど、鬼退治に尽力した陰の功労者は少ないだろうに。

だが、寛容な心を持つ裏金銀治郎は、珠世一行に何もしない。使い道が残っている限りは、協力関係を維持する必要がある。

……

……

…

鬼滅隊の隊士達に、新しい隊服が配られ始めた。

今までの隊服では、中級の鬼相手ならば爪や牙が通らないという物であった。裏金銀治郎の手によって、生まれた隊服は、上級の鬼相手でも牙と爪が通らない程の性能である。下弦級の鬼でもなければ、破ることが難しい程の伸縮性と強度を誇った。

しかも、柱の者達が着る隊服は、下弦の肆からはぎ取った首の皮膚を裏地に縫い付けられている。下弦の肆ともなれば、急所を守る皮膚は非常に硬い。だからこそ、上弦を相手にしても一定の効果が見込める仕上がりを見せていた。

そして、開発に携わった裏金銀治郎が自ら、炎柱の煉獄杏寿郎に説明を行った。「色々と説明は省くが、新しい隊服は従来比の三倍の強度と伸縮性を誇っています。柱の皆様が着ている隊服は、一部に特殊な繊維を用いておりますので、よほどの強敵でも無い限り服が傷つく事はないでしょう」

「実に素晴らしいではないか!! で、このペ○ローション藤の香という、よく分からない物は何に使うんだ?」

「良い質問です。しのぶさんが、鬼を殺すのに使う毒を使用した潤滑油になります。

拭き取りにくく、洗い落とすのも困難。鬼に被せるも良いですし、体に塗って敵の打撃を逸らすと同時に毒にするなど使い方は様々です」

「よく分からんが、とりあえず貰っておこう。要は、服や体に塗って鬼と戦えばよいのだろう」

「ええ、理解が早くて助かります。煉獄さんを相手に、体に触れる事ができる鬼は早々いないでしょうがね」

ぺ○ローションを懷に仕舞い鬼退治に向かう煉獄杏寿郎。ソレを見送る裏金銀治郎は、一つ思ったことがある……しまらないな」と。

みんな大好きな、ヌルヌルローション列車。

さあ、上弦の参というG級モンスターを狩るハンター達の出陣だ。

16.. 夢と現実

いつもありがとうございます!!

今更と言われるかも知れませんが、誤字脱字報告もあります。

沢山あり、皆様に読み汚しをさせている自覚はあるんですorz

音声読み上げ機能を使い、確認作業もしているのですがごめんなさい。

とりあえず日次投稿を維持するため頑張っているという事で許してクレメンス。

無限列車……鬼が出ると噂され乗客が行方不明になる事件が発生していた。その為、鬼滅隊から隊士が派遣されたが、帰ることはない。そこで派遣される事になったのが、炎柱と原作主人公一同だ。

そして、秘密裏に動く裏金銀治郎と胡蝶しのぶ。

二人は、人間離れした身体能力を有しており、動いている列車に飛び乗ることす

ら可能であった。そして、人知れず最後尾の屋根に無賃乗車をする悪がいた。

「銀治郎さん、なぜ発車した列車に私達は飛び乗らないといけないんでしょうか？
というか、この列車は煉獄さんが乗車しているアレですよね」

「下弦の壱とその手下に我々の存在を隠匿する為です。我々の存在に気がつかれたら、そもそも上弦の参がこない可能性があります。一番最悪なパターンは、他の上弦がおまけで派遣される事です」

この時、二人の格好は隊服を着ていない。両名とも洋服を着込み、カツラまで付けている。人相から二人が鬼滅隊であるとは誰も想像ができない。

鬼舞辻無惨は、鬼と視界を共有できる。

つまり、裏金銀治郎という男は、鬼舞辻無惨に素性がバレたくないと考えている。人を餌にして鬼を退治するのは問題ないが、自分が餌になるなどあり得ないと考える良識人であった。

鬼舞辻無惨とて、認識していない相手に手持ちの戦力が次々削られているとは思っていない。裏金銀治郎は、比較的安全なポジションで鬼を効率的に狩る……そんな男である。

「ねえ、銀治郎さん。私、上弦の参の話は聞きましたよ。でも、下弦の壺がいるって全く聞いていません。そこら辺、どうお考えですか？」

「人を眠らせる能力を持つ鬼です。しかし、夢の中で自決すれば目が覚めます。だから、柱にしてみれば、大した敵ではありません。上弦の参が控えているこの状況なら、前座にもならないでしょう」

「なるほど、だから炭治郎君にアドバイスをしたんですね。——本当に、銀治郎さんは何者なんでしょうね。凄く気になります」

裏金銀治郎ににじり寄る胡蝶しのぶ。そして、彼の耳元で「絶対に逃がしませんから」艶っぽい声で囁く。



竈門炭治郎は、煉獄杏寿郎と合流を果たしていた。

彼は、少し話ただけで煉獄杏寿郎という人柄を把握する。柱会議での印象は既に無くなった。人のため、鬼を倒すという強い意志が匂いから読み取れたのだ。

「しかし、裏金殿は物知りだな。俺でも知らない事を知っているとは」

「煉獄さんから見た裏金さんってどんな人なんですか？」

竈門炭治郎は、裏金銀治郎という男の評価が気になってしまった。色々と世話になってる身とは言え、裏で想像を絶する事をやっているのを知り、大人になった。だからこそ、現役柱達は、彼の何を知っているのだろうか。鬼滅隊の資金源を知っているか、探りを入れたくなったのだ。

「難しいな!! 彼は、新しい呼吸を生み出したと言うだけで天才だ! 少なくとも、俺には同じ事はできない。彼が引退し、裏方に回ってから異様に金回りの管理が厳しくなったな!! だから、彼が嫌いな者も多いだろう!!」

「煉獄さんは、裏金さんの事が嫌いなんですか？」

「嫌いでも無いが好きでも無いな!! 人を一面だけ見て評価するのは良くない事だ。俺は、彼の執務室の電気が何時も最後まで点いていることを知っている。——まあ!! 若い女性隊士や蟲柱を連れ込んでいるとも最近は耳にする」

あまりにもまともな意見であった。その髪型やしやべり方からは想像もできないほど、人をよく見ている。だが、竈門炭治郎は噂の真実を知っていた。夜遅くまで、鬼滅隊の資金繰りをやっていたのだ。

「なんで、みんな裏金さんの事が苦手なんだろうね。すごく、いい人じゃん!! 音だって、凄く澄んでるよ」

我妻善逸は、裏金銀治郎という男の綺麗な部分しか見えていない。なにより、シルヴィという世界中探しても出会ったことが難しいであろう理想の女性を連れてきてくれた恩人であった。加えて、裏金銀治郎は我妻善逸に対して期待しかしていない。

だから、綺麗な音しかでない。

「あの、切符を拝見いたします」

病的なまでにやつれている車掌が切符を切りに来た。

竈門炭治郎は、嫌な匂いを感じた。だが、身につけている隊服から放たれる匂いかと思い、深く追求はしなかった。

……

……

……

車掌の手によって、乗客が全員眠りに落ちる。

最後尾車両で、そんな眠りに落ちた客に混ざり平然としている二人の男女……裏金銀治郎と胡蝶しのぶ。寝静まった観客を確認し、車内へと移動してきたのだ。

「つまりは、この列車自体が下弦の壺と融合を果たすという事ですね。だったら、融合したタイミングで私が壁でも一突きすれば、すぐに終わりますよ」

「あっ、その発想はなかった。ですが……このままやり過ぎします」

下弦の壺と胡蝶しのぶは、相性が良い。列車と融合したでかい鬼なんて、何処を突いても倒せる。だからこそ、裏金銀治郎は天秤に掛けた。国鉄列車を壊す事の賠償金と主人公一行の成長どちらを取るべきかと。

だが、原作を可能な限りなぞる事が大事である。

「いいのですか？ 鬼の体内に居るという事は、一般人が犠牲になるかも知れませんが」

「毒でも同じです。列車と融合していると言う事は、毒でもがき苦しむと脱線事故を起こします。ならば、鬼の首が切り落とされるまで大人しく、乗客に紛れていきましょう。我々の目的は、上弦の参だけです」

裏金銀治郎の説明に、胡蝶しのぶも納得した。そもそも、柱の中でも上位の実力

者である煉獄杏寿郎がこの場に居合わせている。下弦の壺に後れを取るなど、考えもしていない。加えて、機能回復訓練でめざましい成長を遂げた主人公一行もここに加わるのだ。これで倒せない下弦が居るはずも無い。

「では、このまま二人で寝たふりを続けましょうか。……ところで、少し気になっていたんですが、アンブレラ・コーポレーションでペ○ローション藤の香って商品を売り始めましたよね」

「ええ。鬼滅隊のフロント企業ですが、何の商品も販売しないのは問題でしょう？それに、あの商品は画期的です。間違いなく、世間の闇に隠れ潜む鬼を退治してくれます」

年齢¹¹彼氏無し¹²の歴の胡蝶しのぶには、ローションという商品の使い道が分かっていない。製品として売り出したのに、その企業トップが詳細を知らないとは些か以上に問題があった。だが、鬼を人に戻す薬の開発などで多忙であったから、仕方ないとも言える。

「確かに、鬼に対してかなり強力な毒を配合していますが……どういった状況で鬼が倒せるのがサッパリです」

「子作りする際、濡れてないと色々と不便でしょう？ その代わりになるのがローションです。人間のふりをして一般社会に紛れ込む鬼を殺すのには最適です。男女一緒に居ればやる事は大体決まっています。これが、一家に一本というレベルで普及すれば、一般人が勝手に鬼を殺してくれるわけです」

事実、販売から一ヶ月しか経過していないのに、濡れ場で鬼が死ぬ事件が多発した。しかも、警察が駆けつけたときには死体は残っておらず、事件は迷宮入りしている。そもそも、鬼という存在は戸籍が無かったり、既に死亡扱いされている者達が殆どで、税金で動く警察が非納税者の為に、真剣に働く事はない。

当然、裏金銀治郎が賄賂をばらまいているので、世間的にこの事件が大きく取り上げられる事はない。その事まで、丁寧に胡蝶しのぶへと説明がされた。

「えっ!? そんな話、初耳ですよ」

「しのぶさんが、お忙しいと思ったので此方で全て対応しました。安心して下さい。ちゃんと、正しい使い方をして夜の生活が充実したと感謝の手紙を沢山頂いております。それに、政財界の重鎮達にもご好評で、援助金も頂きました」

この男はあああ!! この男はあああ!! と、隣に座って寝たふりを続ける裏金

銀治郎に肘鉄を続ける胡蝶しのぶ。

世の中の男性達からの信仰を一心に集めつつある胡蝶しのぶは、順調に英霊への階段を登っていた。しかも、その容姿も極まって良い為、信仰は留まることを知らない。夜の生活の守護者として、冬木の○杯戦争に参戦する事も夢ではないだろう。



裏金銀治郎と胡蝶しのぶが寝たふりを続けている時、竈門炭治郎は、夢を見ていた。

その夢は、鬼舞辻無惨に殺されたはずの家族がいる。何事もない日常を渴望する彼にとっては、理想郷の世界。夢の世界に人を留めるといふ血鬼術は、素晴らしいものだ。

だが、幸か不幸か竈門炭治郎は、夢を夢だと自覚する。

「お兄ちゃんどこ行くの？」

竈門禰豆子がいた。鬼にもならず、普通に過ごしている妹。彼が望むものが全てそこには揃っている。

「禰豆子、俺は!!」

振り返り、最後に一目家族の姿を目にしようとした竈門炭治郎。だが、そこには、夢も希望もないシーンが待っていた。

竈門炭治郎がよく知る人物……鬼滅隊で世話になり力になってくれている裏金銀治郎がなぜか居たのだ。そして、竈門禰豆子を抱き寄せていた。

「お兄ちゃん、私、銀治郎さんと結婚するの」

「これから、お兄さんと呼んだ方が良いかな？炭治郎君」

頬を赤く染め女の顔をする禰豆子を見た。その時、彼に掛かった精神的負荷は、自決するにも等しい物だ。

……

……

…

「うああああああああ!! 禰豆子!! 考え直すんだ!! お兄ちゃんは、絶対許さないからな」

悪夢から目を覚ました竈門炭治郎は、竈門禰豆子を抱きしめた。

そして、温厚な彼であったが、久しぶりにぶち切れた。下弦の壺、絶対ぶっ殺すマンが生まれたのだ。



我妻善逸は、夢の中でシルヴィと素晴らしい日々を堪能していた。

朝起きて、シルヴィを撫でる。昼も撫でる。夜も撫でる。そして、夜戦……人がおおよそ夢見る最終形であった。

だが、流石は下弦の壺である。そこに、竈門禰豆子という存在が追加されるのだ。

「善逸さん、私もシルヴィちゃんみたいにな……好きにしていいいですよ」

ちなみに、我妻善逸は、既に夢だと自覚している。だが、自覚してなお、この夢を満喫する彼は、男の中の男であった。

『善逸!! 起きろ!! 夢で禰豆子を出演させるんじゃない!!』

「やめろー炭治郎!! お前は、俺になんの恨みがあるんだよ!! 少しくらい良いだろう!!」

夢から覚めたくない我妻善逸は、必死の抵抗を見せた。竈門炭治郎の物理攻撃と

竈門禰豆子の血鬼術に抵抗し、夢を継続させる彼の強い意志は、この場に居るだれにも負けなかっただろう。

『善逸……これ以上、寝ているなら。裏金さんに、善逸が働きませんでしたと報告するぞ。そうなれば、シルヴィちゃんが可愛そうな事に』

我妻善逸は、我に返った。

よくよく、考えれば現実に戻ってもシルヴィちゃんとは夢と同じような性活を送っているのだ。自分を慕う女性を不幸にするのは、彼の矜持が許さなかった。

「ごめんな。シルヴィちゃん、禰豆子ちゃん。俺、起きないといけない」

覚悟を決めた善逸は、現実で守るべき女のため、自決した。

これで、下弦の壺は、死んだも同然だ!!

吉原で、ペ○ローションを採用していない遊郭がある。

……じつに怪しいですよねへーへ

PS
..

彌豆子の名前を一太郎から転記すると謎のスペースが入る現象が困るw

SS 投稿した時にしか分からないので、何も考えずに投稿するとスペースがはい
るのよね。

17..汚される思い出

いつもありがとうございます!!

毎日楽しく執筆及び感想を拝見させて頂いております><

感想を読むと元気が湧いてくるへーへ

主人公一行の頑張りがあり、下弦の壺が遂に本気を出し始めた。つまりは、乗客を食べて更に強くなろうとしている。列車の異常を察して、本来なら逃げるなり行動が起こりそうだが、幸いなことに乗客達は夢の中だ。

裏金銀治郎は、馬鹿な鬼だと思っていた。

立場が違えば、間違いなく乗客達の目を覚まさせた。そして、その混乱を活用する。鬼舞辻無惨の教育不足である。

「銀治郎さん、そろそろ出番じゃありません？」

「あまり気乗りはしませんね。ですが、仕方ない」

裏金銀治郎は、日輪刀を構え面倒くさそうに行動を開始した。

彼の中では、上弦の参を前にしたこの状況で、列車の乗客の命は勘定の外にあった。しかし、胡蝶しのぶや煉獄杏寿郎は乗客を見捨てたとあっては、快く思わない。だから、刀を取ったのだ。

決して、人命がとか崇高な理由ではない。目的のために、死なれては困る……ただそれだけであった。これが、誠実な男の仕事ぶりである。

「銀治郎さん。私の手伝いは必要ですか？」

「いいえ。しのぶさんは体力を温存しておいてください。短期決戦しないといけませんので。それに、下弦の鬼本体ならまだしも……この程度の触手に遅れるほど、弱くはありませんよ。2車両分位なら、十分守れます」

裏金銀治郎が日輪刀を振るう。

乗客達に襲いかかる触手が次々に落とされていく。切れ味や抜刀速度、型の美しさなど、柱であった事が納得できるものであった。

「綺麗な太刀筋ですね。今からでも柱に復帰しませんか？ 私で良ければ推薦しま

す」

「ソレには及びません。これ以上、働いたら死んでしまいます。むしろ、しのぶさんこそ、現役引退して裏方にどうですか？ 私としのぶさんなら、きっと運営が楽になりますよ」

胡蝶しのぶは、彼の思わぬ返しに一考してしまった。

ここ最近、柱としての任務は行っていない。寧ろ、裏金銀治郎と一緒に裏方仕事をしている。隊士の質が向上した今、十二鬼月以外ではもはや柱の出番はない。

時代は、裏金銀治郎と胡蝶しのぶの手に依って変わったのだ。ローションがあれば、下弦より弱い鬼など退治に苦労はしない。更に十二鬼月ですら、鬼を人に戻す薬ができあがれば、柱で無くても倒せるようになる。

現役を退いて、鬼を人に戻す薬の研究に注力した方が何倍も役に立つという事実に気がついてしまった。

ドンッと音を立て、車両のドアが蹴り破られる。そして、抜き身の刀を持った煉獄杏寿郎が乗客を守る為、突入してきた。

「失礼する!! おや、貴方がこの車両の乗客を守ってくれたのか!! 柱として不甲

斐ない。だが、その刀は日輪刀であろう。……そちらで寝たふりをしているご婦人もかなりの使い手だな!! 悪いが、鬼を退治するため協力して貰おう」

「炎柱様のお願いとあれば、断れません。私と家内で、後ろの2車両を担当しましょう」

「おや、夫婦だったのか!! では、任せた」

煉獄杏寿郎は、二人の正体に気がつく事はない。時間的猶予があるならまだしも、今も乗客が危険にさらされる中、使えそうな者達の素性などどうでも良かった。

裏金銀治郎は、手を振り煉獄杏寿郎を見送る。走り際に、周辺の壁や天井などに、細かい技を決めていく素晴らしい手際は、柱上位に恥じない仕事であった。同じ事は、裏金銀治郎には出来ない。

「銀治郎さん、煉獄さんは鈍いですから良いですよ。私達の事は、バレないでしょう。ですが、もう少し良い紹介文は無かったですか?」

「私の風貌から、しのぶさんを娘と紹介すると色々と犯罪臭がするでしょう。まあ、家内と紹介しても似たような——ごふ」

青筋を立てる胡蝶しのぶのレバーブローが食い込む。

具体的な紹介文も提示されないのに、理不尽な暴力にあう裏金銀治郎。日常化したやり取りに二人の緊張感は場違いであった。良くも悪くも、胡蝶しのぶも毒されてきた証拠だ。

「銀治郎さん、折角なので姉さんの話を聞かせて貰えませんか？ 任務で何度か一緒に言ったと言っていましたよね」

「あのー、私が必死で触手を斬り倒しているのが眼に入らないんですか？」

「いいじゃありませんか。元柱ともある人が、まさか鬼を斬りながら世間話もできないんですか？」

胡蝶しのぶは、教育者としても優れている。褒めて伸ばす事ができる希有な教育者だ。だが、いくら何でもそれが年上である裏金銀治郎には通用しない。人生経験が違うのだから。

「――私は、善逸君や伊之助君のように単純じゃありませんよ。そうですねー、胡蝶カナエさんのお話をする代わりに、お弁当を作っては貰えませんか？」

「鬼肉入りのですか？」

冗談を言ってよい場面と駄目な場面がある。彼女が、未だに独身である理由の一

つが露見する。相手が裏金銀治郎だからこそ、受け流せるがまじめな人間が聞いたら、顔が真っ青になるだろう。

「普通のでいいです。代わりに、私がしのぶさんのお弁当を作りましょう」

「ま、まあいいでしょう。美味しいお弁当にしてくださいよね」

嬉しそうな顔をする胡蝶しのぶ。

やはり、女性には笑顔で居て欲しいと考えるフェミニストの裏金銀治郎。だが、彼が優しいのは、とても狭い範囲であることは言うまでもない。その範囲は、彼にとって有益か無益かという非常にわかりやすい分け方だ。

.....

.....

...

「胡蝶カナエさんは、男性隊士にモテましたね。包容力があり、女性らしさもあり、男の理想を具現化したような女性とは彼女のような事をいうのでしょうか。先代の炎柱さんとかも、密かに食事に誘ったりと——」

「ちよっと待ってください!! 先代って煉獄さんのお父さんですよ!! その時、煉

獄杏寿郎さんが生まれていましたよね」

想像と違う話が始まり、思わず口を挟んでしまった胡蝶しのぶ。同じ列車に現役
の炎柱がいるにも関わらず、その父親の話をあえて選択するなど、流石は裏金銀治
郎であった。

「ええ。煉獄家は、鬼滅隊の柱を何度も出す古い家柄です。つまり、発言力もお館
様に次ぐレベルがありました。先代炎柱は、荒れている時期があり、それを諫め^{いさ}た
のが胡蝶カナエさんです。そんな彼女に、先代炎柱は——」

「はいストップ!! その話は、なぜか先を聞いたら駄目な気がします。銀治郎さん
と姉さんのお話をしてくださいよ。そうしましょう!!」

これから、酒に溺れる先代の話が始まる所で止められてしまい残念だと思ふ裏金
銀治郎。だが、胡蝶しのぶが聞きたいという話があるなら仕方ないと話を切り替
えた。

そんな話の最中、切り刻まれる触手は、モブどころか背景役となり下がる。

「分かりました。そうですね、胡蝶カナエさんに料理を教えたのは実は私なんで
すよ」

「フオオ!!」

胡蝶しのぶが本日一番驚いた。

それもそのはず。今まで、胡蝶カナエと一緒に食べた食事の思い出の中に、いきなり男の影が出てきたのだ。しかも、下手すればお袋の味ではなく、親父の味という悲しい現実がそこにはあった。

「待ってください!! 待ってください!! 理解が追いつかないのですが、どんな状況でそうなったんですか? 銀治郎さん、今なら嘘と言ってくれれば許して上げますよ」

「私は、しのぶさんには嘘も言いませんし、知りたいと言われれば全部教えますよ。そう言ったでしょう」

裏金銀治郎は、優しい嘘という言葉は持ち合わせていない。

「自慢ではありませんが、私は料理が人並み以上に得意です。国外の料理でも有名どころなら大体作れます。少し特殊な人生送っているのです、経験も知識もありますね。私が任務でお弁当を持参したのが切っ掛けで、教えていたんですよ。ほら、鬼滅隊で料理ができそうな人に心当たりがありますか?」

「——いいですね。あ、『隠』の人なら」

知りたくない事実でドンドン外堀が埋まっていく。

「料理ができる人もいるでしょう。ですが、私が料理の先生に選ばれた理由は、私より上手い人がいなかったんですよ。それに、身に覚えがありませんか？ 胡蝶カナエさんが、行った事もない地方の料理を振る舞ったり、新品の料理器具が揃えられたりと」

「——あります。その節は、ありがとうございました」

胡蝶しのぶが、身に覚えがありすぎて、お礼を口にした。

まさか、自分の姉が知らないうちに男に料理を教わっていたとは、知りたくなかった彼女である。これで確定してしまった……姉の料理は、母親の味ではなく、親父の味であった。

つまりは、裏金銀治郎は既にパパ的存在であった。

汚されていく姉との思い出に、もう止めてと言いたくなる胡蝶しのぶ。

「ふむ……この話は、しのぶさんにダメーじが大きいようなので話を変えましょう。では、胡蝶カナエさんと箱根に鬼退治に行った時です」

「箱根って、あの温泉街の箱根の事じゃありませんよね？」

「寧ろ、そこ以外に箱根ってありましたっけ？」

胡蝶しのぶは、上弦の弐より先に目の前の男を退治しないといけないのではないかと、ダークな感情が湧いてきた。

問い詰めようと思った瞬間、鬼の断末魔と共に列車が宙をを舞った。

「後で、色々と問い詰めますからね!!」

「分かりました。では、実験を開始しましょう」

裏金銀治郎と胡蝶しのぶが、列車から脱出した。乗客達は、鬼が肉壁となり死ななと分かっていたので見捨てる当たり、成長ぶりが窺える。



横転する列車……それを見た裏金銀治郎は、鬼滅隊の財政が傾くなど静かに怒りを覚えていた。商品を増やし資金調達を頑張っている彼にしてみれば、泣きたいとも思える事態だ。

だが、鬼を殺す事が本分である鬼滅隊の仕事を全うして起こった事故だ。しかも、原因が鬼にあれば文句も言えない。

「これだけの惨劇で死者が0とか奇跡です。銀治郎さん」

「そうですね。あちらも無事のようにです」

無傷の煉獄杏寿郎、主人公一同も多少怪我は目立つが即座に戦線復帰できるほどの軽傷だった。腹部の傷に刺し傷も無い事から、新しい隊服の強度は十分である事を証明していた。

「しかし、間もなく夜明けなのに本当にこんな場所にくるんでしょうか？ 正直、そんな命令を出す鬼舞辻無惨なら、私達の敵じゃないと思うんですが」

「鬼舞辻無惨を皆さん、甘く見すぎです。鬼舞辻無惨は、柱に倒される下弦の鬼が弱すぎると自らの手で下弦の壺を残して全て殺した程です。許されるならば、私がお館様に鬼柱として鬼舞辻無惨を推薦して上げてもイイほどの働きをしてくれました」

胡蝶しのぶが、「こいつ、何いってんだ」という怪訝な顔をしている。

だが、紛れもない事実である。しかも、平成の世でも真っ青な程の圧迫面接を行った末の惨殺だ。きっと、その事実が出回れば、鬼になると自ら口にする者はいなくなるだろう。上司の気分一つで、殺されるのだから。

「何処情報ですかそれ？」

「集○社情報です」

真実を答えているのに、信じる気が全くない胡蝶しのぶ。

普段、自分だけでは嘘を言わないなんて口走る男が、平然と嘘をつくその様が入らなかった。

ドォン!!

煉獄杏寿郎の直ぐ側に、一匹の鬼が飛来してきた。その目には、上弦の参と数字がある。全鬼の中で参番目に強い鬼の到来であった。

準備は整った!!

物理攻撃特化など、このローションの敵では無いわ!!

18..ローションがなければ死んでいた

何時もありがとうございます。

感想などで、以下のようなご指摘を多数頂いております。

× 鬼滅隊

○ 鬼殺隊

本SSでは、類似世界的設定であり、意図的に「鬼滅隊」としております。
誤字ではないのでよろしくお願い致します!!

上弦の参——猗窩座。その身から発する威圧感だけで、並の隊士なら動けなくなるほどだ。柱であっても目をそらせば、一瞬で肉塊へと変えられてしまう。

そんな相手に、最初の一撃から、竈門炭治郎を救うだけでなく、反撃で腕を真つ二つにする煉獄杏寿郎。強者が大好きな猗窩座が鬼に誘うのも頷ける。だが、残念な事にスカウトマンとしての才能はイマイチであった。

誘い文句は、永遠に鍛錬し至高の領域を目指そうなどという武人らしい誘いだ。そもそも、何年も鍛錬してその域に達する事ができない男が、言うのはおかしい。できない奴は、何年やってもできない。時間があれば良いという問題ではない。1000年勉強したらアインシュタインを超えられるかと言われればNoだと言えよう。

要するに、生まれ持った物が違うのだ。

鬼への勧誘中に、割り込むのも悪いと思ったが裏金銀治郎は行動にでた。

「炎柱様、微力ながら助太刀します」

「——なんだ貴様は？ 闘気もたいした事ない。俺は、今、杏寿郎と話しているんだ。雑魚は引っ込んでろ」

猗窩座の実力から鑑みれば、裏金銀治郎は雑魚である。だが、強者を倒すのはいつても弱者だ。戦いで実力が全てというのは、遭遇戦に限ったことだ。モンハンでも、罠と閃光玉を用意して挑めば強敵だってソロ撃破できる。狩る対象が鬼に変わっても同じだ。

「炎柱様、私が可能な限り相手の手の内を晒します。だから、必ず仕留めてください

いね」

「死ぬぞ。——名を何という？ 鬼滅隊の者であろう」

煉獄杏寿郎の正しい戦力分析がなされる。だが、上弦の参という鬼を相手にする際、手の内を知ると知らないでは大きな差が出てくる。鬼を倒す事と隊士の命を天秤に掛けた。

「狛治です。そして、家内は恋雪」

竈門炭治郎は、匂いで気がついた。目の前の変装した男が裏金銀治郎だと。

心の中で助けを求めたら、本当に助けが来た。列車の移動速度から考えて、最初から乗車していなければ、あり得ない状況。竈門炭治郎の中で、裏金銀治郎という存在の恐ろしさがドンドン増していく。

しかも、この場で平然と偽名を名乗る当たり、その神経の図太さは鬼滅隊随一だ。

「——おい!! 貴様、今なんと言ったあああ」

「金の呼吸 参ノ型 不動金剛」

裏金銀治郎の煽りレベルは、誰にもマネできない。武人である猗窩座だが、彼によって決られた過去は、冷静さを失わず程であった。人間だった頃の猗窩座の本名

とその恋人の名を平然と使ったのだ。

猗窩座から繰り出される一撃一撃が必殺の攻撃だ。それを、刀で一つ二つと受け流す裏金銀治郎。だが、実力差がある為、良い攻撃をその身に受ける。その瞬間、裏金銀治郎の足下に大きな亀裂が入る。

防御特化の型である不動金剛でダメージを地面へと流していた。だが、猗窩座の攻撃を受け流せるほどの性能は、持ち合わせていない。その為、確実にダメージが蓄積されていく。

強化された隊服とペ○ローション、更には防御の型……これら全てが合わさることとで、猗窩座を前にしても立っていられる。打撃攻撃がローションという潤滑油のおかげで、威力が半減しているのだ。

猗窩座と裏金銀治郎の間には、ローションの糸が引いていた。その糸には、裏金銀治郎の血が混ざり、運命の赤い糸のようだ。これほど見苦しい運命の糸は、他では見れない。

「狛治殿!! 素晴らしいな!! まさか、その身にあの攻撃を受けてほぼ無傷とは」
煉獄杏寿郎が賞賛する。彼の目からしても受け流せなかった攻撃をその身に受け

ているのが分かっていた。だが、あの威力を身に受けて立っているのだ。原理こそ理解できなかったが、その胆力は賞賛するに値した。

裏金銀治郎は、骨や内蔵に痛手を負っている。既に治りかけているとはいえ、初手でこれだけ痛めつけられるなど、上弦の鬼の強さに嫌気がさしていた。

「くそ!! なんだ、この液体は!! 取れんぞ」

ローションという商品は、武人である猗窩座に無縁の品。特殊な職場で働く上弦を除けば、ローションを知る機会などあるはずもない。

腕を振るうと液体が地面に飛び散る。そして、自らの足場をユルユルにしていた。だが、それでも完全には拭いきれない。ローションを洗い流すにはお湯が一番であるが、今この場にそんな物はない。

しかも、藤の花の毒でローションに触れた箇所がボロボロになっていく猗窩座。腕を再生させる為、切り落としを考えていたが……そんなスキを見せれば、煉獄杏寿郎が動くと本能で分かっていた。

そのあまりの有用性から、煉獄杏寿郎が懷から取り出したローションを服や体に塗り塗りしている。そして、手に付いたローションを炎の呼吸で蒸発させていた。

その様子を猗窩座は、「ちょっと、ずるくない」といった風に見ている。

「煉獄杏寿郎さん、鬼の腕一本を不能にしますから勝ってくださいね」

「勿論だ。その呼吸を使える者は、裏——」

「猗窩座!! もし、私に勝てたら、剣道場の井戸に毒をいれた生き残りの子孫を教えてやる!!」

裏金銀次郎は、ばれたくない名前を言われる前に大声で叫んだ。

事はすべて計画通りに進んでいる。その一言で猗窩座は、裏金銀次郎を殺せなくなった。なぜなら、猗窩座の怨敵が生き残っている可能性が示唆されたからだ。彼の中で、ぶち殺したい順位が「怨敵裏金銀次郎」となる。

情報を聞き出すまでは殺せない。弱い人間に本気を出せば殺してしまう。

「調子にのるな人間!! 破壊殺・乱式」

「金の呼吸 陸ノ型 神威縫合」

金の呼吸 陸ノ型 神威縫合……鬼を斬ると同時に切断した神経を別の神経に繋ぐ。鬼はその再生力から、即座に肉体を治そうとする。治る先に別の神経や血管があれば、異常な配線であっても繋ぎ直してしまう。鬼とて、治っている神経を治す

ことはできない。

上弦の参の攻撃をその身に受けながら、左腕の神経配線を異常にした裏金銀次郎は、この戦いにおいて十分な戦果を出した。

「よくやった!! あとは、俺に任せておけ」

と、裏金銀次郎が吹き飛ばされる最中、煉獄杏寿郎が頼もしい言葉をかける。



竈門炭治郎の真横を吹き飛ばような勢いで通過した裏金銀次郎。そのまま、列車にぶつかり崩れ落ちた。

濃厚な血の匂いから、重症である事は理解する。大人になった竈門炭治郎は、彼が死んだ場合の最悪のシナリオが浮かび上がる。

鬼滅隊の資金調達を担うキーマン、鬼を人間に戻す薬開発にも携わる重要人物。竈門炭治郎の中でも妹を人間に戻すまでは、その命の価値は自らより上に置いていた。

「伊之助!! 俺を狛治さんのところに連れてってくれ」

「お、おう分かった!!」

血を吐き、手足が変な方向に曲がっている裏金銀次郎。こんな状態でも呼吸法を維持しているのは、さすが元柱である。

「大丈夫ですか!? 狛治さん」

「ごっほ!! ごほ。私の意図を汲んで狛治と呼んでくれる。君も、大人になったね。後ね……このお、状態で——だ、大丈夫に見えるなら、医師を紹介するよ」

竈門炭治郎は、どこから手を付ければいいか迷っていた。隊士として、多少の怪我なら対処できる教育を受けている。だが、重症ともなれば、何が正しいのか判断できない。下手に動かせば状況が悪化することだってある。

「もう、喋らないでください。すぐに助けを」

「喉はもう治した。腰につけているケースに注射器が入っている。手が治るまで時間がかかるから、頼んだよ」

竈門炭治郎は、すぐに注射器を取り出した。その中身の赤い液体から漂う匂いが、鬼の物であると理解した。だが、躊躇なく裏金銀次郎へ投与する。鬼肉の存在があったのだから、今更驚く程の事ではなかった。

柱専用の緊急活性薬の効果は、素晴らしい物だ。折れたはずの手足を瞬く間に再生していく。そして、猗窩座によって、粉碎された耳を元通りの形に再生した。その再生能力は、上弦に届かなくても下弦の鬼に匹敵する速度である。

「どうなってんだよ!! みるみる傷が治っていきやがる」

「この為に用意していた薬だからね。伊之助君、この薬の事は内緒だよ。柱の人達しかもってない秘密の薬だからね。もし、バラしたら君の口を封じないといけない」「お、おう」

勘の良い嘴平伊之助。口にくそ出さなかったが、直感で目の前の男が裏金銀治郎だと理解した。そして、口封じに関しても本気でやると分かってしまった。しかも、世話になった者達含めて、綺麗にサッパリなかった事にされると。

「炭治郎君、僅かだが私の刀身に猗窩座の血液が付着している。回収しておいてくれ。私は、傷が癒えたら再度応援に行ってくる」

「そんな体で無茶ですって!! いくら、傷が治っても体力が持ちませんよ」

「私は、君と約束しただろう。全力で支援すると。あれは、鬼を人間に戻すいい研究材料になる」

竈門炭治郎の嗅覚は、約束を守るため全力を尽くす裏金銀治郎の匂いを嗅ぎ取った。

確かに、裏金銀治郎は竈門炭治郎との約束通り、全力で支援するつもりだ。勿論、自身の目的もある為、利害が一致しているに過ぎない。鬼を人間に戻す薬……すなわち、どんな鬼でも殺せる方法だ。

しかし、竈門炭治郎の眼には、妹の為、そこまで頑張ってくれる男であったと嬉しい勘違いがあった。竈門炭治郎に人を見る目があれば、妹の為ではなく、彼が自分のために動いていた事に気がつけただろう。

人生経験がまだ足りていない証拠だ。

「俺!! 裏金さんの事、誤解していました。俺、絶対に強くなって役に立ってみせます」

「……ああ、私は君への支援は惜しまない。期待している」

裏金銀治郎は、いつも以上にやる気に満ちあふれる竈門炭治郎に疑問が生じた。だが、ここは流れに乗るのが得策だと適当に話を合わせる。



裏金銀治郎が治癒に専念する最中、煉獄杏寿郎は激戦を繰り広げていた。善戦している。それには、裏金銀治郎が身を挺して腕一本の神経を可笑しくした事が功を成していた。

勿論、腕を切り落として再生させれば完治する。だが、煉獄杏寿郎を前に、そんなスキを作れなかった。

「この素晴らしい剣技も失われていく。杏寿郎、悲しくはないのか!!」

「誰もがそうだ!! 人間なら!! 当然のことだ!!」

双方の連撃の応酬。ヌチャヌチャと、場にそぐわない音がするが、そんなのが気にならない程だ。――殴っている猗窩座ただ一人を除いて。

煉獄杏寿郎は、ローションの特性と隊服の強度を理解していた。その為、絶妙な回避を行い猗窩座にローションダメージを蓄積していった。上弦の鬼とはいえ、鬼を殺す猛毒を分解するのに多少の時間は掛かる。

攻撃特化と言われる炎の呼吸に、新しい戦法が加わりつつあった。

「炎の呼吸 伍ノ型 炎虎」

「破壊殺・乱式」

手加減など一切なしの猊窩座は、片腕であっても煉獄杏寿郎を負傷させた。あばら骨は砕け、内臓を傷つけ、今すぐ治療を受けねば致命傷になる程だ。

煉獄杏寿郎の重傷を目にし、猊窩座は既に勝った気でいた。

「どう足掻いても人間では、鬼に勝てない」

「それは、驕りが過ぎるぞ!! 人間は鬼になんて負けない」

煉獄杏寿郎は、目の前の鬼を殺す為、緊急活性薬を自らに打ち込んだ。

そう、今こそ100年の負の連鎖を打ち切るチャンスであると理解したのだ。片腕が使えない鬼、日の出が近い、ローション戦術……二度と揃わない好条件だ。だからこそ、例え鬼由来の薬であっても今使わずしてどうすると、決意した。

「俺は俺の責務を全うする!! ここにいる者は誰も死なせない!!」

「素晴らしい闘気だ……それ程の怪我でえ!! 貴様、どうして完治している!!」
鬼にも匹敵する回復速度で治った煉獄杏寿郎に驚いていた。

だが、それならそれで構わないと猊窩座も全力で迎え撃つ。寧ろ、弱った状態の敵でなくて幸いだと心を躍らせていた。

「炎の呼吸 奥義!! 玖ノ型 煉獄」

「破壊殺・滅式」

必殺の一撃が双方を放つ瞬間、笑みを浮かべる男が居た。裏金銀治郎である。

「血界」
けっかい

その一言で血鬼術が発動し、一瞬だが猗窩座の血鬼術を無効化した。

四方と上下を囲まないと発動できない術だが、この戦いの間に条件が満たされていた。四方には、胡蝶しのぶが血文字が書かれた札を貼り付けていた。そして、地面には彼自身が、空には彼の鎧鴉が札をもって飛んでいる。

……

……

……

二人の技はぶつかり合いドオッと轟音を立てた。砂埃が舞い、二人の様子が分らない。その様子を見ていた誰もが煉獄杏寿郎の無事を祈った。そして、絶対に勝ってくれと。

煙が晴れて現れたのは、脇腹を挟られながらも猗窩座の首に日輪刀を食い込ませる男の姿だった。本来であれば、猗窩座の腕が急所を貫いており絶命五秒前になる

はずが、彼は運命に勝ったのだ。

「オオオオオオ!!」

ありったけの力で首を切り落としに掛かる煉獄杏寿郎。猗窩座とて、無抵抗に首を落とされるはずもない。動く片腕で煉獄杏寿郎にトドメを刺そうとする。だが、その腕は、届く事はない。煉獄杏寿郎に止められ、膠着状態となる。

「狛治さん!! 早く鬼の首を」

「その必要はない。切り札とは最後まで取っておくものだ。そうでしょう、恋雪さん」

今の今まで、存在を隠蔽し続け絶好の機会を狙っていた胡蝶しのぶ。

「蟲の呼吸 蜈蚣の舞い 百足蛇腹」

グサと良い音がした。

上弦の式ですら回避できない速度の突き技。炎柱と膠着状態である猗窩座は、その存在を認識するまでもなく、喉を突かれた。そして、流し込まれる鬼を人間にする毒——。

猗窩座は、すぐに肉体の異変に気がつく。肉体の破損箇所を痛みを覚えてきた。

それも、徐々に強くなり、それは耐えがたい苦痛へと変わっていく。

「一体俺に何をしたああああ!!」

「敵に手の内を教えるはずないでしょう。貴方は、馬鹿ですか？」

傷を完治させた裏金銀治郎。そんな彼から正論を言われ、文句の一つも言っていないが、それは既に叶わない事になっていた。

半ば人間に戻った猗窩座は、煉獄杏寿郎に首を飛ばされる。そして、日が昇り、猗窩座の死体は崩れ落ちていく。

さりげなく、血を大量に回収する裏金銀治郎。だが、それを咎める者は居なかった。上弦の鬼を撃破という偉業に、誰しもが感動をしている。そう……裏金銀治郎と胡蝶しのぶ以外は。

………

……

……

その後、しばらくして『隠』も到着した。

警察も到着し、裏金銀治郎自ら対応し、賄賂を片手に脱線事故である旨を伝え

た。列車の機関部分が真っ二つにされているにも関わらず、脱線事故とは無理もあるが、そこを調整できるのが彼であった。

「五体満足で何よりです。煉獄杏寿郎さん、怪我の方はもう宜しいので？」

「伯治とは、裏金殿だったのか!! 体の方は、問題ない!! 例の緊急活性薬……役に立ったぞ。後、このローションもな!! むしろ、ローションがなければ死んでいた」裏金銀治郎は、この時ほど申し訳なかったと感じたことはない。そんな笑顔でローションが入っていた容器を片手に、そんな台詞は聞きたくはなかった。

みんな大好き煉獄さん生存ルートだ!!

たまに、ローションに人生を狂わされた人も救われた人も居るはず。

そんな、世界線があっても良いよねへーへ

19.. 大体、貴方が悪い

いつもありがとうございます!!

みんな、兄貴の生存とローションの組み合わせを喜んで頂けたようで何よりでした(え

鬼滅隊に届けられた上弦の参の退治報告。それは、お屋形様を筆頭に誰しもが喜んだ。何百年ぶりの快挙である。検査入院している炎柱の許には、現役柱達がお見舞い品をもって続々と足を運んでいた。勢いは、まさに鬼滅隊にあるかのように思われた。

だが、その陰では、裏金銀治郎が青ざめている。

機関車両含めて計9両編成の弁償である。川崎造船が製造した蒸気機関車である為、国内で修理も可能であったのが、不幸中の幸いであった。その為、想像より

安い額であったが、それでも鬼滅隊の懷事情では、賄うことは不可能。列車の修理費だけで、鬼滅隊を25年運用するだけの資金である。

これで、鬼滅隊は破産……という訳にはいかなかったので、裏金銀治郎も頑張った。

政財界のVIP達の力添えもあり、列車に関しては強引に保険適用してもらった。そのおかげで、保険会社の者達は何人も首を吊る事になり、鬼と関係ない人達が酷い被害を受けた。おまけに、裏金銀治郎自身も「やり過ぎは困るよ、裏金君。我々でも隠蔽には限度がある」とまでお電話を頂いていた。

「銀治郎さん、よく保険なんて適用できましたね」

「鬼滅隊は、列車を乗っ取った犯罪者から乗客を守った。そして、最後の抵抗で犯罪者が列車を脱線させて破壊したというストーリーで話は既に纏めてきた。犯罪者という、明確な犯人さえ用意できれば、後は日本の闇に任せればこの通りよ。全て問題ない」

裏金銀治郎の行動は、組織を守る為、仕方が無かった事だ。

好調な胡蝶印のバイアグラとペ〇ローションの売上げでは、賄いきれない額だか

ら仕方が無い。鬼滅隊のお財布事情は、裏金銀治郎と胡蝶しのぶの努力もあり、5年は組織を維持できるだけの金を集めていた。列車の弁償分だけで、運用費25年分という途方もない額の捻出など、一組織の努力で何とかなるレベルではないのでお国の力を借りたまでだ。

だが、鬼滅隊としても持てる資産を全て放出した。被害者への治療費や賠償金や線路の整備費用、代理列車の手配費用を支払った。裏金銀治郎が中心となり、『隠』の者達が不眠不休でやったのだ。

「銀治郎さん、その事故の犯罪者が本日死刑になったと、この新聞に掲載されていますが、何処が問題ないのでしょうか。お館様は、死者0で大変お喜びになっておりましたよ」

「列車事故での死者は0であったのだから問題ないだろう。私としても、責任を取ってくれる者達が生きていてくれて嬉しい限りだよ」

社会の常識だが、やった事には責任が伴う。鬼に与して、人殺しに荷担していた連中がやらかしてお咎めなしなど、天が許しても裏金銀治郎は許さない。どうせ、死ぬ人間なのだから、そいつらの身に覚えのある罪を一つ二つ付けてやっても問題

にすらならない。

「私だって、列車事故で責任を負ってくれる者達が生きていてくれて喜んでいますよ。それに、安心してください。鬼の事が漏れないように、警察や看守、裁判官にも根回しは、完璧です。今頃、不審火で裁判記録が灰になっている頃です」

「確かに、彼等は許されない事をしたかもしれませんが、ですが、やり過ぎではありませんか？ お館様に相談したなら、もっと良い案がでるかもしれませんよ」

「ありませんよ。お館様も彼等に司法の裁きを受けさせる事は、承知済みです。そもそも、彼等は隊士を殺した殺人犯です。元より死刑にされる身でありました。ならば、最後に鬼滅隊の役に立って貰ったんです。彼等としても、最後くらい人の役に立てて幸せだったでしょう」

裏金銀治郎は、お館様に確認した。鬼に荷担し隊士達を何人も殺した者達を救って破産するか、絶好調の鬼滅隊を取るか、二つの道を選んで貰ったのだ。勿論、双方のメリットデメリットを纏めてわかりやすく説明をしてきた。

当然、前者になどメリットはない。組織のトップとして、どうすべきかは決まっていた。

「世知辛い世の中ですね。納得は、まだできませんが、理解はしました」

「それだけで十分です。ため込んだ資金も使い果たし、0からのスタートとなりましたが……アンブレラ・コーポレーションがあるだけマシですよ」

フロント企業の存在がなければ、詰んでいる。鬼滅隊の生命線を握る二人の価値は、お館様の中で跡目の息子に次ぐ物へと格上げされていた。

鬼滅隊は、鬼を狩るごとにお金が減るとは誠に不思議な組織である。お金を払って鬼退治をしていると言える。現代で言えば、金を払って仕事をしているなど、全くもって理解の外にある事象だ。

そんな理不尽を物ともせず働く二人は企業戦士に相応しいだろう。

「なんで、こうも苦難が続くんでしょう。流石にもう、何も起こりませんよね？」

「——吉原あたりで、大暴れする人達がどれだけ被害を出すか次第かな。あそこは、権力者達もうるさいだろうし、責任取らされるよな」

胡蝶しのぶは、耳を疑った。

彼女も女である。吉原がどういう場所なのかは当然知っている。大暴れして責任とは、一体何なのか。そもそも、責任なら取るべき相手が近くにいないんじゃないま

せんかと思っていた。

「吉原？ はあ!? なんで、今、吉原の話なんて出てくるんです？」

「そりゃ、宇髄天元さんの奥様達が上弦の鬼が潜んでいる可能性があるとかで、現地調査を行っているからです。もしかしたら、格上げされた上弦の伍が、花魁なんてやっていたりするかもしれませんよ」

裏金銀治郎は、事実しか伝えていない。だが、胡蝶しのぶは、彼から吉原の話を聞くとなぜかムカムカしていた。思わず足先を踏みつけてしまうほどに。

「なんで、鬼が花魁なんてやっているんですか」

「そりゃ、鬼側もお金がないと暮らせないですからね。部下を遊郭で働かせて、その金で悠々自適な生活をしている鬼舞辻無惨が居ても不思議じゃありませんよ」

胡蝶しのぶの視線が更に冷たい物へと変わっていく。裏金銀治郎の言葉を信じていない。だけど、流石にあり得ないという気持ちが大きかった。それを口にしてはいる裏金銀治郎ですら、信じられないかも知れないがと枕詞を付けたくなるほどだ。

「仮に事実だとして。女性に体を売らせた金で自分は好きなことをするとか、最低のクズですね」

「本当ですよ。お館様と同じ一族出身とはとても思えませんよね」

胡蝶しのぶは、裏金銀治郎の胸元を掴みに掛かった。そして、ソファに押し倒す。端から見たら色々とマズイ体勢だ。

「ぎゅんぐゅんさるん。前々から言っていますよね。会話の各所に爆弾情報を埋め込まないでくださいって。今の私の気持ち分かりますか？ お館様にこれから会う時、どんな顔をすればいいんですか？」

「何時も通り、その綺麗な顔のままでもいいんじゃないですか。——今日は、お化粧されていますね。いつにもまして綺麗ですよ」

顔が近い事もあり、化粧に気がつくとはできる男である裏金銀治郎。

「当然です。私は、いつも綺麗なんです。で、本題はそっちじゃありません!! 同じ一族ってどういう事ですか？」

「難しい事では、ありません。鬼舞辻無惨は、産屋敷家に繋がる平安の貴族の出身です。病弱であった彼は20歳まで生存できないと言われ、当時の医師が作った試験的な薬を服用し鬼になりました。まあ、そんな経緯です」

胡蝶しのぶは、掴んだ胸元を力一杯前後に振る。存外痛いなと思いつつも、裏金

銀治郎は甘んじて受けた。自分に何かあった際に、全てを引き継げるのは彼女しかない。だから、少しずつ真実を渡しているのだ。

そんな二人の状況を気にする事も無く扉が大きく開いた。

扉を開けた人物は、今現在話題沸騰中の音柱の宇髄天元である。宇髄天元は、給料を受け取る際に近状報告と嫁達の任務状況を丁寧な報告してくれる希有な人材である。その為、裏金銀治郎も彼と奥様達にも、配慮を欠かさない。給与面しかり、装備面しかりと。

「おう!! 今月の給料を貰いに来てやったぜええ……」

そんな、まめな性格の宇髄天元だが裏金銀治郎と胡蝶しのぶを見て、理解した。忍者とは空気すら読める。

「宇髄天元さん、今は手が離せないなので私の机の引き出し……右上にある封筒をもってってください。奥様達にもよろしくお伝えください。それと、ローションの使い心地は、どうでしたか?」

「最高だったぜ!! それと、間が悪くてすまんかったな。今度、埋め合わせはするからな」

噂は、本当だったと忍者は情報の精度を上げた。できる男である宇髄天元は、そのまま華麗に部屋を退出しようとする。

「ちょっと待って!! なんで、私の事に触れないで華麗にスルーして部屋を退出しようとするんですか。ちゃんと、銀治郎さんと、この状況になった訳を説明しますから」

「しのぶさん、説明できるんですか?」

お館様が実は、鬼滅隊の最終討伐目標である鬼舞辻無惨と同族なんです。流石に、真実をバラすのは早すぎる。時と場所を選ばなければ、組織が空中分解する可能性もある。

上弦の鬼が遊郭で体売って日銭を稼いでいる事だって同じである。花魁をしているとか、なぜ現在情報収集をしている音柱達より詳しいのか、納得のいく説明ができるはずもない。

「――大体、貴方が悪い」

「分かった、分かった。裏金さんよ、嫁が三人もいる俺からの有り難いアドバイスだ。女は怒らすとこえーからな。最低限、ドアに鍵くらい閉めとけよ」

そんな台詞を残してスタイリッシュに部屋を退出して行った。

その後も、胡蝶しのぶは、「どうしてくれるんですか!! あの人、忍者の癖して口が軽いんですよ」と、裏金銀治郎を責め立てる。その声は、扉を閉めた部屋の外まで漏れていた。



無限列車での怪我が原因で主人公一同は、蝶屋敷に再入院していた。その一行で我妻善逸だけは、蝶屋敷で個室を与えられている。大部屋では、色々と不健全でと判断され、特別な計らいがされていた。

「喜べ善逸君。約束の二人目を連れてきた」

「月村すずかです。不束者ですが、よろしくお願い致します」

月村すずか……保険会社を営む一族の者であったが、不幸な列車事故の一件で、首が回らなくなり娘が売りに出されたのだ。そこを、救いの手を差し伸べたのが裏金銀治郎である。

教養があり、容姿も整っている彼女は、汚い大人達のオモチャにされる予定だっ

た。そこを聖人の心をもって救ったのが裏金銀治郎だ。彼としても、実に良い拾い物をしたと思っている。

シルヴィのような境遇でなかったため、善逸への無償の愛はすぐには難しいだろう。だが、自らの境遇を理解し、相手を愛そうとする心を持つのが月村すずかである。

「す、すげえええ!! 裏金さん!! まじ、こんな可愛い子が本当にお嫁さんになってくれるの?」

「ああ、善逸君。愛とは与えられるばかりではダメだ。シルヴィを基準に考えてはダメだぞ。シルヴィは、ゲームで言えばイーजीモードだ。月村すずかは、ノーマルモードだ。今の君ならそこら辺も機敏に対応できるだろう。私は、君に期待しているのだよ」

当然、そんなモードではない。強いて言えば、サキュバスモードが相応しいだろう。黄色い太陽を拝む日は、遠くない。

我妻善逸が二人目を娶った情報は、上弦の鬼撃破の報告と同等の速度で男隊士達へと伝わった。

……

……

…

鬼滅隊の隊士の中で、一番殺したい男に堂々トップを飾る我妻善逸。隊士同士の殺し合いが御法度でなければ、早々に殺されていたに違いない。

ある雷の呼吸の継承権を持つ隊士曰く……鬼舞辻無惨より我妻善逸を殺したいと口にする者まで現れるほどだった。

月村すずかが誰だって？ Google先生で検索してトップに出てくるキャラです。

それ以上の質問は受け付けません。

吉原行く前に、もうちょつと話を挟みます。

胡蝶カナエとの昔話とお弁当編を@@

20.. 鬼と仲良く

いつもありがとうございます。

感想を本当に楽しく読ませて頂いております。

執筆意欲がわきまくりです!!

夜の一族が大人気過ぎて、仲間がたくさんいて嬉しい限りです。

でも、ネタ出演なのであしからずへーへ

蝶屋敷の台所に、普段いない人物が居た。胡蝶しのぶ、その人である。

普段忙しくて料理する時間すら取れない彼女が、今回ばかりは違っていた。ブラ
ンクが有り、感覚を取り戻すために努力している。彼女は、決して料理の腕が低い

わけではない。料理なんて、レシピ通りに作れば良いという理系である。

鬼気迫るような彼女の料理への姿勢は、胡蝶家の食卓にも影響が出していた。

「どうですかカナヲ、ひなき。新しいレシピを試してみたのですが……」

「美味しいです、胡蝶様」

「少し、味付けが濃い気がします。美味しいです。お母様」

食卓には、肉がメインの料理が並べられていた。胡蝶しのぶが食事当番である柱は、野菜や魚メインの食事だというのに、ここ一週間ほどずっと当番を引き受け、肉料理が出され続けていた。

いい加減、肉料理以外を食べたい彼女達であったが、嬉しそうに料理をする胡蝶しのぶを邪魔する事はできなかった。

この時、産屋敷ひなき改め胡蝶ひなきは、父親から言い渡された使命を全うする。裏金銀治郎は、鬼滅隊に必要な人材だ。決して逃がしてはならない。だが、それと同時に上弦の鬼を撃破し、勢いがある鬼滅隊も維持しないといけない。

やれば、できる!! と、という言葉があるように、この状況で最高戦力である柱が戦力外通告を受けるのを避けないといけない。つまり――

「お母様、避妊はしてくださいね」

まさか、食事の場でそんな話題が出てくるとは思わず、暖かい食卓が一転して南極のような凍りつく風が吹く。

「ひなき、時と場所は考えて発言しないとダメですよ。それに、どうしてそんな発想に？」

「あまねお母様が言っていました、女が急に料理を始めるときは男の影があると。大丈夫です、あの人がお父様なら構いません」

あの人とは誰のことか、栗花落カナヲ以外は分かっていた。

「胡蝶様は結婚なんてしない!! ずっと、蝶屋敷で一緒に暮らすんです」

さらに、胡蝶しのぶを生涯独身であると宣言する継子がいる。女の幸せを平然と潰そうとする可愛いが、可愛くない継子がこの場に誕生した。

……

……

……

裏金銀治郎の執務室で、胡蝶しのぶが先日の食卓での大事件を話していた。

「お子さんが二人も居ると大変ですね。どうですか、母親の気分は？」

「だ、誰のせいだと思っっているんですか!! 分かっていますか、あ・な・たですよ!!」

そんな可愛い胡蝶しのぶを虐めたくなるのは男の性だ。

勿論、彼女自身も裏金銀治郎が、本気でそんなことを言っていないのは分かっていた。ただの言葉遊びであると。裏金銀治郎との会話は疲れるが、彼女は嫌いではなかった。それは、裏金銀治郎が柱や胡蝶カナエの妹といった立場を見ずに、彼女だけを真摯に見ていたからだ。

「分かっていますよ。だから、責任を取りましょうか」

裏金銀治郎は、席を立ち上がりソファーに座る胡蝶しのぶに詰め寄る。先日、音柱が来た時と同じだが、今回は立場が逆だ。一步間違えば、セクハラで裏金銀治郎は懲戒免職へ。

「えっ!! ちょ、ちょっと、銀治郎さん。マズイですよ!!」

「大丈夫です。ちゃんと、鍵は閉めてますから——困った顔も素敵ですよ。しのぶさん」

顔を近づけて、そっと耳元で囁く裏金銀治郎。普段、胡蝶しのぶのお家芸である耳元でささやくをお返ししたのだ。だが、女性から男性にやる場合は許されるが、その逆は許されない事は沢山ある。

顔を真っ赤にする胡蝶しのぶ。神速の抜刀術により、裏金銀治郎の前髪がスッパリ切り落とされた。上弦の参というG級モンスターから採取した血液を投与していなければ、半歩後ろに下がるのが遅れて、今頃は額が割かれていた。

「銀治郎さん、乙女心を弄ぶと殺しますよ。どうせ、一度や二度心臓をさしても死なないでしょう。だったら、私の気の済むまで切り刻んでもいいんですよ」

「すみません、私が悪かったです。ほら、そろそろお昼の時間なので、一緒に食事でもどうですか？ 今日、しのぶさんの為に、私が腕によりを掛けて作ってきました」

お昼時もあり、胡蝶しのぶも怒りを収めた。

そして、予てより約束していたお弁当の交換会が始まったのだ。

「いいでしょう。言っておきますが、私のお弁当も力作ですよ。今日この日をもって姉の味を超えて見せます。ですが、約束を覚えていますよね？」

姉の味を超えなければ、姉の料理を思い出す度に男の影がうつる。だからこそ、超える必要があった。母の味を本当に母の味にする為に!!

「勿論です。胡蝶カナエさんと、箱根に鬼退治にいった件ですよね」

「そう、それです!! そもそも、姉さんは強かったのに、銀治郎さんもその場に居た理由がわかりません」

当時、実力的に同じ柱であっても裏金銀治郎と胡蝶カナエでは、100回闘っても胡蝶カナエが全て勝利する。それほど、確実な差があった。

「それは、同じ志を持つ同士として、胡蝶カナエさんに呼ばれたんです。鬼と仲良く(意味深)したいなんて、鬼滅隊の中でも異端でした。それについて、お話ししたいと言われてノコノコと付いて行ったのが私です」

「——仲良くですか? 確かに、姉さんは、鬼と仲良くしたいと言っていました。本当ですか? ただ、美人な姉さんに近づきたかっただけとか、邪な気持ちがあったんじゃないですか?」

胡蝶カナエは、鬼滅隊の中で1位2位を争うレベルの美女であった。男なら誰だって、誘われたらホイホイ付いていく。仕事に誠実な裏金銀治郎は、違った。今

現在も、鋼の心で胡蝶しのぶを押し倒さない男だ。一時の感情に身を任せると滅びが待っていることを彼は知っている。

「しのぶさん、私を見くびらないで頂きたい。どこぞの先代炎柱と違い、酒に酔った勢いで彼女をお持ち帰りしようとした人と比べないで欲しい。私は、それを殴って止めて柱から資産運用係に左遷された人材です。邪な気持ちなんて、ありません。ただ、辛そうな彼女を——」

「まって!! 今、おかしい話が紛れ込みませんでしたか!! 絶対、わざと挟んでいきますよね」

鬼滅隊でも一部の者しか知らない真実。

だが、結果的に先代炎柱の行動は、鬼滅隊にとって利益となった。柱として、前線で働くより、現役引退し後衛に回された彼の働きは、並の柱の比ではない。

「話を戻しますね。で、箱根に潜む鬼ですが……どうにも、山奥の秘湯に現れるとの事で大変でした。しかも、女性が入浴しているときにだけ現れる鬼とかで」

「あの、銀治郎さん。そんな変態な鬼がいるはずないでしょ!!」

「そんな鬼なんて、序の口です。鬼舞辻無惨なんて、強引に呼び集めた下弦の鬼達

を目の前に女装して現れてパワハラ面接を始める程ですよ。それに比べたら、入浴中の女性を襲う鬼の方がまだ健全です」

真実しか告げていない裏金銀治郎。

だが、毎度のことだが、胡蝶しのぶの絶対零度の疑いの眼差しが降り注ぐ。当然、胡蝶しのぶのご機嫌はドンドン悪くなっていく。胡蝶しのぶの中で姉は完璧な存在であった。貴方のような人は姉には相応しくない。だから、私ぐらいで我慢しておきなさいと……心のどこかでそんな思いが燦っていた。

「いい加減に嘘をつくのは止めましょうよ。姉さんの風呂を覗いたんでしょ？ そう言いましょうよ。今なら、指一本詰めたら許して上げます」

「私は、しのぶさんには嘘はつきません。お風呂は、覗いていませんよ。入浴中にしか現れない鬼でしたので、鬼が来た際に色々と見たのだけは認めますが――」

胡蝶しのぶがニッコリとほほえみ。

彼女は指に力を溜めて、全力のデコピンを放った。その破壊力は、カボチャの堅い皮を吹き飛ばし中身を抉る威力がある。そんな、殺人的な威力をその身に受けた裏金銀治郎は悶え苦しんだ。

「ぐああああ。ひ、酷い。正直に申告したら、この仕打ち。私が一体何をしたって言うんですか？」

「結局は、姉さんの裸を見た事实は、変わらないじゃないですか!! 嫁入り前の乙女の肌は、安くないんですよ」

ムカムカが止まらない胡蝶しのぶ。大好きな姉の話だというのに、この男は!! という感情しかなかった。だが、完全に裏金銀治郎は冤罪だ。そもそも、箱根での鬼退治ネタという時点でこのような王道展開は、当たり前である。それを責められる彼の方が可愛そうだ。

「ええ、その後、箱根で豪遊した費用は全部私持ちでしたよ。ほら、胡蝶さんの部屋にあった金魚鉢……イイ値段すると思いませんか？」

「も、もしかして、あの時ですか!! でも、姉さんが、現地の人がお土産を沢山くれたって」

「ええ、その現地の人が私ですね。一緒に、箱根に居ましたからね。良い仕立屋で着物まで買わされました。しばらく、米と塩だけの生活でした」

明かされる衝撃の真実。姉からの思い出のプレゼントにそんな過去があったと

は、考えたこともなかった。むしろ、知りたくなかった。話を聞けば聞くほど、泥沼にハマるような裏金銀治郎との会話。

「銀治郎さん——ご飯にしましょう。箱根の件は、大体分かりました。財布に打撃を受けたと言う事で一応許して上げます。それにしても、過去は人間関係、今は金銭問題と鬼滅隊、大丈夫なんですか？」

「少なくとも、しのぶさんが居なければ即死でした。じゃあ、約束通り、コレが私を作ってきたお弁当です。お弁当の中身を確認したら、一応じゃなくて絶対許してくれる気持ちになりますよ」

二人がお弁当を交換する。

胡蝶しのぶが用意したのは、男性が好きなお弁当に唐揚げが入っており、男が好きなお弁当を体現化した物であった。茶色一色のお弁当だ。

裏金銀治郎が、用意したお弁当を開けた胡蝶しのぶ。その中身を見て、動きが止まった。お弁当を凝視している。そして、まるで理解ができないと言った雰囲気を感じ取れるほどだった。

「銀治郎さん……どう反応すればよいか困ります。ですが、温泉の件は、許して上

げます」

「デフォルメ化した胡蝶カナエさんを再現するのは、苦勞しました。ですが、喜んでくれて何よりです」

用意されたお弁当は、未来で大流行するキャラ弁であった。そこには、胡蝶カナエが『よく頑張りました、貴方は私の誇りです。後、銀治郎さんを許してあげてね。お姉ちゃんからのお願いです』と台詞まで付けており、手の込みようが尋常じゃない。

海苔を使ってここまで精巧に再現するあたり、才能の無駄遣いであった。

「すこし、食べるのが勿体ないですね」

「早起きして作ったので、食べてください。好物の生姜の佃煮も力作ですよ」

一度も教えた事がない好物を何故知っているかという疑問に尽きなかった胡蝶しのぶだが。裏金銀治郎だから仕方がないとあきらめの境地に達していた。

その夜、男物のお弁当箱を洗う胡蝶しのぶを見つめる栗花落カナヲ。日輪刀を片手に、そのお弁当箱の持ち主を夜な夜な探す姿が目撃された。

さて、そろそろ 吉原編ですよね。

兄貴の方は、要りませんが……妹の方は若干欲しいな or z

音柱「俺は神だ」

善逸「はぁ!!? 神は、裏金さんでしょ。アンタに、シルヴィちゃんやすずかちゃんみたいな天使を俺の嫁にできるの?」

21..リーサルウェポン

日次投稿ができず、落としてしまい申し訳ありませんorz

どうしても執筆時間がとれなく許してクレメンス。

そして、運営からクロスオーバーいれろと怒られてしまったorz

蝶屋敷では、主人公一同が煉獄杏寿郎から鍛錬を受けている。同じ入院患者として、体が鈍らないようにと、実に有り難いものであった。だが、そんな主人公達がドンドン強くなる最中、裏金銀治郎の前に各方面から金の無心がされていた。

無限列車のせいで、鬼滅隊の財政状況は極めて悪い。だが、それを知る者達は僅かである。つまりは、平常運転で領収書や請求書が集まってくるという誰もが逃げ出したくなる職場だ。

鬼滅隊の金庫番として、裏金銀治郎は金策アイディアを提案し、認可を取るため産屋敷耀哉と面談していた。産屋敷耀哉も組織のトップとして、裏金銀治郎からの報告を確認しており、そろそろ来る頃だと思っていた。

産屋敷耀哉の体調は日に日に悪くなっており、現時点で半ば寝たきりである。そんな病人に対しても、容赦なく現実を突きつける男は仕事に誠実な裏金銀治郎だからできる事だ。

「お加減は宜しくないようですね、お館様。ですが、鬼滅隊の為、新たな金策アイディアをもって参りました」

「銀治郎には、何時も苦勞をかけるね。今度は、どんなアイディアなんだい」

産屋敷耀哉は、自らの勘で裏金銀治郎という男を見つけ、鬼滅隊に加入させた事を密かに自慢に思っていた。産屋敷家は、幾度もあった苦難を勘で乗り切ってきた。例えば、日輪刀の材料となる鉱石を見つけた勘、鬼に見つからない土地を当てる勘、嫁さんの排卵日を当てる勘など、様々だ。今代は、その中でも人材を見つucker勘が極めて冴えていたと言える。

「いくつか空里を取り壊して、アンブレラ・コーポレーションの工場を建設しま

しょう。今の時代、人の出入りがある以上、完全な隠蔽は不可能です。なにより、維持経費も馬鹿になりません。土地の有効利用をすべきです」

「わかった。空里の選定は、任せよう。それで、何の工場を建てるんだい？」

裏金銀治郎は、空里というシステムも必要性も理解している。だが、そんな予算はないのが現実だ。今後、刀鍛冶の里が襲撃されるのを知っているから、一つは残しておくべきだとも分かっており、それが彼にとっての妥協点であった。

なにより裏金銀治郎が氣にくわなかったのが、刀鍛冶の里の連中からの金の無心だ。空里の用意も里の連中からの依頼で幾つも建築された。援助金を貰って、空里まで用意させられ、維持管理費も出さされるとは、笑い話にもならない。

「ペ〇ローションと新商品のコン〇ームの大生産拠点にする予定です。これで、鬼滅隊の資金繰りも改善する見込みがございます。鬼滅隊は、人々の性活を守る為、尽力すべきです。それが、鬼を全滅させる近道です」

鬼滅隊は、裏で鬼を斬る。一般人は、鬼をヌルヌルにして殺す……または、突いて殺す。鬼を狩る人手不足すら、解消してしまう有能な提案であった。こんなマネができる男は、この時代に二人と居ない。

「期待しているよ銀治郎。そして、私に何かあったときは、輝利哉の事を頼んだよ」
裏金銀治郎は、危うく「お任せください」と言うところであつた。産屋敷耀哉の無駄に人の心を和ませる声色は、こういう場面にこそ使われるべきである。

認可がされたと同時に息子を頼むとか平然と会話に混ぜてくるやり方。まさに、裏金銀治郎がいつも胡蝶しのぶにやっている手である。

「何度もお伝えしておりますが、イヤでございます。ご子息の事でしたら、他の柱にご依頼ください。お館様のお体の事は理解しております。ですが、それとこれとは別の事です」

「残念だ。気が変わったらいつでも言ってくれ」

裏金銀治郎は、お館様に会釈して退室した。

そして、人々の性活を守る戦いが始まりを告げる。日本中の男達は、もはや蝶屋敷……いいや、胡蝶しのぶが居る方角に足を向けて寝れない。遠い未来、NHK特番「その時、時代がうごいた」が組まれる数で誰にも抜かれない記録を誇るのが彼女である。



裏金銀治郎の執務室に、胡蝶しのぶがソファ―に深々と座り寛いでいる。しかも、部屋にあった輸入品の珈琲豆を勝手に使うあたり、既に持ち主と同じくらい部屋の構造を知り尽くしていた。

その対面には、裏金銀治郎も座っている。

「それで、銀治郎さん。いつになったら、姉さんの仇の情報を教えてくれるんですか？」

「聞いても、直ぐに飛び出していかないとお約束頂けるのでしたら、いつでも」
裏金銀治郎は、当然約束を守るつもりでいる。だが、情報を聞いた瞬間に、飛び出す未来が見えたから、胡蝶しのぶから急かされるまで黙っていた。

「――もしかして、近くに居るんですか!？」

「まあ、現在地は把握しております。ですが、しのぶさんが特攻しても無駄死にします。準備が整うまで大人しく待って頂きたい」

胡蝶しのぶは、怒っていた。

それも当然だ。胡蝶カナエとも面識があり、自らが鬼滅隊に居る理由が復讐だと

知っている男が、姉の仇について一切の情報を鬼滅隊にすら提供していない。しかも、その仇が今どこに居るかも把握しているとすれば、誰だって怒る。

彼女からしてみれば、上弦の参を特に苦勞せず完封できており、上弦の弐である鬼を相手にしても負けることは無いと思っていた。勿論、それには裏金銀治郎というキーマンが必要なのも事実である。

「上弦の弐を殺す時は、銀治郎さんも惜しみない協力を期待して宜しいのですよね？」

「約束します。ですから、しのぶさんも無茶しないでください。しのぶさんが死んだら、私が仇を取るとか期待しては駄目です。しのぶさんが居ない鬼滅隊なら、国外に逃げ込んで天寿を全うするまで隠れ住みます」

鬼滅隊を見限る事を何とも思わない裏金銀治郎。ここまで清々しい男は、鬼滅隊でも殆どいない。

「約束と違うと言いたいですが……分かりました。まず、姉さんの仇と言っていた上弦の弐の素性を教えてください」

「名を童磨といいます。風貌は、胡蝶カナエさんがしのぶさんに伝えた通りですよ。

頭から血を被ったような文様の髪に、洋風の着物を着た青年の鬼。虹色の瞳が特徴的です。後は、扇子を武器にしています」

胡蝶しのぶとしては、姉が亡くなる際に自分だけに伝えた事をなぜ知っているのかと疑問に思っていた。だが、知っているだろうとも思っていた。それほどまでに、謎が多い男のポジションにいるのが裏金銀治郎である。

いつも集〇社情報と伝えているのだが、全く信じて貰えないのは裏金銀治郎の人物のなさである。

「本当に!! 色々と物知りなんですわね!! 私以外なら、情報を無理矢理吐かされて殺されている可能性もありますよ」

「何時も言っているじゃないですか、しのぶさんだから教えているんですって。それに、私は殺されるくらいなら逃げますよ」

胡蝶しのぶのコーヒークップが空になった。そして、何も言わずに新しい珈琲を注ぐ事ができる男が、そこに一人いる。砂糖とミルクまでいれて、渡す所まで完璧な動作である。

「それで、素性の続きです。童磨は、新興宗教「万世極楽教」の教祖をしています。

本当に、上弦の鬼はおかしな連中ばかりです。吉原の花魁、ツボを作る芸術家、臆病者、脳筋、教祖、呼吸の使い手とか。そのうち、琵琶を弾く女とか誰かの兄弟子とか加わる未来もあるかもしれません」

「……その名前の新興宗教なら耳にしたことがあります。なるほど、あそこの教祖が鬼でしたか」

裏金銀治郎が聞いてもいない、他の上弦の情報を公開したがスルーする彼女。良い具合に成長している。その位のスルー力がなければ、若白髪になってしまうだろう。

「では、私が無駄死にするといった理由は？」

「しのぶさんの毒では、殺しきれないからです。上弦の鬼ともなれば、毒への耐性は神がっています。耐性もついて、効果も薄れてしまう。最後には、鬼の餌食になります」

「でしたら、例の鬼を人間に戻す薬を使えば良いだけじゃありませんか」

「……やっぱり、そこに気がつきます？ 正直、その通りです。上弦の参相手に、一定以上の効果がありました。その改良版ともなれば、上弦の式相手でも効果はあ

るでしょう」

薬の開発者ともなれば、当然行き着く結論であつた。裏金銀治郎もそれを切り札の一つとしてゐる。鬼舞辻無惨を除けば、その方法で殺せない鬼は存在しない。

「ならば、簡単じゃないですか。銀治郎さんの血鬼術けっかい、血界で相手の血鬼術を封じて、私が相手に毒を与える。毒が効いている間に首を落とせば良いだけです」

「問題は、その血鬼術です。上弦の弐の血鬼術は、恐らく全鬼でも最強です。私の血鬼術のキャパを超えています。冷気を操る血鬼術で、肺を壊死させたり、自動攻撃する氷、広範囲の凍結攻撃。なにより恐ろしいのが、本体と同等の戦闘力を持つ分身を複数体つくれる事です。場合によっては、薬品が凍結して薬の役目を果たさない可能性もあります」

まさに、上弦の弐だけで、鬼滅隊を壊滅させられる強さを誇っている。チートオブチートだ。

「なんですか、それ。卑怯じゃありませんか。ですが、手はあります」

胡蝶しのぶは、裏金銀治郎の手助けがなくても殺す算段は考えていた。だが、胡蝶しのぶの身を案じる男としては、許しがたい行動であつた。

「鬼に喰われる事を前提に自爆など、不確定要素が多いのでお勧めしませんよ」
鳩が豆鉄砲を喰らったような顔をする胡蝶しのぶ。なぜ、誰にも言っていない秘策がバレたのかと。

だが、それならそれで彼女は勝ち筋が明るくなったと思っていた。裏金銀治郎がその手を既に考慮していたなら、それを上回る手段を用意していると踐んだのだ。鬼を殺す事に関しては、柱の誰よりもやり手である男だと信頼している証拠である。否定するなら代案はあるべきだ。それは、社会人として当然である。

「分かりました。銀治郎さん、それでは上弦の弐を殺す方法を教えてください」
「数に限りがあるので絶対に無くさないでくださいよ」

裏金銀治郎は、何の変哲も無い刀を一本テーブルの上に置いた。それは、日輪刀ではない。だが、鬼に対して絶対的な武器となる。

「普通の刀に見えますが……これがなにか？」

「しのぶさんは、日輪刀の材料をご存じですよ？ 陽光山という一年中陽が差している山から取れた鉱石。……世の中には、太陽の光が更に当たる場所があるんですよ。それも、地上とは比にならない程にね」

「えーと、つまり、どういう事ですか？」

「隕鉄で作られた刀……流星刀です。既に、何匹かの鬼で試しましたが、凄まじいですよ」

知識人である胡蝶しのぶは理解した。

日本でも希少で数に限りがある品物で、裏金銀治郎の伝手でも集められたのは数本だけだった。そんな希少な一本を胡蝶しのぶに惜しみなく渡す。

「銀治郎さん、そんな素敵な刀をお持ちだったのに、誰にも内緒にしていたなんて罪な男ですよ。すこし、施設の下弦相手に試し切りしてもよろしいですか？」

「ええ、私も試しました。その刀と今のしのぶさんの力なら、上弦の鬼相手でも首を落とせます」

刀の刀身を眺めて、素敵な笑顔になる胡蝶しのぶ。その笑みは、ぞくりと背筋が凍る程冷たく、美しい物だった。

下弦が切れれば、上弦はどうなのかと気になるのは人の性である。都合の良いことに、政財界のVIP達が大好きな吉原……その被害を最小限に抑える必要がある。煮ても焼いても美味しい、更には斬っても楽しい鬼退治の時間が始まる。

*****大正コソコソなんか!!*****

竈門炭治郎「善逸、禰豆子が何処にいるか知らない？」

我妻善逸「禰豆子ちゃんなら、シルヴィちゃんとすずかちゃんと遊んでるよ。な
んでも、夜の呼吸法を教えるとかで」

竈門炭治郎は、底知れぬ恐怖を感じてしまった。

→こんな感じ原作一行についても、少し触れようかなと。

22.. 男の娘

投稿速度が維持できなくてごめんなさい!!

誤字脱字もそして許してクレメンス…がんばるねん。

無限城——血鬼術で作られた異空間。

上弦の式が血鬼術での戦闘能力がトップならば、異空間を作る鳴女の血鬼術は、汎用性でトップである。その能力は、わかりやすく言えば「どこでもドア」と「四次元ポケット」を組み合わせたような能力だ。

その空間に、今上弦達が集められていた。

集められた上弦の誰もが思った。これから、下弦の鬼達に行われた恐ろしい面接が始まるのだと。上弦の鬼達も下弦の鬼達が、唐突に戦力外通告を受けて、リアル頸にされたのを知っていた。

今まで汗水垂らして会社に勤めたら、集合を掛けられ頸にされるとか血も涙もない。鬼かと言いたくなるが……上司はリアル鬼であった。

ベベンという琵琶の音が響く。

そして、現れる和服女装をした変態——その名は、鬼の中の鬼である鬼舞辻無惨であった。精巧な擬態能力があるにせよワザワザ女に変わるあたり、未来を先取った男である。男の娘とか、まさに鬼舞辻無惨が元祖であった。

しかし、その擬態能力を活かし切れていないのは、鬼から奪った能力だからである。能力を奪う前に、持ち主から使い方を伝授して貰わなかったのが、この結果である。所詮は奪い取った力であるとはよく分かる例だ。

そして、未来を先取った男の娘を見せられた上弦の鬼達も伊達ではなかった。変態だと大声で叫びたいのも我慢し、空気を読み即座に土下座!! プライドの高い鬼達ではあったが、鬼舞辻無惨から放たれる不機嫌オーラから命と天秤に掛けたのだ。

「ほほう、流石は上弦だ。即座に頭を垂れるあたり下弦とはデキが違う」

だが、その内心で鬼舞辻無惨は全くそんな事を思っていない。口だけである。

その様子に上弦達の心が一つになった「誰か、あの格好について突っ込め」と。

しかし、その事を鬼舞辻無惨が読むことはできない。

当然、彼等とて、上司とは長い付き合い。視界に映る範囲に居れば心が読めることなど知っている。上弦の鬼になって、まず覚えることは……いかにして、思考と心を分離するかだ。

それができなければ、上弦としてやっていけない。事実、上弦のメンバー補充があるときは、上司の機嫌を取り損ねた愚か者がいる時が常だ。

「やっぱり、呼び出されたのは猗窩座殿の件ですか？」

「そうだ。下弦が弱いのは、まだ理解できる。だが、上弦の貴様等が柱一人に殺されるなど、呆れて言葉も出ない。お前等は、どこまで無能なんだ。何百年も鬼滅隊を滅ぼせない。青い彼岸花も見つけられない!!」

鬼舞辻無惨の怒りのボルテージがドンドン上がっていく。前者については、確かに鬼達は無能である。それは、言い訳の余地などない。裏金銀治郎が鬼側に居れば、50年で鬼滅隊の財政を悪化させて、木っ端微塵にしていただろう。

だが、後者の青い彼岸花については、完全に鬼舞辻無惨が悪い。情報が曖昧すぎて、部下が困惑するのは当然だ。だから、鬼達もこの件については本気で探してい

ない。

「申し訳ございません。無惨様……産屋敷は、巧妙に」

「黒死牟、貴様がそれを言うか。元鬼滅隊の隊士であろう。なぜ、所在すら知らぬ
!!」

黒死牟の全身を激痛が駆ける。呪いの効果で、肉体の崩壊が始まった。上弦の壺である男でも鬼舞辻無惨の呪いの前では無力である。

しかし、黒死牟も責められて当然。裏切りの手土産に、元上司の頸くらいもってくる物だ。なのに、上司の場所は知りませんとか、話にならない。

「なぜだ!! 何故、貴様等はこうも無能の集まりなんだ!! 太陽は克服できない!! 鬼滅隊も滅ばせない!! 青い彼岸花も見つけられない!!」

鬼舞辻無惨に鏡を見せてやりたいと誰しもが思っていた。そもそも、最強の鬼と自称する上司が、太陽を克服できないのだ。それを自分より劣る部下に期待するの
もどうなのだ。

そんなパワハラが横行するから、誰も真面目に仕事をしない。もし、真面目に仕事をやらせるのならば、太陽を克服した後のビジョンも見せるべきである。現状で

は、太陽を克服したら『お前達は、用なしだ。裏切られる前に全部殺しておく』とか平然と言いそうだ。だから、非協力的になる。

「いやゝ索敵系は苦手で……」

「童磨、最近信者が減っているそうだな。何故だと思う？ 教えてやろう……本気で取り組んでいないからだ」

この時、童磨はしくじったと思った。

黙って、黒死牟を生け贄にして場を乗り切るべきだったと。少しでも、頑張っているアピールが敗因であった。

「金も食料も色々と——これ以上は、すこし無理かも」

「言い訳か？ 貴様に許された返事は、『はい』か『イエス』のみだ。分かったか!! 他の者達もだ!!」

「はい」

童磨のポジションは、鬼滅隊という裏金銀治郎と同じだ。ただ、その上司が天使と悪魔くらい開きがある。彼は、新興宗教の割には勢力も大きく、頑張っていた。鬼滅隊の柱も殺すし、資金も稼ぐ、餌となる人間も沢山確保している。これ以上、

要求するのは酷である。

上弦の鬼達の誰もが、嵐が過ぎ去るのを待っていた。口を開けば、何を言ってもネチネチと嫌みを言われる。しかも、激痛というおまけ付きでだ。

そして、最後に、鬼舞辻無惨から有り難い言葉が言い渡される。

「『無理』というのは、嘔吐きの言葉だ。途中で止めてしまうから無理になる。上弦の鬼たるものが『無理』と嘘をいうなど許せない。今後、『無理』と言う事を禁じる!! 途中で止めなければ必ずやり通せる。お前達は不死身なのだから」

この時、無惨の呪いに『無理』というキーワードも追加された。

そして、部下に一方的なお説教と呪いの枷を追加し、満足げに退場していく鬼舞辻無惨。それを見送る部下達は、災害にあったと思う事にした。



裏金銀治郎は、これから動く時代に向けて粛々と準備をしている。

むかし、偉い人が言ったように切り札を晒すときは、更に切り札をもっておくべきだと……実に良い言葉である。それを、くそ真面目に実践しているのが彼だ。

裏金銀治郎の狙いは、不死川玄弥という主人公達の同期だ。彼は、特異体質持ちで一時的に鬼の力を使う事ができる。その一点の才能で言えば鬼滅隊最強である事は間違いない。普通、鬼を食べても彼ほど力を付けることはできない。

そんな逸材と取引をする為、呼び寄せたのだ。

「不死川玄弥君、君は素晴らしい才能がある。是非、私と取引しよう」

「何の用事で呼び出されたと思えば、くだらね!! 悪いが他を当たれ」

兄同様に実に柄の悪い男であった。だが、鬼退治を確実に行うその仕事の実績は評価に値する。数字上では、主人公一行の中で鬼討伐数はトップであった。

不死川玄弥が席を立ち上がり、退出しようとする。

「私からは、下弦の肆の血肉。君が使う二連散弾銃の整備費用や弾薬を全て経費で提供しよう。後、私の権限で君に優先的に鬼討伐をさせる。そして、最後に――上弦の参から採取した血液を少量だが君に渡す用意もできている」

「あんな……まさか!!」

不死川玄弥が欲しい物を全て提示できるのが裏金銀治郎だ。利口な男なら分かるはずだ。誰に付いていくべきかと。

「鬼を喰っているのが、自分だけだと思っているのか？ 君が最速で柱になるには誰の手を取るべきだ？ さあ、椅子に座りたまえ」

「あんた最高にイカれているぜ。……いいぜ、その話のつてやる」

不死川玄弥は、自らの目的に裏金銀治郎を利用しようと考えていた。鬼滅隊でも、柱に次いで名前が売れている男である。そんな男が自分を必要だと思い、取引を持ちかけてきたのだ。

実の兄に認められるため頑張っていたが、それより先に裏金銀治郎にその才能を認められる事態になる。それが、彼にとって内心複雑であった。

……

……

…

隔離施設では、日々、珠世と胡蝶しのぶが鬼を人間にする薬の開発をしている。研究成果は、施設の鬼達で実験が行われるので、何時も裏金銀治郎が補充してくるのだ。その為、鬼達は、やっと死ねると彼女達を崇拜し始めていた。鬼達から女神様とか天使様とか賛美される彼女達は、とてもイヤな顔をしている。

「そそられますね」

「——今の発言は聞かなかったことにしてあげます」

胡蝶しのぶが素敵な顔をしていた為、思わず本音を口にしてしまった裏金銀治郎。だが、その気持ち理解できる男も多いだろう。胡蝶しのぶほど、青筋やイヤな顔が似合う女性は少ない。

「失言でした。研究が進むかと思ひ、面白い血液を持ってきましたので、是非使ってください」

「今度は誰の血ですか？ 上弦ですか？ まさかの鬼舞辻無惨ですか？」

「鬼舞辻無惨は、流石に難しいですよ。あの男が、花魁に会う際に狙うという事も出来なく無いですが、確実に私が死にます」

鬼舞辻無惨の出現情報をさらりと教える裏金銀治郎。既に、パターン化した流れで有り、胡蝶しのぶの冷たい視線が突き刺さっていた。

「貴方は、無惨の居場所が分かるのですか!!」

「違うと思いますよ。銀治郎さんは、分かるのではなく——知っている……：：：：：そんなんでしょう？」

この時、珠世は裏金銀治郎が未来視や予知ができる特異能力者だと考えた。妥当な線である。事実、そうでもなければ辻褃が合わない事が多すぎたのだ。

未来を先取って行動しなければ、実現不可能な事を幾つもやってきた。特に、上弦の参がまさにそれだ。あれほどの準備を整えて挑めるなど本来ありえない。

「しのぶさんには、こんど二人っきりの時に教えて上げます。今は、この血液を調べてみてください。鬼喰いをしている不死川玄弥の物です。彼は、一時的ですが、鬼に近い状態になれる極めて希有な存在です。更に、兄同様に稀血だと思われます」「カナヲの同期じゃないですか。あの世代、色々と偏りすぎじゃないですか」

胡蝶しのぶが嘆くのも当然だ。あの世代はおかしいのだ。実力的にも全員が柱となれる才能がある。

「それで、貴方はこの血をどうしろと？」

「目的は二つ。不死川玄弥の体質を第三者でも手に入れられる薬が欲しい。二つ目は、不死川玄弥の兄の稀血は、上弦の壺すら酔わすほど強力だ。弟の血でもそれを再現して欲しい。上弦の上位ナンバーを相手取るなら手数は多いに越したことはない」

珠世は、勝利に何処までも貪欲な裏金銀治郎を恐ろしく思っていた。これが人間なのかと。だが、それが人間である!!

きっと、善逸の嫁にまさかの!! っと思った人は残念でした><
みんな大好きなあの人です。

23.. プチ柱会議

いつもありがとうございます。

パワハラ面接上弦版……思いの外好評でうれしかったへーへ
きつと、あんな感じになるよね。

裏金銀治郎は、報告書を片手に頭を抱えていた。

そこには、政財界VIP達の吉原事情が載っている。そのような調査を行ったのには当然理由がある。まもなく、上弦の伍と吉原で死闘が行われる。目を覆いたくなる被害が出るのは当然の帰結。

その戦いで政財界VIPのお気に入りが死ぬ事態になれば、鬼滅隊も窮地に立たされる。鬼滅隊が大正の世で特別扱いをされているのには、彼等の大いなる力が働いているからだ。胡蝶印のバイアグラという餌を提供しているが、列車事故の隠蔽などにも多大に尽力してもらったので、貸しより借りが多い状態だ。

つまり!! 裏金銀治郎は、政財界VIPのお気に入りだけでも吉原から遠ざけるつもりでいた。だが、大きな問題は……やはり金である。理想的には、身請けして政財界VIP達に何時もお世話になっていきますとプレゼントすることだ。列車事故前ならそれも可能であったが、今の財政状況ではそれは不可能。

そして、思いついた案が隊士に守らせるという行為である!! その為、裏金銀治郎は鬼滅隊の運営資金から特別予算を捻出した。

「口が堅く、剣の腕にある程度自信がある者を選出して欲しい。階級に拘りはない。万が一の場合には、女を連れて安全圏に逃げられるそれだけでいい」

「あの〜裏金様。口出す事じゃないのですが、本当に宜しいのですか?」

「後藤君——君は、大の大人を背負ってかなりの距離を走れるね。安心しなさい、君の席は確保済みだ。リストの中から好きな女性を先に選んでいい」

会社の金で、女が抱けるとなれば靡かない男は少ない。しかも、政財界VIP達のお気に入りともなれば、上玉である。

裏金銀治郎の執務室に呼ばれた『隠』の後藤は、当初困惑していた。いきなりのお偉いさんからの呼び出し。そして話を聞いてみれば、会社の経費で女を抱く人選

をしてこいなど聞き間違いを疑うレベルだ。

鬼滅隊の金庫番と呼ばれ、金に細かい男に何があつたのかと!! 中身の入れ替わりを疑う程だ。

しかし、後藤という男は、忠実であつた……欲望に!!

「この後藤にお任せください。必ずや、裏金様のご期待に添う隊士を集めて参ります!!」

後藤は、『隠』と呼ばれる事後処理部隊の者。つまり、鬼滅隊の中で最も隊士の側にいる者達だ。だからこそ、隊士の人柄についても知っている事が多い。本人が知らなくても仲間の誰かが知っているなど普通にある。

後藤は、かつて無いほどのやる気を見せて、部屋を退出した。当然だが、その人選候補に我妻善逸が上げられる事は決して無かった。

……

……

……

独身男性隊士にとって、理想的な上司である裏金銀治郎。どこぞの上司とは、次

元が違ふ男である。だが、情報とは人が多いほどバレル物だ。口が堅いという条件で探させたが、「誰にも言うなよ」的な事で漏洩していくのは、過去も未来も変わらない。

だが、酷い事に噂には尾びれ背びれが付く。

何を間違つたのが、噂は二転三転し……裏金銀治郎に認められた者は、第二の我妻善逸になれるという噂話になってしまった。

コレに関しては、裏金銀治郎も何をどう間違つたのか理解を超えていた。そして、裏金銀治郎の執務室には、我先にと己を売り込む独身隊士達が長蛇の列を成していた。

「階級は、乙。水の呼吸を使います。下弦と戦い生き残つた経験もあります。必ずや、金柱様のお力になれます!!」

「近衛幸村君ですか、戦歴も申し分有りません。可視化できるほどの水の呼吸の使い手というのも非常にポイントが高い。しかし、君は噂を聞いて、ここに来たのではないのかね?」

「あの憎き——いえ、我妻善逸と同じく理想の嫁を探して貰えるというアレでしょ

うか。私は、そのような噂に踊らされてはおりません。吉原で最高の女が経費で抱けると『隠』の者から選抜された一人です」

「ならば、なぜ私と直接面談を求めたのかね？」

「勿論、金柱の裏金銀治郎様にお名前を覚えて頂くためです」

裏金銀治郎は、彼の事を覚えた。鬼滅隊にしては、珍しい有能タイプであった。事実、その通りである。責任がない立場で適当に鬼を処理して、お金が貰えれば良いと考えている者だ。某サイコロステーキ先輩の上位互換版だ。だが、男である以上、理想の嫁は欲しいと考える極普通の思考の隊士である。異常者の集まりの中では希有な者であった。

「私としても君のような有能な人材が、隠れていたとは驚きだ。働きぶり次第では、色々と融通しよう」

裏金銀治郎が差し出した手を、握り返す隊士。

そして、彼が退出すると新しい隊士が部屋を訪れる。それが、夕方まで続いた。

それから数日後。

裏金銀治郎は、お呼び出しを喰らっていた。これから、吉原で人命を守る為、画策しなければいけないこの時期に何故だと不満に思った。

その呼び出したのは、お館様である。そして、その脇には風柱・不死川実弥と炎柱・煉獄杏寿郎の両名が付き添っていた。実に、物々しいと言わざるを得ない。柱の中でも上位の実力と言われる二人が揃ってこの場に居るのだ。

「すまないね銀治郎。この二人が、どうしても同席したいと言ってるね」

「いいえ、お構いなくお館様。それで、本日はどういったご用件でしょうか？」

この時、裏金銀治郎は大体の要件を察していた。流星に目立ちすぎたと後悔したが、後の祭りである。

そして、この場に呼ばれていない胡蝶しのぶ。裏金銀治郎と色々と噂があるため、公平を期すために、外されたのだ。

「てめえ!! 何を企んでやがる。何日か前、何人もの隊士がお前と会っているのを知らねーとも思っているのか。腕の立つ隊士が何人もいたそうじゃねーか」

「不死川実弥さん、私が隊士と会って何か問題でもあるんでしょうか？ 話した内容ですが、鬼退治に伴う人命救助を依頼していただけです。誓って嘘ではありません

ん」

このような下らない詰問をする為に、柱2名も同席させたのかと裏金銀治郎は、少し失望していた。だが、感情で動く風柱が殴り込んで来ないで済んだのは、産屋敷耀哉が止めたからに他ならない。

「だから、言ったではないか。裏金殿が謀反など企むわけがないと」

「だが、謀反を企んでいない証拠にもなっていない。柱が各地にいつている隙に、一部の隊士と裏金がいれば、決してできない事じゃない」

風柱は、産屋敷耀哉を崇拜するあまり、周りがよく見えていない。

産屋敷家がいてこそ成り立つ鬼滅隊である。謀反を起こして、実権を握ったとしてもトップが裏金銀治郎では、志の高い隊士は従わないだろう。金目的で働く隊士は別だが。

「実弥は、銀治郎が謀反を起こすと懸念しているんだね。それはない。銀治郎は、輝利哉の後見人を断った程だ。それなのに、謀反を起こしてまで鬼滅隊を手に入れようとは思わないよ」

「なんと!! お館様のお断りを断るとは、理解しがたい!! どういった理由で断っ

たのだ」

柱の両名は、後見人を断ったという事より、後見人になぜこの男がと思っていた。風柱の中では、納得ができなかった。彼は、自分が選ばれる事は決してないことは理解していた。

では、誰が後見人に相応しいかと言われれば——胡蝶しのぶ。現役柱達は、口を揃えて彼女の名前を口にするだろう。戦闘力以外の面で、彼女はどの柱よりも優れていた。それに、女性だからこそ、輝利哉と子供を作れる。そうなれば、色々と安泰だとすら思っていた。

そんな夢物語が実現された場合は、鬼とは別の新勢力が誕生する可能性もある。場合によっては、新しい上弦の鬼が誕生するだろう。

「柱の皆様そういう所です。お館様を崇拜するのは構いませんが、ソレを他人に強要しないでください。柱の皆様と私では、主義主張が違いすぎます。そんな私が、輝利哉の後見人になったら、柱の誰かが私を殺しにくるのは明白。私は死にたくありませんので」

「気に入くわねー、気に入くわねー!! 五体満足のくせに柱を引退して裏方に移動し、

コソコソ動く奴が、偉そうな主張をしやがる」

裏金銀治郎は、煉獄杏寿郎を見た。誰のせいで柱を引退して資産運用をするようになったのか、この場でぶちまけてもいいのだが、配慮した。煉獄杏寿郎とは、友好的な関係でいたいため、親の恥を晒すのは申し訳ないと判断していた。

「実弥が言いたいことも分かる。だけど、銀治郎が居るおかげで鬼滅隊が回っているのも事実。それを見ないふりして、一方的に文句をいうのは良くない。銀治郎も、一言二言多い。相手に合わせて会話する事も君ならできるはずだ」

「申し訳ありません、お館様。ですが、謀反の可能性を否定し切れたわけではありません。給与管理と資産運用を担当する身であれば、鬼滅隊の資金を私的利用している可能性もあります。謀反とは、武力以外でも起こせる可能性は十分にございます」

人、物、金——その全てを操作できる立場にいる裏金銀治郎。だからこそ、疑われても仕方が無いところもあった。事実、遊郭費用などは人助けという名目ではあるが、会計上グレーである。

しかし、その程度の金額は、裏金銀治郎が鬼滅隊の為に稼いだ金額と比較すれば

ゴミみたいな物だ。

「良い視点をお持ちです。ですが、お館様も先ほど仰ったように私には鬼滅隊を乗っ取るメリットがない。なので、不死川実弥さんが危惧するような事態にはなり得ません。お館様の意を汲んで、この平行線な話し合いを止めましょう」

双方不完全燃焼ではあったが、お館様の取りなしにより、解散となった。



胡蝶しのぶは、栗花落カナヲの変化に気がついた。

以前にも増して、話をするようになった。感情も表に出すようになった。

——とある雑誌には、「女を変えるのは男」という素晴らしい言葉が掲載されている。女子力を絶賛強化中である胡蝶しのぶもその雑誌には目を通していた。

そこで、大きな問題が出てくる。

任務以外では蝶屋敷から殆ど出ない栗花落カナヲ。そんな彼女に影響を与える男とは誰なのか。蝶屋敷の入院患者という線が濃厚だ。しかし、栗花落カナヲに影響を与えそうなほどの男は、一人しか思い浮かばなかった。

「師範、男の人って何をあげれば喜ばれますか？」

「——ねえ、カナヲ。プレゼントをあげる相手が分らないと、流石に答えられないかな」

無自覚に胡蝶しのぶの心にダメージを与える継子の栗花落カナヲ。年齢〓彼氏いない歴の彼女に、男性へのプレゼントとか、ハイレベルな質問をする。剣術では師範であるが、女子力では栗花落カナヲの方が師範であった。

「……」

顔を赤らめてそっぽを向く栗花落カナヲ。

胡蝶しのぶは、日輪刀を持ち「少し出かけてきます」と、栗花落カナヲに告げる。その夜、元金柱の屋敷に刀を持った強盗が押し入る事件が発生した。その犯人は、一夜を強盗先で過ごす。

さて、花魁でもたべにいこう——

男の肉はまずそうだから、女の方が良いよね。

24.. ハメられた（意味深）

いつもありがとうございます。

感想も本当にありがとうございます。

誤字脱字指摘も助かっております＞＜

読み汚し誠に申し訳ありません。

何時もより短くなってしまうけど、無理に話をかくより

切りよくという事で許してクレメンス。

胡蝶しのぶは、甘露寺蜜璃と茶屋で食事を楽しんでいた。

鬼滅隊御用達の茶屋であり、運営を鬼滅隊OBや隊士の親族が行っている。その為、普通のお店では話せないような鬼の話題や鬼滅隊の裏事情などが、よく飛び交う。

柱達も利用するこのお店——気を利かせて、柱の人は専用の個室へと案内され

る。柱と一緒にでは飯がまづくなると一般隊士に氣を遣っている結果だ。

「しのぶちゃんは、最近変わったよね。いつにもまして綺麗だし、更に女らしくなった氣がする。」

「そうですか、別にそんな事はないと思いますよ。それより、そんなに食べて大丈夫ですか？」

甘露寺蜜璃の前には、ぜんざいがバケツ一杯というレベルで置かれている。見ていっただけで吐き氣がするほどの量であった。しかし、それを当然の如く食べる彼女は、恵まれた體質が故にだ。

女というのは、スタイルを氣にする。古今東西それは変わらず、美しさを保つため食事にも氣を遣う必要がある。だが、彼女はいくら食べても太らないという女性なら誰でもうらやむ特異體質だ。

「大丈夫です!! だって、鬼討伐の帰りだから全部経費精算だよ」

「そういう意図じゃ。でも、そんな事がよく認められましたね」

食費だけで、並の隊士の給与分は軽く食べる彼女である。それが高級店であれば、柱の彼女の給料でも支払は厳しい物があつた。だが、そんな彼女の事情を知る

者が手を差し伸べたのだ。

経営者視点で考えれば——飯代を経費精算するだけで、柱が喜んで鬼退治をしてくれる。コストパフォーマンスを考えれば、悪くない。

「裏金さんが、『君の働きは、隊士数十人分だ。プライベートの食費は、自己負担してくれ。但し、鬼退治の帰りならば全て経費精算しよう』なんて、言ってくれたのよ。年齢の割に若く見えますし、元柱で実力もある。それに、見た目もかっこいいし、お金持ちみたい——狙ってみようかしら」

それに対して、間髪入れずに胡蝶しのぶが反論した。

「止めておきなさい甘露寺さん。あの男は、ケダモノです。甘露寺さんのような、チヨロイ人にはお勧めしません。伊黒さんにしておきなさい。彼は、貴方に気があるようですし、告白すればそのままゴールイン確定です。保証します」

男は、みんなケダモノである。当然、けだもの獣の呼吸的な意味ではない。

胡蝶しのぶは、先日の事を思い出していた。継子である栗花落カナヲが、裏金銀治郎の家に胡蝶しのぶが向かうように仕向けた日の事を!!

栗花落カナヲは、竈門炭治郎の事が気になっていた。それを察した裏金銀治郎

は、彼が持つ竈門炭治郎の情報を全て渡したのだ。家族構成から好物、今までの任務状況、過去の女性関係、親族の情報。何も言わないでも、必要な時に必要な物を提供してくれる裏金銀治郎は、栗花落カナヲにとって、恩人であった。

そして、出来る女である栗花落カナヲは、行動を起こした。

胡蝶しのぶと裏金銀治郎の双方の気持ちを理解している彼女は、恋のキューピットになる事を決意する。胡蝶しのぶが、裏金銀治郎の誕生日を把握していれば、もっと別の手段に出ていただろう。思い人から誕生日にプレゼントの一つも貰えないのは可愛そうだと思い、今までの恩を返す事にした。

そして、師範がプレゼントになれば良いと、彼の誕生日に胡蝶しのぶプレゼントを贈った。まさに、天才であった。花の呼吸が使えるのは伊達ではない。師匠の花すら散らすのだから――。

独身男性の家に、夜にお邪魔するなど色々とアウトである。当然、朝まで同じ寝床を共にする。誕生日の夜に独身男性の家に訪れれば当然の結果。勿論、合意の上でと付け足しておこう。

翌朝、胡蝶しのぶの朝帰りを待っていた栗花落カナヲ。最初の台詞は、お帰りな

さいでは無く、「昨日はお楽しみでしたね」という名台詞だった。この時ほど、胡蝶しのぶは、栗花落カナヲが誰の継子なのか疑問に思ったことはなかった。

大事な事だが、竈門炭治郎が自分の気持ちに素直になれといったせいである。

「——もしかして!! しのぶちゃん、おめでとう!! それなら、早く言つてよ。それで、それで、出会いからシッポリと行くまでの経緯を詳しく教えてね。私も参考にするから」

「銀治郎さんとは、ビジネスライクな関係です。甘露寺さんが考えているようなやましい関係ではありません!!」

「しのぶちゃん、ソレは無理があるかな。だって、お店に来る途中から歩き方に違和感があったよ」

甘露寺蜜璃も柱である。恋話が好きで、自分より強い男と結婚する為に鬼滅隊にいるとはいえ、剣士としての実力は最高位。つまり、胡蝶しのぶの体の異常にも気がつく。当初は、女の子の日と思っていた、話を聞く内に確信に至ったのだ。

既に、女として一歩先に進んでいると。

「……銀治郎さんには、お世話になってるので。そのお礼で」

「ダウト!! しのぶちゃんって、そんな人じゃありませんよね。お世話になってい
るからといって、そんな事をする人じゃありません」

人の恋話ほど楽しい物はない。自分には一切被害が及ばない上に、ネタとして美
味しいことこの上ない。しかも、甘露寺蜜璃が鬼滅隊に入った目的を鑑みれば、胡
蝶しのぶは良い観察対象であった。

同じ道を辿れば、自分もと考えていた。だが、彼女は何故、伊黒小芭内という存
在に目を向けないのか、誰しもが疑問に思っている。伊黒小芭内が、空気過ぎて不
憫である。

だが、柱の男達は、絶食系男子かと言うほど、へたれが多かったので仕方が無い。
「あのー、甘露寺さん。そんなに、人の話を聞いて面白いですか？」

「もちろんよ!! だって、しのぶちゃんとあの裏金さんだよ!! 何処がどうなって、
どう繋がったのか気になるじゃない!!」

現役柱の胡蝶しのぶは、その美貌から惚れる男性隊士も数多い。蝶屋敷での治療
もあり、その人気は留まることを知らない。一方、裏金銀治郎……女性隊士から人
気がある一面、鬼滅隊の金庫番として現場からは疎まれている傾向がある。

美男美女である二人が、男女の仲になったとあれば、そりゃ話を聞きたくなる。だが、既に、色々と噂されていた二人だ。なるべくしてなったとしか考えていない者達が大半だ。

「下世話な話はしませんからね!!」

「ええゝ!! しのぶちゃんのケチゝ、減るものじゃないからいいじゃない」

甘露寺蜜璃は、胡蝶しのぶの話を聞いて一つ思ったことがあった。裏金銀治郎は、よく我慢してたなと。



産屋敷耀哉は、体調が悪いにも関わらずとても喜んでいた。上弦の参を倒した時と同じほどに。

「そうか!! よくやった、しのぶ」

産屋敷耀哉は、持ち前の勘で今日あたり、裏金銀治郎と胡蝶しのぶが男女の関係になるのではないかと察していた。そして、鎧烏が秘密裏に二人の行動を監視させていた。

これで、裏金銀治郎では無く、胡蝶しのぶを鬼滅隊に縛り付ければ必然的に裏金銀治郎も付いてくる。これも、産屋敷耀哉の努力の結果でもあった。二人の予定が合うようになるべく鬼退治を振らずにいた。しかも、夜は可能な限り二人ともフリーになるように画策も行っていた。

裏金銀治郎ともあろう男が、ハメていたと思ったら、実はハメられていたという驚愕の事実である。

「では、早々に式の準備に取りかかりましょう」

「あまね、銀治郎は鋭い。私達が裏で動いていたとなれば、この理想的な状況が崩れかねない。大丈夫だ、彼は誠実な男だ。仕事にも女性にも」

ここまで来たら何もしないのが一番良い。胡蝶しのぶは、産屋敷ひなきを養子にしている。どのように転んだとしても、産屋敷の血筋が途絶えることはない。

「裏金銀治郎が優秀な隊士である事は分かっております。しかし、彼は危険ではないでしょうか。今までの仕事は把握していますが、異常です。恐らく、私達に報告していないような事も色々行っているでしょう」

「そうだね、あまねの心配はもつともだ。だが、銀治郎でなければ、鬼滅隊は支え

られない。事実、彼がいなければ何ヶ月も前に鬼滅隊は無くなっていた」

産屋敷あまねも、裏金銀治郎からの報告書を目にして、頭を抱えたことを思い出した。

信じられない財政状況であり、何から手を付けるべきかも分からない程であった。それなのに、裏金銀治郎は誰にもマネできない方法でお金を稼ぎ出し、一気に状況を好転させていった。

その手腕は、神がかりである。

「分かりました。裏金銀治郎には、このまま何もしないでおきます」

「ソレで頼むよ、あまね。私の勘では、裏金銀治郎という存在は、鬼舞辻無惨への最大の切り札になるはずだ」

ローションにコールドーム……それだけで、鬼達がどれだけ死に至ったか、数えるのが困難になっていた。新聞でも消える死体という、怪奇現象が紹介されるほどだ。それらに関わっている裏金銀治郎。

この男が居なければ、無惨の呪いキーワードに『無理』という恐ろしい言語が追加されることもなかった。この呪いのせいで、鬼舞辻無惨が100年掛けて増やし

た鬼が僅か2週間で死ぬほどの被害がでた。
その為、切り札といっても過言ではない。

次こそは、吉原へ!!

25.. 気持ちは、本当に分かります

いつもありがとうございます!!

本来なら感想をお返ししてから投稿しておりましたが、日次投稿を優先しました。明日にはお返しさせて頂きます。

読者の皆様の通勤時間の暇潰しになれば幸いです。

誤字脱字報告いつもありがとうございます。

大変助かっております。

音柱……大正の世まで生き残った忍者の宇髄天元である。忍びという隠密に優れているかという点、残念だ。某忍者漫画も同じだが、堪え忍ぶという大前提が抜け落ちてしまっている。

そんな、男が裏金銀治郎の執務室を訪れていた。

「嫁からの連絡が途絶えた。これから吉原に向かう。裏金さん、同じ鬼滅隊の者同

士協力しよーじゃねか」

「協力といいましても、何時も協力している気がしますよ宇髄天元さん」

音柱は、真剣であった。

大事な嫁との連絡が途絶えて、今すぐにも吉原で搜索を開始したかった。だが、無策で挑めば、嫁すら助けられずに返り討ちにあう可能性もある。よって、裏金銀治郎に協力の依頼を持ちかけたのだ。

他の柱でも無く、裏金銀治郎が選ばれた事にはそれ相応の理由があった。

「吉原の遊郭に隊士を派遣するそうじゃねーか。しかも、時期が俺が現地入りするタイミングとドンピシャだ。あれだけの隊士を動かせる人物は、鬼滅隊でも二人しかない。お館様と裏金さん——あんただ。まさか、何の情報もなくあれだけの人と金を動かすはずはねーだろう？」

「私は、鬼滅隊を支援してくれている人達のお気に入りを避難させたい。ですが、私は柱の皆様と仲良くしたいので、持っている情報を提供しましょう」

裏金銀治郎は、引き出しから調査資料を提供した。

その資料は、吉原の遊郭でペ○ローションを採用していないお店やコンドームを

使っていない遊女の情報だ。つまり、鬼である可能性がある女の情報である。夜の道具が、鬼をあぶり出す道具に早変わりする。

資料の情報と宇髄天元が持っている情報を合わせれば、鬼が潜む場を厳選する事ができる。

「いい資料もってんじゃねーか!! これで、派手に鬼を殺しに行けるぜ。だが、その前に!! 風柱の一件は聞いている。悪かったな、何も口添えできなくて。言い訳になるが、俺が知ったのは、全てが終わった後だ」

「別に気にしないでください。私は、これでも自分の立場をよく理解しています。現場の柱の人が快く思わないのも当然です」

「まったく、損な性格してるな」

宇髄天元は、裏金銀治郎の事を高く評価していた。宇髄天元の嫁については、誰しもがセットで考えている。音柱の嫁1、嫁2、嫁3のように。その為、裏金銀治郎が給与管理を担当するまで、不憫な思いばかりをしていたのだ。つまり、給料は宇髄天元の分だけ。

全くもって酷い話だ。くノ一である彼の嫁達は、大変優秀である。潜入任務もで

き、諜報活動もできる。世間では評価されない項目かも知れないが、鬼滅隊では評価されるべき項目であった。だから、裏金銀治郎が改革したのだ。

待遇改善により、彼等の生活や任務が劇的に効率化された。最近では、ローションとコンドームという女の武器も手に入り、下手な隊士より鬼を殺している。

「当たり前のことをしていただけです。それと、吉原には恐らく相当強い鬼が居るでしょう。宇髄天元さんに、心ばかりのプレゼントを用意させて頂きました。柱専用の緊急活性薬と上弦の鬼すら酩酊させる臭い玉、業務用ローション」
机に並べられる最新の鬼退治武器だ。

音柱も火薬玉など忍具を用意していた。忍具は、確かに強い……だが、ソレは対人においての話だ。自己回復する鬼には、効果は薄い。

「なあ、裏金さんよう。ここ最近、色々と新しい物を作りすぎじゃねーか。俺は、鬼が殺せて嫁達が安全に暮らせるなら何でもイイがな。その材料が何であれ気にしない」

「古来より、敵の兵器を鹵獲して使うのは戦争の常です。私も、宇髄天元さんに同意ですね。貴方とは、仲良くできそうです」

彼の中で、裏金銀治郎という男は、岩柱同様に得たいの知れない存在に位置づけられていた。表向きには胡蝶しのぶが作った後されている最新兵器が、裏金銀治郎考案だとウスウス感づいていたのだ。

だが、賢い男はそれを口にしない。

……

……

…

任務を負えて、愛しの妻達が待つ蝶屋敷に戻ってきた我妻善逸。

鬼退治に連れて行くには危ないので、血の涙を流し妻達をおいて仕事に赴いていたのだ。仕事をしないという選択肢は、我妻善逸には存在しない。裏金銀治郎との契約を守る使命があった。

「まっててね、お土産沢山買ってきたから」

我妻善逸の給料は、全て妻達へのお土産と変わっていた。お土産の中に業務用ローションや箱入りコンドームがダース単位であるのを除けば、至って普通のお土産である。鬼滅隊のフロント企業の商品を隊士が買う……そして、その売上げが給

料になる。

鬼滅隊の隊士達は、我妻善逸の性生活のおかげで飯を食っている事になる。これが知られれば、我妻善逸ブッコロし隊の隊士は、首を吊るかも知れない。

朝の訓練、昼の訓練、夜の訓練と柱も真つ青な訓練のおかげで、我妻善逸の能力は飛躍的に向上していた。下半身の強化により、重心が安定したのだ。今では、壱ノ型霹靂一閃 神速を3連続で使える程になっていた。

流石は、原作でも一度も刀を折った事がない有能である。その才能は、竈門炭治郎より上ではないかと裏金銀治郎は考えていた。

「助けてくださいご主人様」

「善逸様」

蝶屋敷の方から聞こえてくる妻達の声。声を聞くと同時に、トップスピードで妻達の元に駆け寄る。その速度は、音柱でも油断をすれば危ないと思うほどで有り、並の隊士が出せる速度でない。

そこには、宇髄天元が二人の我妻善逸の妻達を抱えていた。その目的は、吉原での潜入任務に女が必要であったので、蝶屋敷で調達していた。そこで、目に付いた

のが何処に出しても恥ずかしくない淫魔がいたので、採用したに過ぎない。

彼女達に目を付けた宇髄天元の目は正しい。彼女達なら、花魁も夢では無い。

「シルヴィちゃんとすずかちゃんを返して貰おう。例えば、あんたが筋肉の化け物であつても俺は一步も引かない」

「……」

我妻善逸から迸る殺る気は、ヒシヒシと宇髄天元にも伝わっていた。自信に満ちたその声は、訓練の成果と実績、嫁達の前で恥ずかしい姿は見せれないという意地からきたものだ。

だが、それでも負けないのが柱である。宇髄天元も対抗し殺気を飛ばす。

「あつそお。じゃあ一緒に来て貰おうか。こいつ等の代わりに来るんだから、それ相應の働きはして貰うぞ。で、こいつ等はお前の親戚か？俺の目から見ても、かなりの女だ。誇って良いぞ」

「俺の嫁達だ」

我妻善逸の言葉に、嘘だと断定する宇髄天元。コレほどの上玉が、へんちくりんの嫁など、天地がひっくり返っても無いと考えていた。隊士の誰もがそう考えてい

た。よって、一つの結論に行き着く。

「おめえ、幾らモテないからって脅迫とかサイテーだぞ」

「ちげえーよ!! 本当に俺の嫁だって!! そうだろう、炭治郎!!」

「気持ち、本当に分かりますが……善逸の言っていることは本当なんです。裏金さんが、連れてきた子です」

竈門炭治郎も匂いで分かるとは言え、裏金銀治郎が絡んで居なければとうてい信じられなかった。待ちで評判の美人と言われた妹と同等以上の女の子を簡単に見つけ出して、我妻善逸の嫁に仕立て上げたのだ。しかも、相思相愛に至っているなど誰が信じられるか。

「武器だけじゃなくて、人まで売り買いしているのか……何やってんだか」

本人の居ないところで、酷いいわれをする裏金銀治郎。



吉原の一角にある空き屋。

鬼滅隊が所有している物件の一つだ。本来であれば、壁屋という一風変わった遊

郭がオープンしている筈だった。だが、組織のトップであるお館様の意向で不認可となり、事前に確保していた土地と家だけが残っていた。

後から吉原の鬼退治で拠点として利用しようと思っていたので、そのまま残していたのだ。日輪刀、緊急活性薬、爆薬、銃、ローション、コンドームなど必要物資が全て揃っていた。

その拠点には、裏金銀治郎と胡蝶しのぶが滞在している。

上弦の鬼との戦いを目前だというのに、胡蝶しのぶの機嫌はとても悪かった。流星刀の実験ができる絶好の機会だというのに、何故だろうかと裏金銀治郎は納得がいかなかった。

「しのぶさん、ほら笑顔笑顔」

裏金銀治郎は、両手で胡蝶しのぶの頬を触り笑顔を作り上げる。頬を触ると、赤らめて女の顔になる胡蝶しのぶ。男に顔を触られるなど、今まで想像した事もなかった彼女だが、存在が悪くないと思ってしまう。

甘露寺蜜璃にチョロイと言っていた本人も存外チョロかった。

「銀治郎さん、私ってそんなに子供っぽく見えますか？ここに来るまで、どいつ

もこいつも!! なぜ、お父さんに売られる子供だとみんな勘違いしてくるんです!!」
だが、裏金銀治郎とて同じであった。なぜ、父親だと勘違いされ、『あんた、娘を売るつもりかい? 人間のくずだね……で、幾ら欲しいんだい?』とあからさまな値段交渉が幾度も行われた。

胡蝶しのぶ程の器量の女性なら、吉原で花魁確定である。見る目があるスカウトマンがこぞって声を掛けるのは当然だ。

「大丈夫です。しのぶさんは、大人です。私が一番理解しています」

「……なんか、含みがある言い方ですね。で、鬼滅隊の拠点が吉原にあるなんて聞いたことありませんでした。普段、金がないと嘆いていたのに、何故こんなのをあるんですか?」

胡蝶しのぶへの回答を一瞬迷ってしまう裏金銀治郎。だが、常日頃、彼女にだけは正直でいようとする男であるので、素直に教える。

「隔離施設で確保している下弦の肆。アレの下半身だけをここで遊女として活用しようと思ったんです。鬼滅隊の新たな資金源としてお館様に提案したら却下されました」

「へえ、初耳ですよ。でも、下弦の肆といえ、私も協力して確保したアレですよ。裏金さんは私を口説きつつ、陰では女の裸をね」

可愛らしい人だ。それが、彼女の今を見た裏金銀治郎の感想だ。

胡蝶しのぶの色々な顔を見たい。反応を楽しみたいと考えてしまうのは男の性だ。決して、裏金銀治郎は悪くない。彼女の方から誘っているのだ。

「しのぶさん、いじらしい貴方は本当に可愛らしい。私は、しのぶさんの事を好きになれて本当に幸せです

「この男はああああ!! どうして、二人っきりの時にそんな台詞を言うんですか。真顔で損なこと言わないでください。恥ずかしいでしょ、銀治郎さん」

二人以外だれも居ない吉原の一角。鬼退治の備品……ローションとコンドーム。必要な物は全て揃っていた。当然、布団も一つはあった。

「そういえば、甘露寺蜜璃さんが領収書を持ってきた際、『裏金さんって、ケダモノだったんですね』と言っておりました。どういふことでしょうね、しのぶさん」
「さ、さあ。どうしてでしょうね」

マズイと思った胡蝶しのぶ。だが、後の祭りである。すでに、裏金銀治郎によつ

てホールドされていた。

「知っていましたか、上弦の鬼との戦いは、明後日なんです。つまり、今夜から明日は、お互いフリーです。今度は、紳士的にと思っておりましたが気が変わりました。ケダモノはケダモノらしくやらせてもらいます」

「話し合いましたよ!! 落ち着いてください。まだ、本調子じゃないんですって」
布団に押し倒される胡蝶しのぶ。だが、逃げ出すことはしない彼女は、割とこの展開を望んでいたのだ節があった。

アンケート機能なるものがあるらしいので、今度使ってみます。

『陰』の後藤の話、鬼柱の話、我妻善逸の3人目の嫁の話、裏金銀治郎とお館様の出会い、胡蝶しのぶが強盗に入った日の話など色々候補を検討中です――へ

鬼滅の金庫番

著者 新グロモント

発行日 2019 年 11 月 15 日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-
<https://syosetu.org/novel/205168/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。
